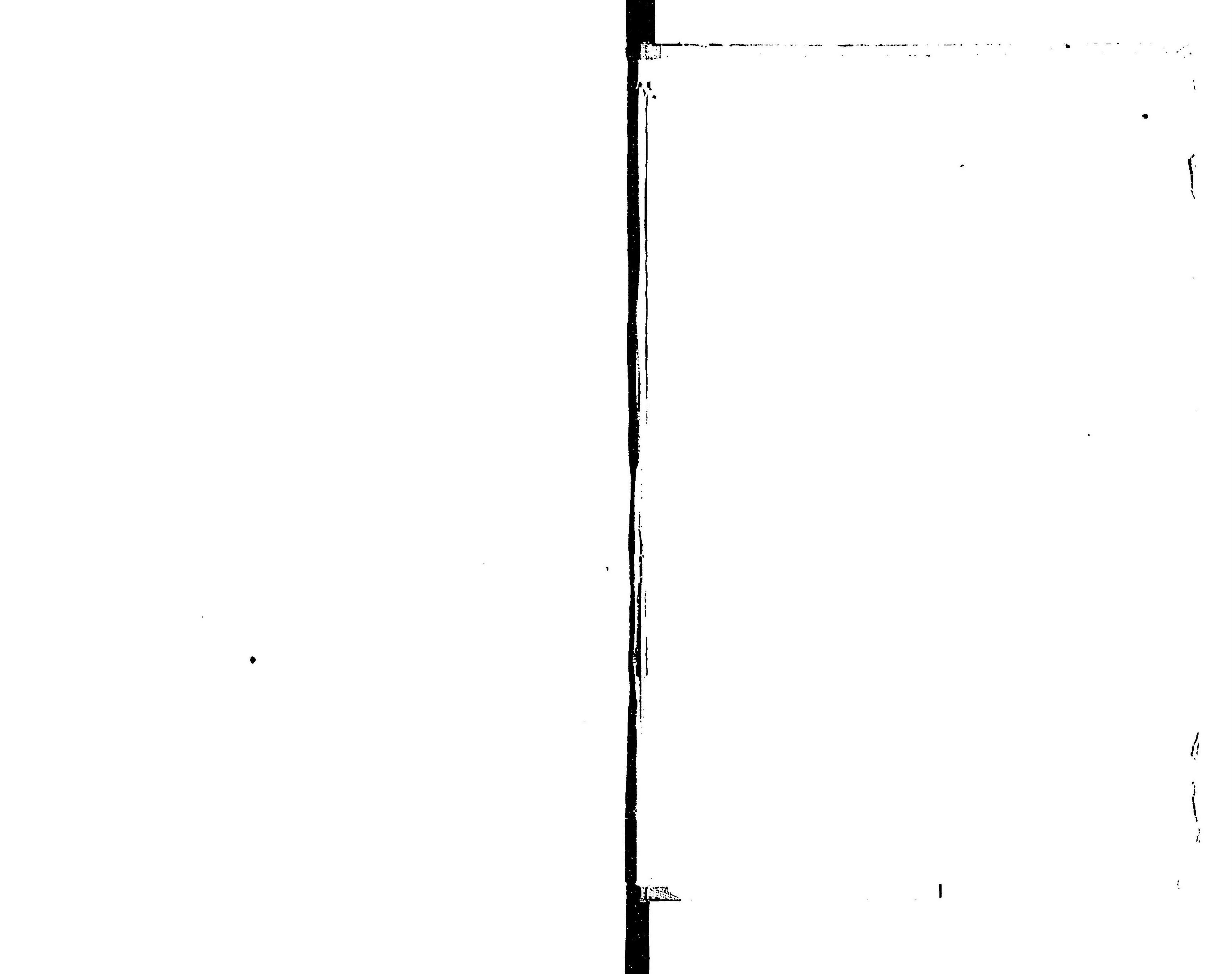


一木諸國物語

全







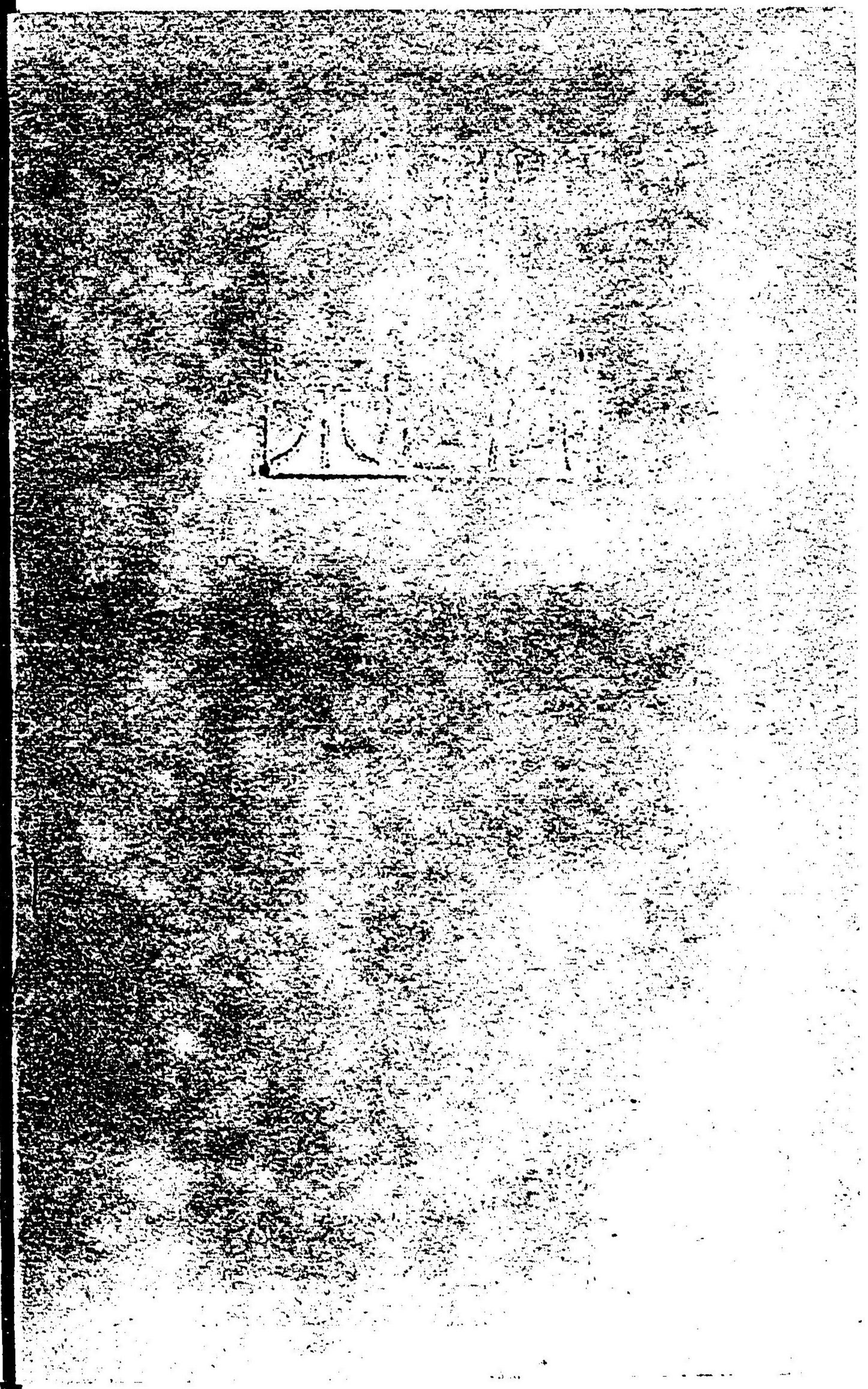
東國物産

東國物産図繪

平田 止水居士輯  
基定補正

青肆 駿々堂本店梓

東國物産図繪



それ一休和尚之後小松院の二の宮おてましませり世は人の耳も残れ  
るは歌も後の小松の二葉と詠し玉ふも有けるとかや誠おいとも賢と  
ましく尊き高位をふみちらし大内をおどり出て十宗をたゝ一目お  
よらみつけ達広宗とあり玉ひて九年面壁を盗人のあどの棒ちきり木  
と見立ては身と麻からやと共思しめを浮世をむやうたんよりせの  
るえ持なしとましまなるとをさらとせ玉ひは心と誠や竹を二つよと  
りたる如く路人は口碑にゆれと舌の先は障とし侍ると仰られしえい  
よく有かたかりけるは幼年の頃より才智万人よそぐれせたまむ  
て諸國は雲水の間より諸人を導きたまむまそくは一代濟度は意  
のみお渡らせ玉ふ事の咄しのふるたゆともは多きを見るおつけ聞よ  
つけ拾ひ集めて諸國物語圖會ととまし茶るとかや

止 水 敬 白

山居窮僧  
聽松風

須臨濟  
德山禪

一箇位山

三千年

公案上支  
了畢後

長松月皎  
四龍參眠

唐李太白

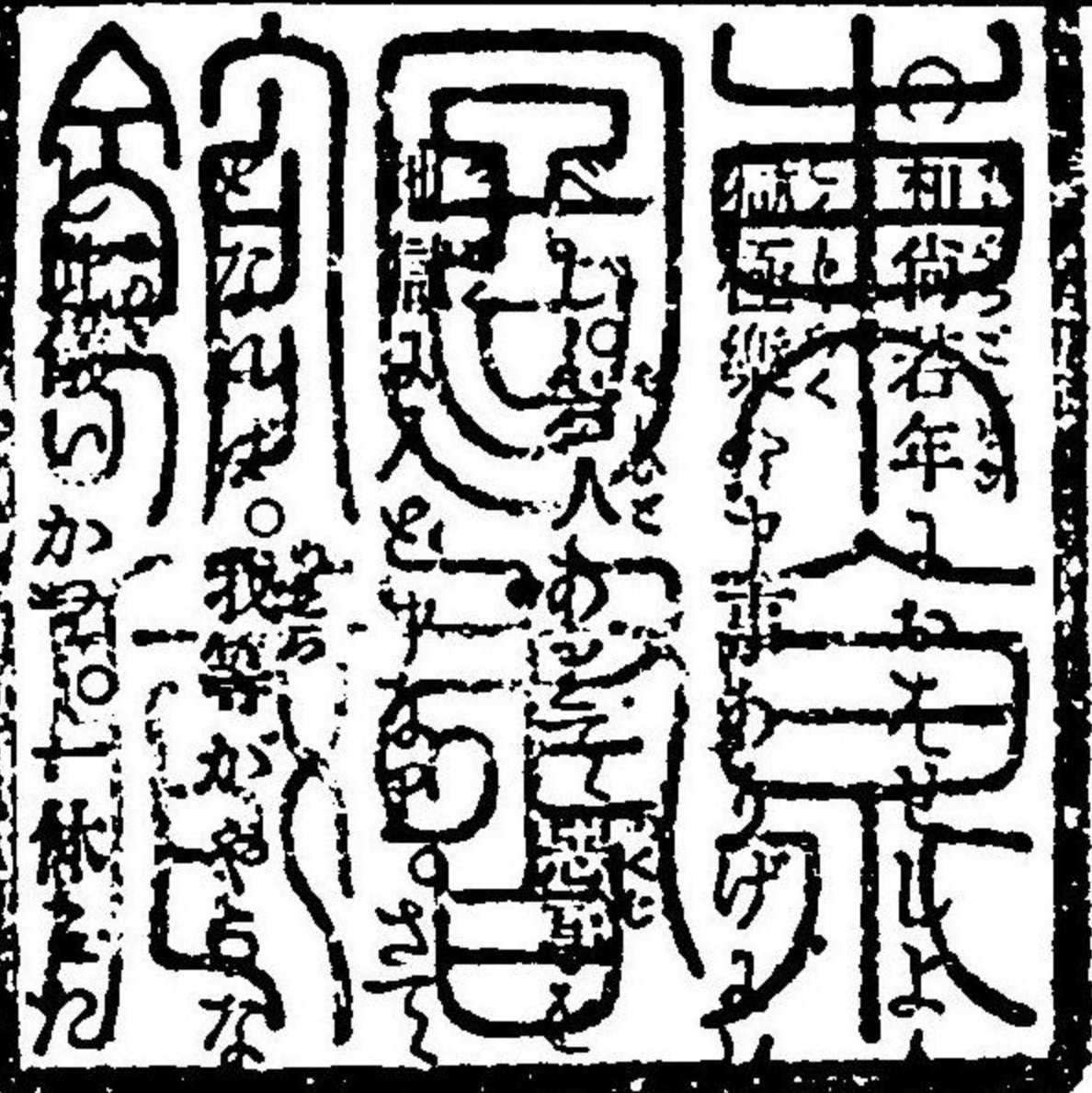
龍寶門客

# 東海純一休光

書之詩一筆



## 一休諸國物語圖繪卷之一



才智衆に勝れよ之人を導玉ふ或人問ていとく何よ小僧これ地  
 しかしあから死後あらでい證據な死より承とる。ともあまぬ  
 せを死て三途の大河。死出の山あといふ難所を越て。やうく  
 極樂浄土とやと。是よと十萬億土とやせむ。途の道を経參る  
 不達者もの極樂の事とさておた。地おくへを行がたのるべ  
 して。夫地獄遠きにほらす。眼前の境界惡鬼外になま。浄土といつ  
 と安をさる事遠からずとのたまへむ。この者やういやく左様に目の前ふ地獄をくら  
 くゆりとのたまふとも。顯ときて見へねば合点もかす。小法師の分として委くしめし玉  
 ふ事成まじとのさ笑ふてぞやける。一休腹をたて。扱と其方は我を若年ものみわなどり玉  
 ふのとして。頼て一休繩效もちて後ろへはとと。かの者の首お引のと思ふさまにしめ付。な  
 んち足えいふみかやさるゝとき。此もの合点して。尤これ地獄と。其のまた繩ととき

特12  
430



玉ひて。汝のくわるときはいかんとや玉へば。淨土なりや。こたへ其は合点して。ても  
く。小法師は何のわたまへも有まなきやうよおをひわなごりし。幼稚なれどもかくの  
おどく智恵ある事わたくしならぬ事ありやぞかんにける

○一休十一歳のとたの事ありしが。師の房他行したまひける留主の處へ。余所より餅一ツさ  
たどければ。一休そまじ割て。師匠のかゝり玉ふみ取出して奉る。師もたうけ入めて。満月  
無片破闕は何地ふかあるとのたはへば。一休そのあるより智恵さのしとほしませを。直ち  
返答に。雲隱有是とてかの闕を出され奉る。此心と満月と丸くみちて。か茶たる處さし  
此餅は満月の如く。まん丸おてあるべきおのけたるといふよと問ひたまへを。雲に隠れて  
こゝよ有とこたへたる。師うち笑玉ひて。さてを小賢さ小僧のなめて。彼餅ぢみなたひ  
玉ひ奉るとなり

○一休は諱を宗純とやせしが。別号を一休と名付たまひける。或人死たりて。一休と名付玉  
ふ心は。いひなるは心得よて侍るやと尋ねければ。よくこそたづねめさる。ささな  
がら一休おふのさ心もわらざれば。かたよて開す。さやうもあしとて。うく

有漏路より無漏路のへる一休

あはふらとふれ風ふかをよけ

と遊しければ。彼もの死して扱もおもしろさふなるは歌や。有漏無漏とといかなる事よて  
おはし奉るぞと尋ねば。とこなるは拂子をとつて彼者の顔をなでたまへん。いや何事を  
のなさるゝとおどろきたるをかりめて何とも心得ずとす。一休か曰その何とも心得ぬと  
まろが無漏路あり。はつとおどろきし處が有漏路なりと仰られければ。彼俗肝を冷して有  
がぬや即時ふ大事をさづかりけるとよろまびて。扱は歌の一やとみどり心得す。雨ふら  
をふれ風吹をふ茶とは何なるは必めて侍りけるぞ。されはよわづかの道のよとなれた。雨  
も風をいどふ事侍らす。仰られければ。扱も有がた死は歌かな。おそきながら只今さづの  
りやせし。心を一首やてみんとやければ。夫の死とくある心ささやのたまへば。かほもの  
くとある。

さうじむろぎ一休ぞとてくんとす

十万億土とんてとてしる

と仕とければ。一休死ましめし。善哉くとして尻餅ついてよろまび玉ひて。かゝる例し  
るよしおも侍りし事ぞ四休居士のいふ人ありある山山谷といふ人それ四休の心哉問けれ  
ば四休わらひて答ていさく

麴 茶 淡 飯 飽 卽 休  
三 平 二 滿 過 卽 休  
補 破 遮 寒 暖 卽 休  
不 貪 不 妬 老 卽 休

とやされけきを山谷がいはいはく是安樂の法なりそれと少と死は不伐の家なり足る事哉  
しる極樂の國ありと感てしてたしく語りて四休の心と得三首よつをうたひ樂しとし  
どのや其一首お

富 貴 何 時 潤 二 罽 毘 一  
大 醫 診 二 得 人 間 病 一  
守 錢 奴 與 二 抱 官 囚 一  
安 樂 延 年 万 事 休

と有りしよとく似たり。一休の心をとひて今其方の歌よむ事よと感て死はへを。彼人ヤと  
やう一休の二字をたづねて。四休は四字をしる事。求たずして得を幸と註したり。これ  
幸なりやよろまびけるが。この四休のうち。三平二滿とはいのなる事やらんとやければ。

其方の内方よどのたをへを合点まいらす見よく死といふ心のとらへいやはらまわらすお  
どおせのとありどのたまへば扱もめづらし死とかな誠お三平と師の類と鼻二滿と顔と願  
よさてもおもしる死事ささりながら女をもお聞せお心一休をまをつめりやべしとわらひ  
て飯をよめる

○和尚幼稚きと死より常の人おはのとりたまをて利根發明おとけるや師の坊をを養叟  
和尚おやけるまびたる且那ありて常にきたりて師の坊に參學おとし侍りて一休の發明  
なるを感て折々おたはそれを言て問答などしけり或ど死かの且那皮袴を着て來り来るを  
一休門外おてちらと見て内へとしり入へぎふ書付立られけるは  
一此寺の内へかどのたぐひかた々死んせいあり若皮の物入るとさし其身おかならずを  
ちあたるべし

と書付て置たりこの且那これを見て皮のたぐひおばちあたなるならん此寺の太鼓は何とし  
玉ふぞとやける一休聞たまひさればとよ夜晝三度づゝをちあたる間其方おも太鼓のばち  
をわてやさひ皮のとのま袋さらけけるやどにやめをけられけるそのうちこの且那養叟和

尚を齊よぶとて一休も供おとやまかの返報せをやとたくとけるが入口の門のまへに  
橋ある家寺りけるを橋のつぎに高札をかきにて太く書てたてける

此とくどたるとかたききんせいあり

と書付けける。發申和尚齊のじふんよとて一休をめしてかの人のかたへは出あるお。橋の  
札を眺めて。此はしとたらでは内へ入べき道なく。一休いかお有けきば。いや此とし  
わたることかなにて仕たれを。まん中を渡られとて。真中を通り内へ入たまへをかの者  
出合て禁制の札を見ながらいで橋をわたる玉ふととどがめければいや我は端とわたら  
ず真中をどたりけるぞと仰られければ亭主も口強とちけるが何かお不審やとて又い  
とく凡沙門の形といつば忍辱一鉢の衣を着罪障さんげの袈裟をかけてよる僧おとやべけ  
れいかよ小僧ありとて俗衣 出たら心得がたくいとやせを一休幼茶れども歌一首をよ  
みて答へらる

若て死たぞ本来空のくる衣

そでながからで人こそしらね

とくみ玉へは旦那も養叟も手をうち。口をあめて塞ぎかねられけるとなり。扱は齋を出し  
けるが今一度不審せをやとおとひ。一休もとどさど魚類の膳をそへ茶るめづらしくやか  
はし茶を。もたもの喰ひ玉ふとさよ旦那のいへるは人えれぬ衣めしたる僧のしたよか  
魚ををめることよとたわむれけれを一休聞たまひて口を鎌倉海道なれば。貴さを行死  
やし死をすぐとのたまへりまらへかねるる物もどほりい哉と刀敷すらととどきけるを  
一休すこしもさわがず敵の味方のと問ふ敵也といふしからを通と事ならずいや味かたな  
りといへば其はけへんくどのたまひてくせものがどほるとて只今俄に關かすことま  
るはといひ玉へは旦那も和尚も此小僧の口よとのぬれまてて言葉さ々舌の根をふるむ  
てやみぬ

○十七歳のゆとぎ引導し玉ふ。或ど死下賀茂邊を通りたまふ折ふし。途中は死人あり一休た  
ちよと引導をさづけ玉ふとさよ。或人見て恐のあり小僧。死人よむのつて何事といふたり  
やも耳お入べきやいかんやいふ。一休答へていはく芭蕉無耳雷之音聞則自出す。此文のよ  
しろは夫せをさといふものと。耳をさく目もな茶れとせ。芽を出さんとおもふふきは雷

の音<sup>おと</sup>は聞<sup>き</sup>て則<sup>すなは</sup>芽<sup>め</sup>をい<sup>い</sup>だ<sup>だ</sup>は<sup>は</sup>や<sup>や</sup>り<sup>り</sup>斯<sup>かく</sup>のおとく<sup>の</sup>の非<sup>ひ</sup>情<sup>じやう</sup>艸<sup>そう</sup>木<sup>もく</sup>のたぐひ<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>でも因<sup>いん</sup>縁<sup>えん</sup>加<sup>か</sup>合<sup>ごう</sup>のよとど  
りありいはんや人間<sup>にんげん</sup>おあ<sup>あ</sup>めてをや彼<sup>かれ</sup>是<sup>これ</sup>もつて同事<sup>どうじ</sup>なると返<sup>へん</sup>答<sup>とう</sup>したはへばよのその實<sup>じつ</sup>もど  
おもひ茶<sup>ちや</sup>ん一言<sup>いちごん</sup>の答<sup>こた</sup>へおも及<sup>およ</sup>むす立<sup>たち</sup>さりけり

可笑<sup>かせう</sup>記<sup>き</sup>曰<sup>いは</sup>達<sup>たつ</sup>广<sup>くわう</sup>大<sup>だい</sup>師<sup>し</sup>はあ<sup>あ</sup>しの葉<sup>は</sup>ふ乘<sup>のり</sup>せ佛<sup>ほとけ</sup>の道<sup>みち</sup>をか<sup>か</sup>た<sup>た</sup>る紫<sup>むらさき</sup>野<sup>の</sup>の一<sup>いつ</sup>休<sup>しゅう</sup>和<sup>わ</sup>尙<sup>じやう</sup>入<sup>に</sup>世<sup>よ</sup>の法<sup>はふ</sup>議<sup>ぎ</sup>をそ<sup>そ</sup>え  
らす興<sup>きやう</sup>がるねと茶<sup>ちや</sup>をあ<sup>あ</sup>して釋<sup>しやく</sup>迦<sup>ぢや</sup>をし<sup>し</sup>かど玉<sup>たま</sup>ふも助<sup>すけ</sup>んた<sup>た</sup>めの本<sup>ほん</sup>心<sup>しん</sup>あゝに蜷<sup>なま</sup>川<sup>がは</sup>新<sup>しん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>親<sup>おや</sup>  
當<sup>あた</sup>といふ武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>弓<sup>きやう</sup>馬<sup>ま</sup>の道<sup>みち</sup>くらからず殊<sup>こと</sup>に佛<sup>ほとけ</sup>道<sup>みち</sup>と祖<sup>そ</sup>師<sup>し</sup>禪<sup>ぜん</sup>宗<sup>しゆう</sup>をま<sup>ま</sup>な<sup>な</sup>びて座<sup>ざ</sup>禪<sup>ぜん</sup>の床<sup>どこ</sup>に入<sup>い</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>へ  
の道<sup>みち</sup>をし<sup>し</sup>と、のねて一<sup>いつ</sup>休<sup>しゅう</sup>と問<sup>もん</sup>答<sup>たふ</sup>あし<sup>し</sup>けれども終<sup>つい</sup>にい<sup>い</sup>ひ得<sup>え</sup>ず、秋<sup>あき</sup>の夜<sup>よ</sup>長<sup>なが</sup>きつれく、よ友<sup>とも</sup>を  
のたらひ酒<sup>しゆ</sup>興<sup>きやう</sup>志<sup>し</sup>實<sup>じつ</sup>大<sup>だい</sup>唐<sup>たう</sup>には五<sup>ご</sup>月<sup>げつ</sup>五<sup>ご</sup>日<sup>にち</sup>橋<sup>はし</sup>を酒<sup>しゆ</sup>に入<sup>い</sup>て飲<sup>の</sup>み<sup>み</sup>を老<sup>らう</sup>せ<sup>せ</sup>さといひて賞<sup>しやう</sup>翫<sup>くわん</sup>とる由<sup>よし</sup>さ  
もあらず先<sup>せん</sup>身<sup>み</sup>の年<sup>ねん</sup>々<sup>々</sup>若<sup>わ</sup>く見<sup>み</sup>ゆるは此<sup>こゝ</sup>水<sup>みづ</sup>の徳<sup>とく</sup>ありといふに同<sup>どう</sup>し水<sup>みづ</sup>鳥<sup>とり</sup>一<sup>いつ</sup>座<sup>ざ</sup>の中<sup>なか</sup>に三<sup>さん</sup>十<sup>じゆ</sup>ば  
ありよたらぬ男<sup>おとこ</sup>白<sup>しろ</sup>髪<sup>かみ</sup>ま<sup>ま</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>りに生<sup>な</sup>しといふ<sup>い</sup>みと問<sup>もん</sup>へば口<sup>くち</sup>か<sup>か</sup>しよき男<sup>おとこ</sup>酒<sup>しゆ</sup>妓<sup>ぎ</sup>のま<sup>ま</sup>ねを腰<sup>こし</sup>がふ  
たへおなる筈<sup>はず</sup>なれやのたまへとよと霜<sup>しも</sup>のよふれとへらそ口<sup>くち</sup>のはな<sup>な</sup>き盃<sup>はい</sup>中<sup>ちゆう</sup>場<sup>じやう</sup>へ紫<sup>むらさき</sup>野<sup>の</sup>一<sup>いつ</sup>休<sup>しゅう</sup>  
あ<sup>あ</sup>ん内<sup>うち</sup>しきたりて是<sup>こゝ</sup>は<sup>は</sup>くき所<sup>ところ</sup>へとおさるぬ盃<sup>はい</sup>三<sup>さん</sup>つ<sup>つ</sup>い茶<sup>ちや</sup>ては<sup>は</sup>しさらば慮<sup>り</sup>外<sup>がい</sup>としたぞと  
よろと蜷<sup>なま</sup>川<sup>がは</sup>と死<sup>ふ</sup>不<sup>ふ</sup>審<sup>しん</sup>と一<sup>いつ</sup>滴<sup>てつ</sup>七<sup>しち</sup>十<sup>じゆ</sup>粒<sup>りゅう</sup>ともさんか捨<sup>すつ</sup>る事<sup>こと</sup>い<sup>い</sup>らん一<sup>いつ</sup>休<sup>しゅう</sup>こた<sup>た</sup>るて法<sup>はふ</sup>界<sup>がい</sup>に手<sup>て</sup>向<sup>むか</sup>く

大徳寺境内  
野門界風色

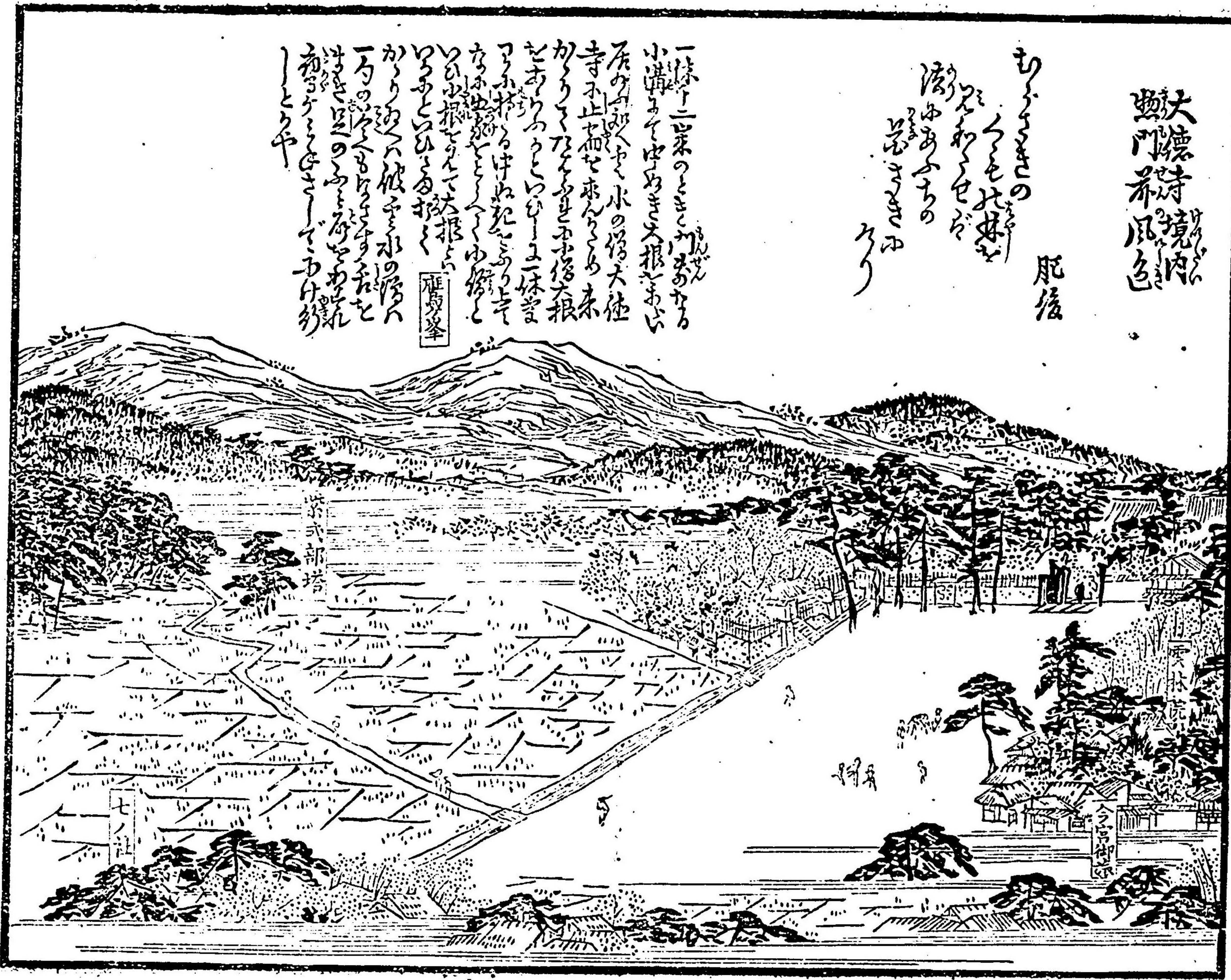
肥後

ちんちんの  
くもれ林  
流あふちの

あふち  
る

一鉢二茶のときか  
小満の中めき大根  
茶の止を来んり  
かろくたをせお倍大根  
とありあういひ  
くふけるけねた  
たはせとてくゆ  
いひ大根とて大根  
いちとひるお  
かろくたを来んり  
くふけるけねた  
たはせとてくゆ  
いひ大根とて大根  
いちとひるお

雁野峰



蜷川また法界がのぞべしや一休は法界が飲まじさといふかと答へ一ふつまどそれの  
いらすと閉口して大笑あなり肴ふとか茶たれども淨るり小歌もふるめかゝ今の問答の  
れかしきままかせ善惡五戒の講釋せひよとのぞみこれかはつた精進さかな音曲も無理  
に引たて上座にあをし高座之火燧のやぐらを取り出し行燈つり上かうべ坂かたせ茶こじ  
まるを待ひ一休くわんくとしてとても興がる慰ながらばさつと三十三身を現じて其  
機にしたがひため法を解せたまふ普賢菩薩の江口の遊女と變て凡夫にちぎりをこ  
め十羅刹女の太鼓女郎となりて貴聖人にまみれたまふ愚僧はその菩薩おとあざれ  
どもしばええそのおがれの末を汲て川柳花と紅の色衣はなまそみの衣の袖をかきとせ  
まづ鼻をかみせればらひニツ三ツ、四弘誓願の文を唱ていぎをたらし白紙巻て取ゆへ  
すさ上げ奉る諷誦と名付讀上る

夫つらくおせんみれを分段同居の風俗を陰陽をもつて有爲の掟口夫婦をまつて  
義理とす鳥よ比翼のかたらひあり木よ連理のちぎりありいんや人倫におゐてをや  
ひそかよおもへと容色たをやかみして梨花の露をなむがとく心中あらとにして行水

の物も随ふがとく天生の美麗世たぐひなき西施が容貌貴妃が顔色一トたび笑ふ百の媚わざやの又見その思ひを動の志聞人心をくだきぬらむ春は朝よのうめをくらの下陰にたゝすみて三味線とひかし秋の夕は蘭菊のはがきよ立をとりてあげふし埃吟じ翠帳紅閨の中より枕をならべしさゝる語紅粉翠黛ののちばせ二世のちぎり埃結ぶどのへともものぎりあると浮世のならひ一生者必滅會者定離のおきてなれを一人もどいまるこのなし誠にこまかたを思へをいたづらにくらし空しく曙すあゝくやしおのち悲しい哉今このと死にたき苗を種すんば何の春かやだいの花をながめん早々無明の酒の酔狂をさまさんおのちと先一座の小歌をいづつ送てのぞきとよるの講談ありまとおされ希代の發菩提心わけていふおたらすまの善根おふたへて現世よと長生をし金銀米錢澤山に當來にと極樂よ往生しうだいに一てめりこんのみおと酒宴講中敬白

次小經文をひらけて頂死一調子わけて大悲經第三日佛阿難お告てのたまくと若衆生あつて涅槃をねがひ求めすと一へ共しかも佛のところにふめてもろくの善根埃

種つれを我説とよるのこの人のならず涅槃を得てんといふ

○上京お糸や由右衛門といふ者あり。内々一休和尚の答話よれと。古今無雙のよし承とり。いつぞと紫野へはあり何してそぶらしき事をうかまはらん。左をくを此方へ赤にや入べれど。かねく思ふ折ふし。和尚旦那のたどり歸りたまふ。途中まで行合。さて一段の處にては目にもよりいものかな。序ながら明日少し志と日おさしわたりし。坊さまへは赤を進じ度い。兼々お寺へ伺ふしやべれどぞんじい處。幸是にてはめおのりい。必々とやせと。和尚心得やいさりながら。宿所といのんといひたはふとさ。此人宿と室町通そんまじ其處なりといひてどかきぬ。一休心得さて翌日早天よとらしらへ。彼もの宿を尋ね行玉ふお此者もさあし心あるものお。店ちいとも鈍埃つりて置る。小蛇なれを釣たるは。こなたといひん事なかと判じ。頓てうちよ入ふまふが。また座敷の口よ犬ののオを敷たり。和尚さしれを通らるゝとさ。に。喜幸田合さて。今日折ふし路次あしく。お太義の事なり。お足とおれいはん。足さおらせんとや。一休いやく。只今かはを越へてやありいめあ。すよしも苦しからすお仰らるゝお。喜幸扱まる早一といくわんぞ

たりと思ひつゝ。は膳をましらへ出す和尙ふた返取て見たまへは。何れも小糠を一とら  
 入たり。一休はあらぬ体おての玉まふ感へ。亭主座敷へ出れと。一休さてく。今日のは志  
 の。三七日おてひの仰らるゝに。亭主はよく感心し。やがて和尙座を立玉はんとする  
 とさ。亭主となほまゝを引んとて。銀百文をとり出し。おれと今日の布施をまわらす  
 るなど。是へくらすして居ながら。は請われとやあ。一休たゝもあへず心得やひ。是まゝよ  
 てうけやべし。さひは、投ずるまゝへ賜りひへとやまゝをまを。亭主はよく感心。扱々  
 は坊さまえたゝおよびたるをりと答話僧にてましまし。凡人としばらぬ思案してや出す  
 あ。いまだ舌も引入ざるうちに。早くや斯く仰らるゝ。古今まれなるは坊さまやどかんま  
 なる

○和尙やる川邊を通り玉ふに女のいだから成て居けるを見たまひ。陰門をめさして三度禮  
 拜してときたまふ。折ふしありあふ人々是を見て。さてもあの僧と狂氣か。出家の身とし。  
 女のいだのあなりたるを見て。三度ふし拜みてもかるゝは。いかなる事やらん。いゝま  
 かも狂氣なるか。さぞなくとゝゝる事とし玉ふまご。めづらしした事なり。いゝま近づきて子

細をたづねんげあもつとをなとて我をくどめとをしたらあやがて。追付とでを引。は坊  
 たい今女のとだへを見て。禮拜一玉ふと。いゝなる因縁やらん。聞まはくは。但し佛道修  
 行よゝゝる事やましますか。いゝにくどせえのやて問ければ。一休うひの事もおよび  
 玉はす斯くひすてゝ過玉ふ

女をを法のほくらとらふと實

しやかや達磨もひよなくと生

とひひすてゝおを通りたまふ。いゝかある坊主やらんとふしきあすあ。しる人あて。あま  
 だそ一休なとといひし人あり。さゝこそ彼僧ならでいかやうのこいふべた人ありとも覺  
 へず。殊勝やな。世の中の坊主あらと。女の肌を見たらんあ。心ぢよげよねぢかありく。目  
 もはなたで行くやらん。かく禮拜なして通り玉ふおそ有がた茶れ。實も女の胎内より貴人  
 高位も出玉お諸宗の高僧たちも出らるゝぞかしと人々尤どのんじける

扱今晚の先夜酒宴談の次越とさやなと講談興起の義の誦誦文も聞へたどより酒宴講  
 中逆修現當安樂のため一つおと笑のたねとしてつとむる所の説法講談で侍るある經お



もし園の中林の中も、白衣の家是中皆應起塔供養と云われてかやうなる在家俗諦の  
 白衣の中へても一傷ても流説と云ふべきやと云ふを若からしむ所も則三世の諸佛來  
 迎影現の消滅といふ物なれば信心を決定して開問あるべきと云ふが肝要にて侍る次、愚僧  
 義なんにもしらする顯金坊主ものしりがほ子細らしたと必きやうまんの心を起し玉  
 よの大惡人じよそれはあせおと不審ゆらん涅槃經の依法不依人の説くその人おとよ  
 らす能所の法よれと教へ玉ひ成實論にて經を引て我意にあらすとも各正理に順する  
 らば聖教とすべしともあり、復が衣を若ふと云ふ法の道に説よき所あらすやまひつゝ  
 しんで開取べしと云釋したとへと未曾有經像法決疑父母恩重經等を佛説よあらずとい  
 へどもいかはしても其理佛の信心に叶がゆるす諸の師師よきを以て諸文と云ふと云  
 我等と云ふものも教化一説法せんといふ佛も我を敬ふやう沙門を供養せよとの玉を  
 ぬれば信心の手前からは慮外ながら其を末世の佛とやとも思召がよく侍る扱たい今披  
 露の經文と訓讀のと云大悲經第三の經あり物して經を講ずるには來流釋名入文判釋を  
 せよと云ふと云ふあれと云學のときがしなれば万端さしおめてたい經文の表よつて談

すべし今の文の意の釋迦如來阿難尊者に對して仰らるゝやふも末世の衆生等下根下劣  
 及びして直々淫弊おいたるべしとの文でござるが佛のみをといふの釋迦と云ふお入滅  
 かり後佛の彌勒と云ふまたいたらす何くをてして佛の所と云ふはたむべきとおもへば文  
 字のたれ法身の氣命といひて遠のらすこの金句の說法を一たひきうてながくわすれぬ  
 阿難尊者如來滅後に獅子の座のぼり一代の法藏を結集し一千の阿羅漢を具多羅  
 葉にしるすことすこゝに佛説いたがはずのた大衆ふたつのうたがひをなして如來の  
 さねて世に出玉へるやまた同難今愛で佛と成玉ふかど傷をもつて讚したると云ふの經  
 と義をさすめ理を詮め生滅度し物を化す中にも大悲經別してしめしやう千万あり此等の  
 文義を談する此處が則三乘開會の即世道場まつたく諸佛來現の所といふものなり實よ  
 り淫弊を乞求めされども座與にせおどけにも名利ももうそにも佛語論談をさく心が其  
 まゝ善根を種るといふもけなれを佛説おいつはりかく未來成佛の歴然の同理なりさて  
 逆信の七分の善徳まつたく得て現世安穩の爲したる榮花のはるをうたひ命期臨終の  
 夕と法性の月を詠せん事又うたがひもなき經論の旨みておさるほどに頼もしくおそ

おたまひてねがはく、眞實の涅槃をもとめ玉ひて一遍のなぞあまたきひ法花をととなへ玉こい往生成佛と決定でござるまづこれを經の句とさらばと聞入ました。ア、ねむけが出たりふさ

○下立賣堀川邊に道意とすものあり。あるとき一休を齋入よりつとなし終て道意すされ茶ると。和尚さま某の娘一人もちてゆが。さんめる春の頃隣町へ縁ふ付すゆがやもそれを姑とからのひて歸りゆ。親の身にひへをあんばうめいどくにぞんじ。色々異見すてとのへしひと度々におよびゆ。和尚さまと智者あてましますせば。おもしろ死因縁はあしむとい。とどは物語とせたまへのし。よく覺おた娘の諫言のためや聞せむすあし聞入とも侍らん。和尚さま玉ひ。それがし一とせ修行のみぎり關東あての事なり。あ。是と姑女よあしをゆるる縁なるが。たごちまら其むくは歴然なり。事あらく。のたりやさん。下野にての事あり。が。まうとめ久しく病みてなやみけるを。其子深くあげ死て醫師をよび療治しけれども。さらお験なく日を送りけるが。あるとさいしのややう此病に。ふたのさをも養てあたへなむ。忽ち本腹あるべしといふ。さらたどてふたの死もを求め是をよくく

四明之巖

龍圖の

すまの

塔乃

うするへて

むりの人々

君をかりける

西行法師

横川

比良巖

ふみおの

おのり

女をゆき

わさきぬ人

おもふ

侍人



煮て母よすゝめよとて。妻よわたしてその身之他行しける。この妻つねぐ姑をおく老  
病の事おればせんなき薬ぐひきりと思ひける。折節その孫嫁子とらみければ其あなを密  
よどりてよく煮て姑に勧めぶたの肝をくくしておのが薬ぐむおぞなしたまける程なく  
赤いろある蛇かのよめの口へ飛入ける。尾四五寸やど口より外へ残りけむその嫁あきさ  
けびをだへぬる事いふ心のりなし。まとお奇代ふしきの事おれを。開傳へ見物の人おはく  
あつまりおるが。老たる人の見るときは。尾をうおのさす若きものゝ見おるときと此蛇尾  
を右左り。上下へうおかし女の顔をたゞ死けるよそおそろしき。ある人釘め死を以て蛇  
をえさ引ぬかんとしけれども。尾のかゑさと黒がねの如くおて。奥へ入といへども  
こしも口へは出ざりけむかくのとく。惱事三日おしてつゝおとせなく成りけむ。され  
どもふもつねく。姑よあゝくわたりしやとひきり。姑の口へ入れまじき胎衣をすゝめ  
我口へくふまじ死ぶたのきもをぬすみくひおる悪逆によつてのくのとく口へはいるま  
ま蛇の飛入る事天罰など。かたちお影のしたかふとくおそろしき事なまけり。かたり  
たまへば夫婦ともお手をうつて。あら恐ろしやとかんじける。道意またしけるは和尙さは

それがま此おろむたらまき枕屏風をこきりハヤハ。これとむとめが方へおくりア心得お  
てい何にてと一筆あそと下されとヤに一休やと死事ありとて筆ととよせ

萬一人事一口むやく惣而壁に耳岩お口姑 夫唯主おやとあふくのそ

我男けにたいせつよおもひなと

などまうとめの見よとのるへた

ひねの火のもねたつとききの有ならと

まゝろの水をせきとめてけせ

やのやうよ書てたびけり此屏風今ふ傳り侍るとぞ

さて前夜の講談やせま文中お涅槃といふと天竺の飼なりよよお滅度と翻して空寂の理  
よ歸する旨おれどもたれ成佛至極の處と覺たまへこの經の中の要と然も佛の所にお  
めく善根を種つれとて説種るといふ文字が法壁よのなふ聞所よて侍れば耳をのたむけ  
て講談を聞たまふべし此種の字えうもるともたねおも卿とも讀てたとへを草木のたね  
の如く瓜をうもれば瓜を得豆取にも同じ事善種をまけばよ死果をとるを因果ともい

へ世間よの什合のよいと因果といひよろしからざるを因果といふと誤りあり因果

も果報もみなや々いといふ必よて文字よ善惡の差別となければとをかやうなる誤りは世

あまたたにて侍る弘明集に緇芥の惡の劫燒歴どもほろびま臺蓋の善と世々にも滅せず

とて微塵髪すぢはどの因も果ならずといふとなればのりにも惡事のたねをよばすべ

からず生べきは治定にて侍るそれ法苑珠林よ經を引いていなく愚癡の人因果をえらす

みだりよ邪見を起し三寶四諦もなく禍もなく福もなく善もなく惡もなく衆生の業因も

なや因果も無どかたるもけと決定て阿鼻地おくに落べしといふ文よてとざるやどに

何れもたまみ玉ひて因果撥無して佛法といふものオおいものまやなと垣やぶまな

る事はかまへていとしやり升なされ共今おきの人多くひがみて地獄も極樂もありとと

聞ゆ見てくるものなしたすく見るとあやつりお紫の雲を空より糸にて釣下し箔の光

もとあつ佛弘誓の舟よ二十五の菩薩一度立尺八をふま三味線をひかせてつかふと上手

あてまたおかし鬼といふも虎の皮のふんどしをたたるが濃たる角をより立しくわいらい

しの弄ひがおそろしきものよいかげんなる事を佛もたくはきて子とをたらしのたむ

れを仕出し玉おけるよといふ者をありやく何のしの法師は地獄へ行て有し皇の苦痛を見たてまつて歸り唐土の僧も奈落のなるしみをかゝるを出して日お三度血のなみだ流すと書こしたるはといへむそつたの末弟どもがいふ事あれを何を證據にそべしなごめさける人こそ淺ましけれ同し論お日無におちて因果を問する者はたごも万牛挽ども永劫地おくの門を出じと書て是をかなしみ玉ひてこそ三世の諸佛も十方の如来を世々番々も出生し玉ひ此まごひをやめさせ一切衆生我ごごとく一佛來道おらし然んど。五十年のあがだ聲媛のらして説法教化したまひける倒も心得るは惡の中れ極惡なればまごも那羅延力の牛ののすも惡趣を引出する事をかたふるべし此等の人のおつる所の地おくおくげんをうくるに問なだがおゑに無間地獄の各作る其跡相往 生要集因果經等おつふさにおれを只今や事およびませぬ何といたまし事では侍らぬの愚僧おごはまづいやでござります愛お一ツのふしぎがごをあり自問自答して聞せやさんごとながらほ浪屈でござらふ一ぶく致ごよ

○一休人を殺すそのお證據をひたし得道させたまふ事おまよに早川治郎太夫おやもの和

尙のまごへ行やさるると。これ人をおふるすお其理もつごをならべ千万人を殺ごをくするしあるまじ又殺まじご其理なくは一人なごごて惡逆無道あるべしごやけるごご和尙仰られけるはそれ殺生のまごの罪の根本あり。たごひ生る物もおめてこの氣おてもあるす事あるべからず。同はたい殺ごるまごのじ。男ごたへややう。少ごくるしかるはじ。或の生命ごや。又ははすべひとごよぬ乃されぬれを。是非なく殺事ありかくあるごきは其たのみたるごのこごごがならん我ごまつたくごはたごしと利口氣よ自慢ごてや和尙舌を引入させずして。汝おの柳お雪つもりぬり枝おもげよ見へしごらひてたびてんやご仰られける心得やひとて柳陰よ立より。ふりおとし茶れを。かしら袖のうへお雪ちまごりしをうちいらふとき。和尙の曰汝いかなれを雪をいらひ玉ご。某がたのみやせを某にこそちまごするべし事なるにやご仰らるれば。此人はたご行營り。ごごよごごてかごねて殺生をやめけるとかや。是に依ておをへをいのよ人をふるを罪科なりといふごを朝政をふるはし惡逆のものをたいごせん事ご。いと千萬人ごごごを苦しめるまご。一人半童ごりごも殺ごへご道理ごごご其責おもかるべし。されを人を殺おめてご。もつごも書ごへご道理

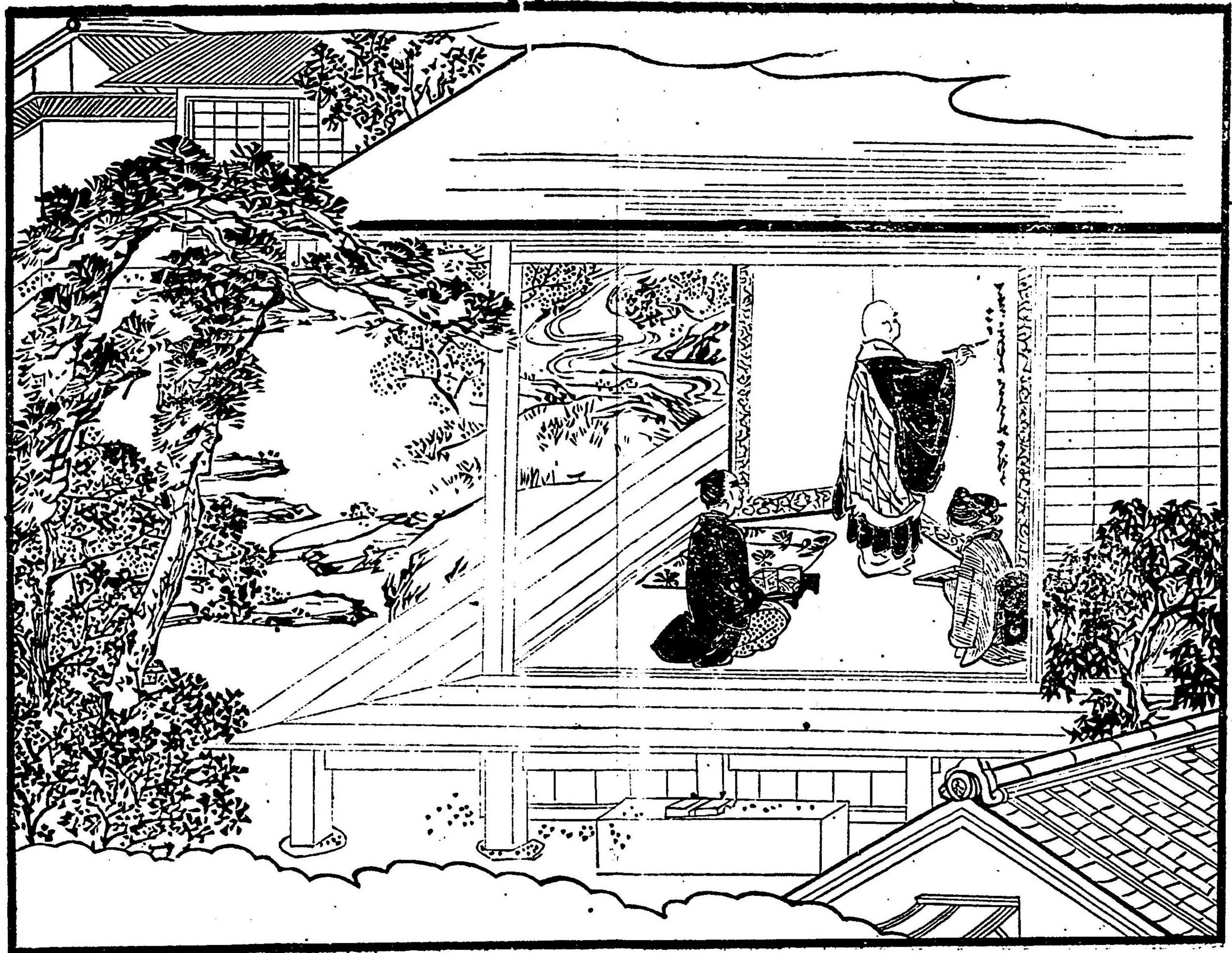
あれども。さうらひの余ふとたこのみてたるべし。事いふあらん。然れとこそすべし。道理の内にまたさるまゝの道理あるべし。くくこころうべし。

○愛に木屋平次郎と申ものたひめて長ちいさたいろくろた男なり。世間の人々これをあざけり笑ふ事々の常ならずまして他所へ用事をとりのへお行とあれを指をさし子どもあまた付したふて道を安からしめねおのすから歩をなすとならずあると死少し心ざす事ありて。一休和尚を請ふ。我身の不具をつよきよとなし。今更よきとくぬかあしむ。一休仰らるゝと生質たる身をちいさきとて何とぞへさ左やうの事をのさしむものおあらず其子細と金とちいさたものなれども。天下れたからとある。針とちいさたれども衣服をぬふ資となる墨のくろけれども。佛經神錄聖賢傳の書をきゑして。天道の助とある。漆とくろすれども。諸道具を助あり。山は高くゆいへど貴のらす。樹あるを以て尊しとす。霜雪と白けれども万民これをいためりぬとひ肥ふどりたる人がぬかやど瘦細とたくぬがひたりとてかなふまじしかるを強てやせ細らんとくひものをとていめかたちをちいめたらむとて必氣血をるらし病を生し身命あやふるべし又瘦やそりたる人何程よる太りたくとね

かふどものおふまじ肥太りたらんと飲食物たくさんにして。寐仲居のび城せを。必氣血をみだらし。食傷して。うらしげく牛の糞のうねうねとあるを寝所よと包お死後にと。俊寛僧都の鬼界がしまに住し。ゆまはふありおは。命をすでああやふるべし。さきば薬師如來の出世の菩薩へんじやとが再來して薬をあたへ療治する共。いかでその験を得んしからと天の黑白脊の長短を又かくのとし。愛におせしるき咄あり。さる所に才か利とつの人あり。此男いにも脊がらんちくりんよて我身ながらもちらめしく。悔かあしむ事せつなど。余りひねんさあつとくと思案しるに。我身こそかくありとて是非子とをわわわてい。脊の高き子を持つし。さあらしまづ女房をひのへんみ好ゆりみめられたちにと少も望み。只脊の高た女をを尋るに其脊六尺余よ。無雙の悪女あり。いそぎこれ残ひのるどり。夜登のせぎけるやとよ。程なと。此女懐妊して九月をも過て。程な産月ひもをどくよろこび取あげて見れを娘など。あつたれ男子にてあれかしと願ふ處み女あり。捨べたみせあらず育て茶と。のくて此度は是非お男をばふけんくとかせぐ程も。うむ程よくついでさまに女子をのり五人までうめり。彼男あら腹立や無念やといかとおはさげとせ甲

斐ひをなく。つぶさうの捨すてふのどいやけを流石うしつさうもならず。養育やういくするをどに。成身せいじんする  
 おしたがい何れいづを母親いぼに似にて色黒いろくろく脊高せたか々鼻筋はなすぢひしげほうふへうつむきにあつふふと一  
 ツの徳とくよと鼻はなの用心ようじんいらす。まなよ細ほそくくびさだ鷲じゆをどれ如ごとく。六尺ろくせきもたのの女むすめなど。  
 ひことり嫁入よめいりあらざれを。何なにやもしてあつむける有あさまあり。何事なにごとそのやうの事を聞きか  
 らふ諸事しよごと悔くかなしむ事ことあらざと。言葉ことばお花はなを咲さかせて語りてこそ歸かへりたり  
 さて自問自答じもんじたうのついでをばとなしやさふ縁えんと無縁むえん入い三ツの品たまあり問如來もんにょらいと是實ぜじつお一いつさ  
 い衆生しゆじやうの父母ふぼにて大慈大悲だいじだいひおはねくれふて更に倦あむたなく影かげの身みよとふ如ごとく護念ごねんし玉  
 ふならむ其佛そのほとけは力ちからあて衆生しゆじやうもよどぐく悪あくをやめ善ぜんを修しゆすべたつかり何ぞ日夜にちやも悪あく  
 業げうをつくる事こといゝんふや難問なんもんとなふてかなとぬ所ところでおさる此答こたへん尤佛たうふつの大慈だいじは平  
 等とうおして差別さべつなく一味いまいの雨あめの如ごとく日月にちげつの光ひかりのと々何方いづかたおわけへだてはあけれども受うる  
 處ところの衆生しゆじやうが同どうのらす縁えんと無縁むえんとの相違さうゐある事ことと釋迦如來しやくぢにょらい舍衛國せゑこくにおゐるて説法せつぽうあそばし  
 たるよて合点あてんが参まどそれといかなる事こととやに佛ほとけの舍衛國せゑこくの祇樹精舍ぎじゆしやうじやお廿五年にじふごねんおりし  
 まして説法せつぽうなされたるとき殊勝しゆしやうのあまりに猿鳥さるどりさつね狸たぬきのあらゆるまで如來にょらいの説せつ





法をさうて眼をうなだれしとくおそれば皆かのづのら住所へかへりしゝるに此國お  
住々人数九億ある中三億の衆生と目の前お釋迦如來を拜々奉々音聲を聞て得道し又  
三億の衆生はたゞ佛の此國よて説法し玉ふと斗さう又三億の衆生の佛といふ名をしら  
ず是を見玉へ同國に住み同じとさよあひながら縁の有と無とと此三ツの品のはどあり  
佛の手前よりは少しもあだてあふれども爰之力におとをぬ所あり又醫者の藥をもるよ  
何とぞして人の病を本腹でせぬくじかげんに心をつくして與ふといへを飲ねば醫者  
の咎はあらず全をかくのとく佛の八万四千の煩腦の病をいやと大醫王なりとのたと  
へ是あてよや死こへ侍るさすれを初の難問ととみました此上と随分をよひをしとぞく  
所の彌陀念佛や法華題目あどの良藥を飲て安樂世界寂光淨土お往生成佛をどげたまふ  
べ死が一大事あて侍るを一ツ因といふ果といふ人のうたがひをさと事がこれ有ほと  
ふ次手よ講釋して聞せませせ先しばらく此間よ世話方講中ほらうそくを獻せられませ  
○さる人一休の草庵へ尋行和尙あむ奉りてやう我等文盲ふつゝかそのおひへを耳が  
たさ事と聞てを死かざるがとく何よてをわしるさ事いといほとなしたまはれとアとさ

小和尚さまを唐土へ虎さつねを追つたすでお喰へんとするお此狐のやうにいかに虎々  
 くさけ必ずわきをくらふ事なかれ今日よりしてそ色がしをもろくは獸の大將お天道よ  
 り仰付られたりさる程に汝我をふくするならば天命おそむ死忽ち汝が命めつすべし若此  
 事いつはりと思ふあらば我何とよつたて供をして参るべしもろくの獸われを見てかき  
 らす恐れおのゝ死おげのくるべしといふ虎ふしぎもおもひさらをとて此狐のあとよ立て  
 もくそろくの茶だものども案のとくみならまじくににげかくれおそれおのゝ死ひれふ  
 と其子細と此きつねを恐れよぐるよあらずあひなる虎を見てそろくのけだものひよけ  
 のこれおそれおのゝくなれされども虎とはおのの狐に恐れをなせと思ひ天命をおも  
 ん老のへつて守護を申し答るやかやそも大きき化やうがなされ世間の家々にももの  
 狐よそ多茶を化され玉ふお用心く

○爰に能勢小作といへる大匠をたりの見るがしあきものあを時しも極月廿七八日あるの時  
 の事あましが借錢にまひつたられせんおたなく方々をか茶まをりさいかくし答るに我も  
 人をめんくお用ある折からかれを我用に立べしといふものなしかるに粟田口邊よ彦

八とやて富さのへの町人ありのれが處る尋行からはやどおもひ粟田口へといそぎける此  
 彦八とやものいかなる前業のつたなきにや朝夕の飲食とて黒米飯よまづしるにてとよ  
 はどの者なまかれにかくといひけるがくだんの如くつはしきものおれけ我身にさるをし  
 み朝夕の食をだにもと死お取ては一度もらんよんする程のものなるもあまして親類すら  
 猶もつて他にのねなどを用よ立べ死事おもひもよらすかつて取合やさねを是非な々して  
 歸るとて

たのらおもあらぬたのらと彦八が

持たるのねと我身さん玉

とよとすてよまそのへりけれさる人のやけると一休和尚へ参りなげき給えいさだめて和  
 尚はじひふかくましましませ程おすこしい玉はらん事いよとあらざんやく参らさる殊に其  
 方の上るしきととと相應の用事を度々かあるらまし事おれを其方の事い和尚かけおても  
 念頃よ仰らさいまよはら茶あひ玉えぬ事あるまじとやくとやせを此者げよも同意し  
 てやがて和尚へ参る折ふし和尚出合玉よ先四方のとなしニツ三ツ仕り序ぐさときを見合

中けるはいかゝ和尚さまこれ人間と四百病の其中に貧苦はとつら死病はあしと古人を  
 是をかきしめりさきむ僧を内々それがしが年月持病は存なりと此頃さきのよきまか  
 こいひさる醫者尋ひへば此類の我等が療治はらなひがたきかやまの病とつゝお醫  
 書も見るやさす然ども曾て病の名候やさねバ醫者の見立をしらざるゝ似たり多分此  
 づらひは積金といふとづらひありいの成者婆へんじややがらゝいたいと治しがたかる  
 べし妙藥金銀丸をもらひての玉は即時治とへまどをしへらまけりもし和尚さまよ  
 け持めらば一包はほうしやまわづのり度いとなみだをとらゝと流してせせバ和尚さま  
 玉ひてさればこそ其病と年二度づゝおよる病ありまづ當月今おる秋と七月中旬何れも  
 濟國法でもえやりわづらむやまどさしめらば黒僧すこし持はせたり一包まゐらせんと  
 て奥へ入たまひ銀一つゝみ取出し上書は養命補身丸とかきつけをし再發のと死としら  
 ぬなり早々歸られよ

さて因果の差別目前の道理を講じまじやう唐土の子才と士嫌といふものゝ問答お侍  
 るそれをふまへては論せねども今少し因果の道理を聞えつゝあるものがや事にと因果

といふものがたねと木は實のとならむ同じ田地は種蒞子小角豆の中よも枝葉のしげ  
 いたるもゆりやせたる枝も虫のつたて見苦しさもあひ何れも其肥たる枝と前世にてい  
 らなる善根ありやせたる枝といかなる惡業をかかして是れをのちがひがあるにて侍  
 らんその上松の木が後生ねがひてさくらよなりたるた災ゝありや天地は間お生るもの  
 と萬物自然に理れて種は同じけれども所よよいて大小高下は別て善事したる瓜  
 のあし死事したる豆は棄といふやうあるいふのし死事あらんやおそらくと佛法おやま  
 いて因果の差別を説あるべし是いゝんゝこれ居士嫌がまたへ不類に談かひ變化  
 と心お依是木たる事豈心あらんやといへり此心は不類の談かゝと耳とつて鼻をのぞかど  
 ぐ山を船よのるにゝたる不審といふ事なりそれいかよとやに成實論よ

前世の妄執は今四大をまねく虚空を困て仮名の身となる前世の業因おくつて法界  
 の五大仮和合して五脉となるを釋して善惡因果遠論するは有情の群生心のあつての  
 へ上よまそ沙汰する事なれ誰の悲情草木の心なだうつ木後世を祈をバ善をあせといふ  
 べたのゝるもゑに變化と心およる木たる事お心あらんやといへり變化は品形のかは

るといふ事なりしものを有情非情こゝろあるやな死との差別を合点すれどその難問み  
 ありれやでオはべらすやたゞ右のものいひ華嚴會上の樹神の傷と甚深の子細あると  
 さればこゝにて論ずる事くなや誠昨昨日あれバ今日あり今年あれバ來年ありたれのと  
 くゆすは日をつげて來る事となけれども今日がくるれを明日もあゝ現在在るれを未來あ  
 り因あれを果なふてかなとの道理極るなら薩婆多論お曰ひかし牛洞比丘やいへる人  
 と常牛の洞のひやうに口をうおくとしられたる先世牛の中より生をうけらきた  
 とや又ひととの比丘あまかり初めを鏡をそつて我面を見られしかを過去傾城のうまき  
 のとりなま目蓮尊者と神通を得玉へどつねにたはむきおどり歩行たるは前世猿れ中  
 ぐり生れ來ると一るされし又佛弟子の中ひ夜晝わらす眠りたる僧あや佛によの因縁  
 を尋ね奉れ千歳の間辛螺がいの生を得たるそのなまどのたまひしをはづかしくおそ  
 ひ晝夜またしきせせず七日の間まなことをひらひて居たりしを忽ち明盲お成り或者婆  
 お見せせば是いもべからず病あつたふれたらんおと藥あれど生ある目よと眠りて  
 休るが食物なるを此日數ふさがされをのつめしたる目なり藥のなとすとてさどがの

名醫そでをそらひて去けり其ど世尊あれをわかれみたまひて金色のほ手をのべて双  
 眼をなで玉へバ即時みやまはれて明眼おなれる事あり生としいけるその三界二十五  
 有の生死病死迂流問隔六道四生形をとし果報ひとしらざる事と皆先業の習氣にと  
 れをせ一切の凡夫罪障ふかくして因果をしらす皆みづから苦の因を作りてみづから苦  
 の果をうくるのいよの我身をしはり夏虫の火おこがるたぐひ皆自業自得誰よむかつ  
 てうつたゑんあつたよ

奥山のすぎのむらたちとせとれば

おのが身よりぞ火を出し給る

とせよはり曠劫苦海おむやうとんし多少業火よやかるよとぞ

ありをせずさ世の間おまよふかぢ

身をおとせぬおろなりけり

終ふその苦しみあわかすかへつて五塵六欲おぼはれて恩愛よまをられし鴛鴦のちぎと  
 を命のさへさるうち慈悲のふすまをかさぬるを身体のやぶれざる間大梵高臺の間も火

血刀けつたうのくるしみをのなし阿育あいくの七寶しちほうを壽命じゆめいを買かひす息いきたへぬれを又三途さんず八難はつなん古巢こさうに飯いひ  
 聖せい犬いぬどうまきのらすとあり不淨ふじやうに肉にくに樂たのしむわををい業ごん中ちゆうあそまり鱒うじと變へんじ角つうをいた  
 い死し毛け抜けかふぞ生しやう々く世よ々の其間あひだ四足ししよくあてやあらん無足むそくにてやあらん覺あきす淨じゆんぬまづみ  
 ぬ紅蓮くわんだい大紅蓮だいくわんだいのまほり八寒はつせむあどじられやうく餓鬼がきあへめぐりあるひと畜生あくしやうあさまよ  
 ひ修羅しゆらまうつりふしぎや過去くわこ遠えん々く劫ごうのそこし死しのかりにひのれぬらんたまく人間にんげんよ  
 生しやうをうるあひがたき佛法ぶつぽふあひ寶たからは山やま入いながら現世げんせ後生ごしやうをぶらりとくらしたらまど  
 わかしうやまふべき三寶さんぼうをも信しんせず放逸はういつあ惡業あくごんをたくみ手て残ざんひなしくしてまた三惡道さんあくだう  
 よのへるべき事こととててもく淺あさましく悲かなしき事ことと思おもひたまひて日頃ひな願ねがたてまつりし念ねん  
 佛ぶつ題目だいめくやそれくは宗旨しゆじは方便ほうべんさづなみ取付とりつけて此こたひはせめて少すくくは善因ぜんいんをまいてな  
 りども生死しやうじは家いへをはなれ未來みらいは淨刹じゆんせつは臺たいを置おべしと大願だいがんはちかむをたてひとへ後生ごしやう  
 法はふ師しが弁舌べんぜつとらひくをれたねもしや此次こしはれぞみあらを明あをん講談かうだんして聞きせましやう  
 法はふ師しが弁舌べんぜつとらひくをれたねもしや此次こしはれぞみあらを明あをん講談かうだんして聞きせましやう  
 ○和尙わしやういまだ小僧こそうよておはせしとて師しの坊ぼうにつゐるて物ものをみ手てならむなどして居ゐ玉たまふ折せ



虎の歳を  
かゝるに  
まじりぬか  
こりちりせ  
波とよと  
すれ

ふし夜さむのあろなをを師の坊はからさ茶をのつものとしてたゞひとりまゐりて一休へ  
と豆腐やうの物をかりまゐらせられけるよ一休ふれを見て凡出家となまぐさだものをと  
とさるよしう茶玉とりしが師匠はからさ茶をまゐるはくるしおらずいひのさあらば我等も  
たべやさんどやさされける師の坊城のしをおぼしめされなんぢがやうなる小僧の身として  
なまぐさだ物くふとさそ忽罰あたるありと仰られけは一休眉をぞそめしむら之思案  
してやさるゝと同人間の身として小僧おのみをちあたらせや老僧おをなまぐさ物はる  
らと罰えわたるべけきとわさおらおておし茶れを師の坊はたまふといとけなれ身とし  
て心たけたるいふやうかなされをを老僧とてほゆるしはあけれども我等も引導をして喰  
はせよといひふはへを其引導いにかあるよとやらん少しう茶たまはりたしやすされけれ  
を扱々わおせはあしやくなる人やいで引導して聞さんとして一盃もとあるのらさけをさ  
げて箸おつどりのべてのたまくとく

汝元來枯木のとし助んどそれども生て二度水中おほそぶとあたとす愚僧に服され  
て餅果を得よ喝どのたはひてひたものまゐりける一休つくぐと聞て又眉をむそめ



てしめんして夜の明るを待かねていそぎ魚の棚へとしり行をも大ききしたゝかある鯉を  
 一献買取たりて味噌汁をましらへの鯉をひんあざりながたあつとりのべて細首ち  
 うよぢち落さんとせられ茶る所へ師の坊たち出ほらんじてあきはたののざりなり昨夜  
 もしめし教一とくみいと茶あだ小僧の身としてあらざけたおを無用といひしよその生て  
 とたらく物残害して食へん事以外の事ありといましめ玉ふ一休もさかす我等も引導  
 おとしますやて去ぬ体おおとしけるが師の坊もあだればはて大おらひてそれといふある  
 引導ぞやもし尤しからむとゆるとべしきからすむのがさまたとてかりは家の一棒をまわだ  
 にかい込引導いかむとせめられ茶る一休すよしをさりがすいで引導仕らんとて左お鯉の  
 細くびひんにざり右おあがたなをしやあかまへていりく

汝元來なま木の如し助んとすれむにげんとす生て水中にあそむんよりと如し愚僧  
 が糞となれ喝

とて鯉の細くび水もあまらすうち落しぐつくと煮てしたゝか喰て空うを吹ておはせし  
 のバ師の坊これとみてさてもよき引導ぶりで手がとりなる心得かあ昨夜とれらが引導よ

てはからざる茶と佛果を得ずして糞と成べし汝が鯉はくそとはならで佛果を得りさてく  
 活禪なる人や禪僧なるぞや小僧とのとて皮の一棒をかりりととて舌をふるむての玉ひけ  
 るは三年おなる鼠と今年生れの猫が取とりかゝる事をやどかく且汝はたゞもの且とあら  
 じや感たまひけるが案の如々程なく天下老和尚とみづからのたまふほどの活禪師あて  
 一休とて名を千歳に傳る玉ひて田をのへす翁のりをする尼までも物語の種と人いむも  
 ていやされ玉ふ事誠に凡人あてとほしまさいりける

○一休和尚の鮎が好物よて或日つゞぐは鮎を買あつかとさ色けるお折ふし店おだれて  
 あかり茶る彼つからの者よりかしこと尋ねたる故おそかまゝのを待わび玉ふまゝ  
 此たびりれそとといふおながそでの

たあの入道まらのおそさよ

と遊しける處へ鮎四五とい買もて來りければ一休よろあびて此たこむざくと食もあざの  
 んの事なり引導の頑きてりて

千手 觀音 鮎手 多 斬 懸 袖 酢 一拜 二 如何

佐州一味天然別他禁戒任老釋迦

やれ引導とすみけるぞ火罪又とべきか土罪よせんといやく水罪よせよとて手とり足とり手よく沐浴させて袖酢瓶の茶をひた喰ひくひたまひ去る檀方へ行て酒などまめどけるがあまり多く蝸をまわりける故叶却なされけるがと蝸なり且那衆よれを見て大に驚きや客る一休和尚の佛のやうに思ひし蝸をまわり客るかなさてくあまぐさ坊やよれとくどあざけり笑ければ一休よまももさどがすいやとよ我と蝸をたべねとも口より出ればせんたあしとまながら我蝸をくむしおとあらずとあらがひ玉へば口より吐出またるもの食ぬとあらがひ玉ふのやいよくさまへぬ坊やとおせりあがりて笑ければいてくわとせ達たとへ口より蝸出たりとも喰はぬ證據見せんとて皆々引つれて百萬遍行て善導法然の畫像を見せてあれ見たまへ人々よ善導あみだをくひしといふければ口より三尊を出玉へり善導大師をへくわざる物の口より出ると或制一がたしまして愚僧くどざる蝸の出るとさらふせんたあしと仰られ客れを皆人よと手をうつてても願作なるは返答やと口を開て歸りける

○扱一休和尚の生佛又て魚を食して水中へ吐出玉へばりの魚たちまち元のとく生へる  
と洛中ニ此事を専らや傳ふと或人來りてあたりければ一休をかしく思して洛中の辻々あ高札をよとあげられたれ其詞に

來る何日の日さかす松のはどり紫野よあめて魚を喰て其はもとの魚あこさ出し水  
中おあせらさしやる事ありは望のかたぐは見物み出待たてまつる

太夫の天下老和尚一休大禪師

とぞ書れける洛中の諸人は是を見てうその誠かすばり人々いひければ實しおらす思ひに扱のうたがふ處なし正しくは自筆あて高札を立らる上はくするしなくてのなふまじいさや人々見物して末代ののたり句あせとやとてしるを知らぬを見しを見ざるを其日の來るを待のねて門前お市をなし我見せうさじとよるふまでのび上りて洛中貴賤くんじもせり其刻にせあすしのを大盥に水を入なるや魚をよく料理きてかのたらいのやとりよは膳をそへ客る一休出たまひて彼魚をひた食お食たまひて扱とんぎりよびかひて喝々とのたまひて暫く目をふぎなきをし玉へ見物のくんじもと顔をはせりゐて生たる魚を

と死出し玉ふ今やくと待居たるにばらくありてのたまひあるとおれくゝるく  
 のは出あるややふいつたりと一きと手ぎのふ叶出て見せやさんとて種々思案するに中  
 々とかれうらにせなしせはにおよたき煮又ありとひりて捨やせんはや各をば歸りあれと  
 て内へ入玉ふ上下万人きをつふしさておれけたるは折と興媛さまして歸りあるが其  
 中みあるそのいひ答るのみ今参りたる魚々皆生て淵おれをるな里有があき一言の奇誠  
 お正法お死どくなくとこそうけ玉はど一に人の余りよいとんとてふしぎなる事をいひて  
 ほめんが爲に返てそしるおれを其理をしめし玉ふ有がたまくと感念ければ皆人は是に氣  
 がつきて合点また合点せぬをうなづきあへりて歸へしとなり

さて前晚おやくそくやたる因果の二字をあらまし講談いたしたる其次を只今講じませ  
 う因といひ果といひ善と惡とのふたつに生れ苦と樂とを身にうけるものなよとと  
 せんさくして見ればと我一心より作しあるとどが心あさせるといふ事まで銘々覺な  
 がら善方おはうつらす惡し死事といへば先づいひ我人の過去に惡業が多く残りてまた  
 五道六道お引をどさんと心の鬼が身をとおれす日夜つきそひて少よてを惡念がおよき

ばたよりを得て善心をさまたげぬるをそつてあらもる六賊といふ六の盗人だが目と鼻  
 の口と耳と身と意と出入かとり目あうつ々しきそのを見れを人の親たるそののあや  
 うなる衣類染そのを我子にして着たや孫めあしらへてとらせたと罪をつくりまた  
 子を持め女とそんじよ其娘子の今日の花見の着物見れをさて風流おもやふ當世のそ  
 め出し帯の何々たしかひあがたの内又あつたのかと覺るさし櫛のけつからさおれを  
 のやうにして寺参りするからをこれやと見にえよと能見られんものをしやははーやと  
 欲をおよと切又一盃なる親父も伊丹鴻のいけのよものぶりの樽片荷と弁當旦那の  
 いえや向へ往てをまやると久三がいそがしげに通るを見て何とよいものが行肴がな  
 くを大事あるまいとおえひ其外若男も色ゆる女をみるは煩悩。たまお行合袖の  
 ふり合にこや心うかれあめをしたひ百度も見かへまたるも見ぐるしと坊主の女ねち  
 受けはほと淺ましきはなしこれ皆眼よ彼の色欲の盗人が入かとりて其心をうとふ之仙  
 人が通致失ひけるもつふさにいへを八十八仗の見惑あり其外か耳お聲を聞てなづみけ  
 いひ物おしに形の見へねども氣をうとかしかりる穢土をいとひ淨土をねがふ念佛の音

聲をさへおとしろきこと音やと後世れ心と余所おきて聲おれんばをさし鼻おとかり  
 物と思ひながら袂お留し薫物おと心をどきめかし舌おあぢとひ身おふれ意お録し口  
 おいふ一日一夜四千念年々お思ふ事之皆惡道お引おとさかだちありたまさかお獲る  
 善心お此六難お盗人おぬすみとらきて善心と、やとさめてわしき方おれみほだされお  
 よひけ譚談をを只何とさふ聞たまふべ茶れと中々法とき、おとひ事であく一日お種  
 れたとへ大海針は事と方々おてうせんある事あり只今此法問をきくらちありとせ  
 めて意お馳おつとををため意お猿をつさぎとめてき、玉へ觀念觀法とあらす身お  
 とまおと世路おさへられ親お命日お寺まおのさへあらぬ世れ中いとんや聖教おまお  
 こをさらす事をいとまを得すしおれを聞といふ事が一ッお樂しきとより聞法お得益  
 甚深と、おとだふかければ只一詞を佛をしとあらををろそかお聞ぬやうお先心を  
 おちつとべし聞といふお三ッお品あると法苑珠林おまおのそれ内聞をそつて聞が三  
 ッお中おと下成としめされたしかれと何をそつて聞といへを心をもつて聞がまお  
 聞やうかるがもる心愛おあらされを聞ともさよへす食へどを其味をしらすと儒書おも

れべたの莊子おも神をこらしと寂お聞といひ前漢書買山が傳お天下目をいたいて祝  
 耳をかたおけて聞とあるもうつらりと見すうつらりと聞めといふ事之しかしおがら  
 惡業煩惱おみおとゆると事ろくおと濟す只佛法とあらをわりのがたやとをかり信  
 念たるがよし萬物お理をそまそといふと知恵がおけをあらぬとしるべし

○或人和尙へ参る折ふし和尙たいめんわの諸事はとあしかとて後此男やや和尙さまわ  
 たくしと此まる病中おて本服いたし今日うゐだち仕まづ和尙さまへは見舞やたいさて和  
 尙さまおとて答話がよきと事凡日本中お流布仕りていおえれ何おてもはとあし聞され  
 いへさりおがら今程世間お高直あるををてあつらひい先何々おていや一休さとしめ  
 しされを高さ物をいんとおあらを

- ふじお山お      あさまおだお      伯耆お大せん      高間おみね
- あたおさん      ひねいさん      東寺お塔      天狗おお
- 品こそかおれ      きだふお墨跡      大灯お扱      貫之お歌書      定家お色紙おたんざお扱
- あらかねお土おれおと      丸壺おすびおふらや

おれのぶらさし。鶴が一聲。せしむらう。まゝめさざしや。太刀かたあよしみつ  
正宗。國とし。波れひら行安。しらぬれうつばよ。日でもけ年の米の直とぬんすとあ  
ほも高きかねあり。かれうびんがのまゐたて。盡のうたひあへ。をんしきらひけし  
かみやてう

こそまでありといひおさめたまふとあるへ旦那かたよりとては衣を一衣これと和尚さま  
へ進上し参らするとて持來る一休のみられしこそおぼしめさる氣色もあつて一言の禮と  
いふべき言もあつた狂歌をこへ玉ふ

から衣またのらよるも唐衣

のへすぐせからころもかあ

かといひて是を返事おしつくり玉ふと

○又さる人一休和尚へたづね行さんとの望を言われと和尚も、玉ひ安き事や其望さら  
を先金剛の正体といふ物をわんど出し玉へとおかせらる。この者聞て取あへす其さんが  
うの正体あらと案するお及たすそれとわらふては座あるべし手細とまつわらといふ物お

てまんがまど作る物おれば。のくあるべしまよりとや。和尚おかしむのまよりおとくして。いや  
くさやうの物おとさし。金剛の正体とやと音わつて目にも見入す。手にもとられず火  
おとやけす。切てもされず。水ぬてもぬれず色ももそはらさず。のくんと無ものつとあも入  
を。元來其どよよしたがつて。又あるものありとあし玉ふ。此ののま。てこは六かしさ  
たづねもののおまんがうさらばどのく。おさらでと別お余あるものおてつくる物あるまま  
さしといぞんせぬ事とて出けるが門のやとりより又どつてかへし坊さまたい今おし  
へ玉ふまんがうの正体わかりました門前よととと合点いたしほぞやそれと屁おては座  
あるべし手細とまつ屁おすとのと音ありて手にを取られず目よを見へす色おとまます  
火おもや茶す切てもたを煮てもかくてを元來なまものかとおもへて服中のとまよより  
ていとつもある物にてはとじまんがやよら入るとをかしかりま

和尚あるとけ違れ早がてんも徳ありと引とみたとへをかきつんばなる者人に何を商ひ  
してよからんと問しよめてを聲よとと合点行まじと思ひ耳をおしへて兎角いしく次第  
おて何てても利ありとら入るを此つんばが心にさてと耳お似たる物をあきなへといふ

事と思ひ木々しを大分買込借るに折ふし諸方より死れて此もの大且利徳を得て後之長者と名ける是と人の言葉真直ふうけてうたがひす誠は心よりなせる故に利を得たりしかれの佛法の一句を聞いても少もまたがはずたやへを愚癡よして法は深理と合点もあらずともたい有かたやと思ふ心が則來佛のいせめとある愛を源空上人も一定の思へを一定と仰られし安心決定の處なり歌に

聞どきは實をとおもふのりのみち

かへるとさよとわすれこそすれ

とよめる開た一座ぎとどまらずとあおめてたつ人をのりなり耳と地とく耳がよし浄土双六もぬうちん地おくへ一度おちてと二度出るとのなひがたさゆゑ地おくやいふなり籠耳は水がどまらねども水中にひたえてかくうちと一はいあるやうよこの一座おゐてさく内と水のあるとくちやうもんの座をたつと死はたまると思ふ法の水はみなをつてしづくもな死もあかど耳といふなり人とうまれて覺へのつよ死とよわさと利根鈍根上根下根と有からぬをせひ覺すとせくるしらすしはらをも法問をたもつその

我則親喜す諸佛も又しかなりと説玉ふ刹那片時間よて有がたき法縁によつて佛やさつのをしへをうたたまひるは大切なる事と信心を發し一遍の後生を底心よりやすが專なりたてへを火ともふ物は重寶なる徳ありて大寒小寒の氷面川わたれを手足の切るゝおどくつめたく五体ちいみわがるやどの朝夕に火をたきわたれをそのまゝわたるまゝり其外食物を煮金物をとらゝして自由自在におつかふ能あれども火事といふときは盗人とりこは家の五軒や十軒は且時の間又灰やなし人もやさあらずとすんごまひい、やなやつちと彼五体をあたゝめせれば燒煮く所の火と此わごとひの火とと別々かどおせへば少も火おちがひなく全く同火なりたい用ひやうよよつて善惡明白あれをとな我心をわしくもつなど是にたどへて仰置れたあると又生子を金銀とつてやしなひ一二ヶ月をだてしのは我子あち、をあたへ養子といつしかつゝ殺し罰はらわれつむに刃みか、ましを惡ひ心のそちひやうゆゑなを現在かくのとくらしやくせられたると其はの地獄しかそはやくめぐる因果ををしやのし血今は針はどの事を棒はどの事をくふ目に見へてとやりとさらこの殺生戒を大乗門のときとせよ置は佛と大慈大悲

のかたまりたるおればもの、命をどるを別おいましめ玉むしかり殺生おつゝてさ  
ぐこれあるはせお三世のひくひやうをつぶすよいなして聞せませう去ながら余りか  
たれ事をのぞいでのみなくたいとつてござらふ先一ふく

○或寺の門の破風お猿を三ッ作付たり一ッは両手を以て目をふさぎ一ッのさるは両手に  
て耳をふさぐ今一ッと口をふさぐあると死三人づれよて此門前にたるとまり是を見物と  
折ふし一休そこを通り玉ひて立よと是を見たまむうちうなづき笑て過行たはふ三人のう  
ち一人がやう何も三ッの猿のいとれをさまぐなんじけきとを終お合点もかず只今こ  
れよしはら々ありて行たまふ出家のうらうあづきて通られ一に定めて合点し玉ふさらめ  
いざ子細をたづねみんな追付て一休の袖をむかへ坊お物たづねずさん只今門前にあり  
つる猿をほらんありてうらうあづき笑たまふやうは定めては僧とよくはぞんじあまつる  
そのとぞんするのやうにや我々と愚痴文盲おして何の弁をぞんせざる者ぞをなぞ子細  
をかたし聞せたまへや宿へのへりとなしおも仕らんいかよくと問けきを一休されえこ  
と其猿のいとれと我等よくはしくはぞんせず去ながら何れをれたくの若き衆の尋ねた

はふにしらぬといふもいかし斯いひし事をあむげおひ

何事を見ざるいとざるさかざる

たいやと茶おもまさるなりけり

とよと聞せたまへば三人の者どもとてく尤なるは歌のこゝろかき是えめんくの心得  
にあくてかきいさる歌とさて今の坊と佛神の現化なるべしと皆一同に感おたち師とし  
が一人のやうらゆかにめんく此歌の心をそつて三人ともお今日よりして見ざる聞ざる  
いとざるの願をたつべし皆もつとも同じて扱かたらよ立よりければ折ふし遠寺の晩  
鐘のすのに聞へけるを聞ざるの願たてたる人何となくおもむ出て

今日の日もいのちの内は暮れけり

あそもやだかん入相のかね

とふるは歌をうそ吹ける處にいりざるの願たてたる人のいひけるといふに其方聞ざるの  
願むなしやなりぬる事のあはしよと手を打おびをさして笑おさけるとおろへ見ざる  
の願立たる人のいゑるえさくくたくと何を聞何をいぬととをよ大願をやぶり玉ふ

やおろのにあさましき事のなや、がめらるゝ三人の心おのし

○又さる初心ある男あどさいく一休和尚へ参り萬うけたまはる和尚此そのを見るたびに其方たんき人の物ごとお随分かんふんせられと仰られる此もの答てややうもつとをかんふん仕は事隨身よこたへ過て覺へい去ながら我何ののまひもなく無異無事よまのどありいと死いたづらもの來りてそれがしが面よのそえきをささのけいをおし拭てのんおん仕いとや和尚開玉ひて言語道斷それの見る死かんふんの心得やうかあかへすくも其かそと死をれおふべのらすもし其かそと死をのこひいとえ死か茶たる田夫も我等がのすて死をむさくきたな死とおもへをまそのおひたれにくき仕かたありと猶々いかりのさねてといのるめいのあとせんすらんさるやどに其かそと死をきたあくとを其まゝおきて干つけ置べまごき何のどがもなき人の面へかすは死をい死かける馬鹿ものど生有をのにあらすいどへふ狂亂すいさやうごのたくらだ非人とといふべしそれ蠅といふむしといか成貴人高位の人のつひりへをおそれずあがど夫婦のかたらひ事成をさしあるひと蠅をわりかくるされを其蠅はもとよと虫なまどおもへを腹も立す真このとくしい同前のを

のに對するどさと人倫のなまさとふよあらす堪忍のよ、ろへ是やどにもあくてといでのあらん

因果原然修羅のニツをひのきしやさん過去の因をしらんと欲せむ現在の果を見よ未來の果をしらんと欲せむ現在の因を見よといふ娑婆にして現在の果を見て過去未來の果を志るどいへり因果といふと遠い事であと經文多き中よ大集經は十來といふ事のあり其中よ命長きものと慈悲の中よ來る命みじかさものと殺生の中より來る未來もほた然なり今此悲しき淨身となりたると已よ過去の業因よよつて四苦八苦よよし付あしきよ付叶ぬ世をなげく近くと成敗之行とれてかばねをさらし籠獄のそ死をいたすを見玉へ其中よ重きものろさがあつていつまおろかはなければど人殺したるその助かるんおし但し侍の戦場よむのむて凶徒をまぞけ盜賊を討て國を治め義をたつると佛法は一殺多生とぞ慈悲の殺生ともや侍るそれとひとつ事でもまき梵網經よどくがとく一切衆生の皆これ累世の六親けんぞく只頭をあらため面をのるあつて各相知すやわりて六道とんるのあいだ生々世々生のわり死よかわりあるとさひ父となり母やあり娘と



あり伯父とありいとことと縁者となり舞となしもうとしようめとなり師匠とあり  
 弟子のありあるひと士と生まれ百姓と生し大工とあり商人となり夫とあり妻となりて  
 形とかたり所とへだつれどたがひに恩愛のはあるよとさなかとしを凡夫と淺ましく  
 隔生即忘とて胎内より生まれいつるよとさかのくるしみよ過去のあまさまをひすきていか  
 なるもの今人みぢまれ來りしやら何とまたる因縁よつて親子とありたるやう覺へ  
 むしらす少しの利欲に目がなれて人をよろしつんさきて又とさ敵をよとめ切をわ  
 りさらるゝそありまづ未來までと遠き事あるひは口論して人を切たり打れたりしたる  
 事と聞かよとれん其如現世に修羅道のせめをうくる事と扱を淺ましくのなしき事であ  
 らすや扱未來の事と誹經お多くといて曰殺生のつみとく衆生をして地獄がさちや生  
 み落るをし人中に生れと二種の果報を得一ッおとたん命二ッお多病傍加經には殺生  
 のものと號叫地獄と落お説き因果經よと切ころすその死して刀山劔樹地獄の中よ落る  
 とよとつるぎの山お追立られてまた身をさのれ血おせびてあらもるくるしみをう  
 くる事共のすつもるにつもりつくされず

○北野邊ひて十二三をかりの童女の菜つみて居るが俄おひきふし死お入ける處へ一休通  
 りのりり立よ見たはへば四五尺をかきなる蛇とひのりりけるを和尚杖よてはらひの茶  
 童女を引おまし子細をどひ玉へば只今よよ若ものゝ來りてとあおふせくと仰られて  
 其後むたいに引ふせらさひが何おやらん頭のおまをとおとさおとろきたるふせいよて左  
 あがらよりも付すして其まゝにげさりたまふなりとられたる一休ふしぎよおぼしめされし  
 が髪の前結をゆかせて見玉へを尊勝陀羅尼の書たるを引さ元おひにしたりける是にお  
 それて近づかさるどふしぎなれと和尚あると死且那方おて此事をとあしたまふ去程よ此  
 尊勝だらおの功德にくとおまたの命をたすのりたを扱おとまもりといふものえもつべき  
 事あり

○扱愛に一休一大事因縁は工夫なまをしと死諸且那あるひと友達衆毎日とむらひ來ま  
 してさまた茶となまをれをかしましく思召ては心地あしとて一えん人よ出會たまとす  
 昔人よろもとあく折々お見舞や侍れを長髪はうくとし玉ひて何とせ色とへすは  
 腦とのみ仰られける且那を先とまては知音衆もよりあり是は氣遣はしき事なりとよとの

名譽を入かへく掛まゐらせはいたとりといふを聞て櫻師やされけるは脈といふもよし不審なるは煩とどれもくや茶あるるとき且那智音楽待集り此はなやみの様子い  
 いのまををしつ熱の病と見え若死に僧れ事されをしや戀なをなされてのく思  
 ひわづらむ玉ふ事もやあらんと口々よやせれけるがいやく人多く知りたりと思召はわ  
 かし給とめ事もや侍らんひそかふとき中の知音の二三人見舞てそとうかいを侍らは誰  
 と名ざしあるべしまからを誰人にてをわれ此者どもがかりをなばなどか本意をどげら  
 れぬ事とあるべからずと願母し之言合せてひそかよ三人参りたど一休出わひ四方山の物  
 がたりすみて一人や出けると此間さまぐのは療治ふてを脈は常ふのわらずと醫師を  
 のくやなり平生にところがひて何とて心深くいたらせ玉ふをや定て戀をなさるゝと見つ  
 茶侍るとひが目か有のまゝに仰られよかあへて参らせんとうちつてやある一休いふよ  
 そうれしげなるは面をせめて此上之何をのくすべし此日頃戀とびてさてかくの如くや  
 つればてゝひかり能ふそ仰出されたり何とやらん我等の似合ぬ事にて侍きせと各は日  
 頃のよしみなれをひとるよ沙汰さくうなへてたへ去ちがら糸あらさく心見だれてつ

かしやそれと名を面上にはのべがたし一筆か死て参らせべし門外出玉ひておのく  
 むらいては覽していとさかきるたまひらを我等が命とながらへておのく方へと其のと  
 り能き道敷へやさんとておくの間へすんと入一筆さらりと書て引むとび彼三人は渡し玉  
 ふ三人とろまびは心安く思し及せとて門外へとより出て扱ふとすさぬ事とていとさき其  
 名をしらまほしくて彼等ひら死て見れを歌よ

本来の面目坊がたちすがぬ

ひと目見しよと戀とこそなれ

我のみか釋迦を達しをあらかんを

おの君もゑに身をやつしとあり

どのよふたり三人のものと茶に相違して構手を打て日頃の心をしらぬ身があらぬわ  
 ざを思ひけるこそおかしけれ今よと定めぬおせけよたをかられけるよとあろのなれをこ  
 とく有がたき坊か茶書ようつし木ふ死さめると多けれどとぬもちの釋迦如來ありとお  
 がまぬ人となうりやあり

○嵯峨了意坊といふ道心者ありけるいつの頃よりか首に蛇まとの付てとあれずさまぐの事をなして漸々となせを又夜は間元のとくにまとい付まどおひたり切たる坊主あれを日々おさがより京へ出て鉢こひけるお彼蛇をのくさんがためもたんと首おのけて見へざるやうよまて出る此事ひとへ難義に思ひ其頃二尊院に一休おのしるるおのれ坊主たづね行どが身のやうす強くとしくかたどけれを一休死し玉ひいかさまそれの女のうちやく成べし汝是と高野山へ上りいへさもあくを退之事あらざる教む玉ふくろこびて高野へ登りいお不動坂と彼蛇うせてなした意いよく有がたき事お思ひ高野山も二三年も住しが今と早蛇の事も打わすれ過しふる里のまひしさを又てがへるなりしが二三日と何の子細をあらしむ又夜の間お彼の蛇まとい付けり其は高野山お住ならを強めでたかるべきに何ぞや古郷へかゑり二度難義おあふ事定業の程こそなしけれ今お坊主のすましおと蛇寺とぞみなやのへり

一休諸國物語圖繪卷一畢

一休諸國物語圖繪卷之二

○一休且那衆二三人同心して東山邊へ遊参に出たまふと死しも春の中はあて梢の花さい中にはまかしくよめさん多しさる片たら五七人うちより手を打たれおどりのあがりて大笑ひて何ぞお何事のおをしるのいけるとさく所お尻をむりておもしろがる且那の内一人のややうゆまり酒よてうじ何がそれほど尻がおもしろかるべし一休やさるよえいやおもしろ死こそとわいなよく昔よりおもしろき事おれをこそ誤おもしろれいるべやわらおもしろの春べやとうたふやと扱はるのへはおもしろ死を道理とやされ死

○一休和尚いまだ十二三歳のよる師匠粘つばを一ツ持てた一人ある小僧いさかも喰せずして汝是をのよとよをふべのらすもし是を子どもがくるを忽ち死る毒なりといふておたもの我はのど食いて取置る一休おはるよと哀れ毒おもせよ死るとも師の出られなむくふべしと思ひて待ける處に折ふし師匠用わりて出らる一休やがてさがし出し

柵たすより取とるゝさまよ打うちまぼしわたまへもさる物ものも付つける日ひ頃ころくひたしとかせひける  
 まゝ先まづ二三さんをいえてはつさへ師し匠じやうのひどうせらるゝ壺ひをうちおとしみぢんよなと  
 のくそる處ところ師しかへらるゝお一休いっけいとくぐたなるゝ師し何なに事ことぞと問とるゝされを大だい事じのあ  
 免まつばを打うちわりのたるなり定さだめてはたすねのと死しは何なにとすべしとおもむ命いのちいさてもよしな  
 老お子どもが喰くへば死しると仰おぼされはほどよ一盃いちはいたべひ得えども死しあす二三さん盃はいたべつれども死し  
 なれずわたまおせ死しものよを付つけて死しんどどんじひ得えどもとてしなきいりすどの玉たまへば  
 師しの坊ぼうも言ことの棄いなくてはうちわらひてぞ入いたまふ

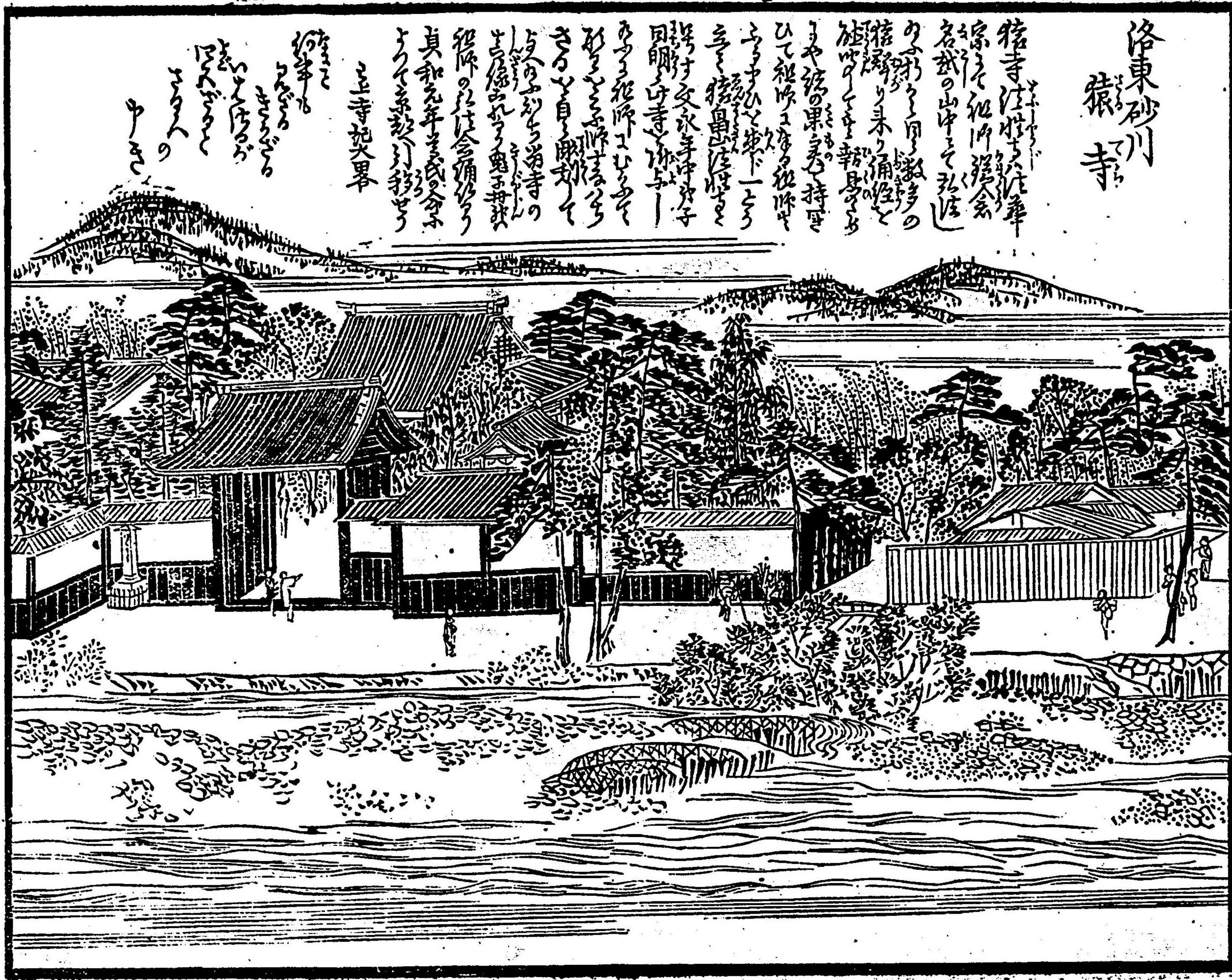
扱さて講かう談たんの次ついでをおとなしやさう一寸いっすんの虫むしお五分ごぶんのたましいや事ことのい鶴つる鷹たかの逍せう遙やうを好このむ  
 そのと死しして鉄てつ鑿さく地ち獄ごくの中なかよ落おちる鶏けいをころし卵たまごを煮に焼やくするものは灰はい河が地ち獄ごくにしづみくわん鑑かん  
 錫しやく獄ごく中ちゆうお落おちて豆まめをよるとと尖せん石せきぢお々にいつてうつおまよ熱ねつ鉄てつの上うへにふし其そのせなかに  
 尖せん石せきをのせ石いしの中なかよの猛まう火かさへはををまりて重おもくして熱あつさといふばかりなくなたへがぬ  
 し皆みなふれ殺せつ生じやうと因果いんぐわをり此この身みは請うくるとて鳥てん類るい肉にく類るいをよるすも同どう亥がい凡ぼん血けつをふくと氣きをう  
 くるもの皆みなこれ靈れい地ちあせしなきのも、は、づき遠とほくく死しをおそるゝ事ことをしつて

# 洛東砂川 猿寺

猿寺は性宗の住持  
 宗は元徳の住持  
 名武の山中にて  
 ひて祖師工なる祖師や  
 ふりやひと下一と  
 まる猿島に住居  
 持守文永年中持守  
 自願して寺と改めし  
 まりて祖師工なる祖師や  
 さる自願改めし  
 貞和元年壬辰年  
 よりて系統引移せり

上寺紀大畧

猿寺の  
 性宗の  
 宗の  
 名武の  
 ひて祖師工なる祖師や  
 ふりやひと下一と  
 まる猿島に住居  
 持守文永年中持守  
 自願して寺と改めし  
 まりて祖師工なる祖師や  
 さる自願改めし  
 貞和元年壬辰年  
 よりて系統引移せり



人の足おと越さして蚯蚓をちやつと聲をやめ蚤れやうなるちひさは虫も人お介らさじ  
どしひまをどともあせも空お家つる越うち落せどしんだ顔志て手足をちいめそくみ  
たる氣色も命を大事おするもあせの大唐れ交抄のいふ國は實けんそる人貞觀年中のは  
じめつかたつとめをやめて樂々と隠居してゐられしが此人自体のら鷹狩がすきにひ  
たど犬をさろして四五十の鷹の餌よのれしが有とさふとちりけもとよりつかみ立る  
やうお寒くあり大ねつし頭痛がしてくるやう正躰もなうちふしなやみ皆醫術も及ば  
ざりしよある夜人しづまりてれちまだらと赤死しろき犬五疋死たいてどらく其方が命  
をとらではおかぬと五躰お取つたせめけるとき此人おもひ當りて汝を殺せしは家來通  
達が科ない我ところさすといふバ犬は日通達とそあたの差圖よてころせよ余の人の仕  
業おわらず我等とでに他の食を盗ます門番のわてがひを喰いて命をつまぐ何のあやま  
りわつて殺し玉ふぞ此詞おつまりてまからは汝らがため後生越吊らとんといふよ四  
ッの犬と合点せしお一ッの白犬頭をふりて曰我すでもつみあ死にあらざる、れみなら  
ず未だ死を知らざるお生かから我肉を割れしくし其とき怨念心肝よそと忘さず

とて承引せすまれば四ツけ犬わつひでいふは此人の命を今どいたりとも我々が命かへる事なしと思へど追善ばだいを祈り玉といまよ苦るまみまのがる善根あらすやと理をつくしていふふ心をやとらけぬるとおもへよよみかへきましのれども猶手足をうみおととかあはず夫より約束のと々犬れた処に追福なしたるお此病たちまぢ平癒したる事もあらず其外巢をのたふけ宿鳥城射ひ離をのこさる事儒教おせいましむいはんや佛道の大慈悲門におゐていましめざらんや空をのける翼地をこしる者だもの水にすま魚子をゆとれむのころ人より切なる事は子をもつ鯨といふ魚を追のけて三尺をかりある鎗のやうなる物おてくしくと突と死と母あるくはら子の脊中おたおかさなりて我死るまではつられて終よ子をいだきおがら釣鐘のとくなる聲を上げて鳴となれず死くお不便なる事いふ斗おしこれ畜類の子と思ひその身と死ぬるとして子をといとふなるに人間に生をうけながら己が子を尻の下よしさあるひは殺したると世話にいふ熱火子よいらふおは此類のとなり然の畜生と人よまされり

○あると死白河邊お住する桑門に名譽なるかる口の人侍りけるが一休のゐる口ある事をさ

、おとびていつぞの行て難句をしりけ心見んや常々心がけられけるが不斗おもひ當たる無向わい茶をささらば参りては知人にさかり扱一句して見んととるぐと白河邊より紫野へとぞいそがまける折ふし一休を庵にましめては知人となりとくほるはとよ内々ぬくみし一句は句作も出来ければを彼僧やさまけるはうけ給ひ及しほのる口燧何おも一旬遊せかま何とぞ付て見侍らんとやさされければ一休仰らるゝと客發句お亭主脇とよそやせ先其方おそとせとあいのを内々たくみ置し事おれをさらをやて見んとてなん句をおとと出され茶が此處は何とぞ所ぞ一休むらさき野と仰られけむ

紫野 丹波 近

白川 黒谷 隣

とあそとし茶をのの僧肝をつぶまてて六ヶしき境向あり一句のうちには二ツの色字二ツの所の名いかなるひやうたんは川ながれなるる口を少しはしらまふらとてし玉とへし

と思ひし小貝とる海士あらで息をつまめへす付たまふか、る名對ある上とちやくとし  
とて空うとふひて尻をのらげてあげられけるとなり

○又書書の土佐守ふ内々掛物に書を一ぶくたのみたる人ありしが終よのきてつかとさす彼  
人心せきて直土佐守の宿る行くければ折ふし太鼓うち殿ふとあらねどひる寝してこ  
そ居茶れ彼仁つねぐしたしとかたる中あり内々たれみおきし事おれを引つり起しの、  
され茶る土佐守ねふりよたゆすたとひ一夜ねすとないとも晩ふか死て参らせんとておた  
申しかれ共又晩といはを明日は川は淵瀬と心かとりをやせん世中ないひらふといふお是  
非ちや筆を取るくどとせしえけおつとりさつと書てこれくどとふせり茶る望み足  
いぬとその書とつてかへりひねくりまとしてよくくみれ共さらに向ともしれす水と  
かきて其中は二筆ぐるくどしたるものありさらに見分られす余り合点ゆらされば土佐  
守方へ持行向あると問へどや我等をしらすといふか、る書をもつて何のせん引やぶら  
んどおもへと三國一出来たりとやせん角やせんお思ひ茶るがいやく一休和尚は讚を  
こいて掛物とせんきすどといとぎ大徳寺へえしり行和向ふすけるは此書と土佐守に書し

しがさらに此水中に物しれすいかいほ覽われとすけををされを何とを見へねども讚がれ  
ぞみあらはしてまゐらせんと仰られければ恭なくとて賛をかふ一休筆とりて

水中の物ありその一物残とへを書し書工も

しらす持ぬしをしらす賛とる我は猶しらす

と遊しけれをこれを見る人さく人毎にても真とくなるは心をせや無二なし三國一の掛  
物あるべしといひしが今におめて其か茶をのたへ人れ手あわらすおかや

○或寺は五百羅漢を作りて堂供養しけれを貴賤群集の見物ありけり法事やみてのち其寺の  
僧らかなのまへは香花おど取りあけるおこびたる世俗二三人羅のんを見物し居たるが余  
の人の退茶とて此仁一人つくぐどあがめめて傍の僧は問茶るは此五百羅漢お一々名お  
そおとらんは僧のさだめてはぞんじあらん承とたしとすけれは此僧はたは三徳の外は  
一佛も名をくらさる茶をば何ともいとすして方丈のかたおけ入ける折ふし一休行  
合せ居玉いて何事あると問玉へをまかくのくしアされける一休のたまひけるはいら  
ざる凡俗のどがめたてやかくて慈にもならざる事たれうと覺侍んやされを望ならば言て



聞てへしとて羅漢堂へいざなむべしと一々とい玉へ真中なるを釋迦をひたりあると迦  
 葉右あるは阿難さて次ととへを南無さんなど其次のやへばとやと其次ととへ  
 をおらちたと一々をんげ呪の文よて答へ玉へを五百らかんりさて置百千羅漢をどへ共  
 何のと答へ玉へざらんたんと問をさらくと答へたまひ凡そ百をかりととひしが此  
 俗人さて和尙ふとよきは覺へかなと中茶を和尙打らむとさやといと茶さより一  
 巻をかりと中ふて覺へていへと仰られければ此俗人心付取入てかへりけるとさとされを  
 時ふとつて頓作なるは心入と死く人感じけるとかや物と問て用ふならず覺ても用ふあら  
 ぬ事ををいはざるよまざるめてたしよまなき事を聞てあやつられけるぞすべて羅漢の  
 とよとあるべからず

さて殺生を止るべたのりなしあり楞加經に曰佛衆生をみるふ六道輪廻いおなじく生死  
 にありてたがむに相喰くらふしたし死そのあならずといふとなと説れて先祖の祖父  
 祖母いかなる罪業によつて今鯛どうまれ伯父坊がくじらになとて来やら兄弟がえびさ  
 こみなつて来て肴おしらるゝやら凡夫の眼ららしらめ事あり出家たるその肉食をた

つひひとつとみれらのいはれまた不淨なるをれと殺生を當るもあにくえぬとの事な  
 り必あじといにふけりて彼魚の肉をまるしてしてやつたらせと思ふ心のおこるま  
 もれでもし此もあまふましすると思ふべし扱今の經文のとく六道りんゑのうちと生と  
 ししけるそのいたしをれてあいのさといふと彼般般紂王西伯をどらへてひそ  
 ろふ西伯の子を殺して身城ままやかみさうりくださ煮ておくりしお西伯思とす是をくひ  
 てわが子の肉といふとをしらす紂王大いあおさ茶を笑て誰の西伯を聖人といふ我子を  
 喰てしらすの事といよく惡逆のんありと史記の文よは是を合点をれを此西伯と  
 聖人よてしのみ子の生をそのへぬ肉をさへしたしものとしらす我々の愚智の凡夫ま  
 たくらふ鳥類肉のいま生をかへたるをれをれを正眞の母親が生かひりて來たるともし  
 らす宇治拾遺おを餘おうまれのわりて來る人ありといふ事をの茶る近頃近江國且耐  
 成てくる人をあり紀の國よ人の親たるもの那智の犬おうまれたるとなし其外のな双紙  
 よよはれらの證據多きとをろましの書など引てやまばまれを一日か二日にこつつくさ  
 れぬを澤山ふあるとなりのやうよせを向後常住しやうぞん愼なされよ魚類でそく

ふ事ならぬやうにやと思しめさんがそにてはなし是とたい經文のわらま一燧中のヒヤ  
 肴うまがそつて參るは一んだものなれば此方の殺生おとならず去ながら因縁このがれ  
 ぬほどに只みづのら手に網をのり釣をたれて咎なきもの燧殺し玉ふは非無用此とうち  
 をよくく合点してなる事あらむとい事して人にもふるまひ參るがよしし出家  
 たるその、徳利まどじやうを入たるいひかなるいひわけあるを存せずかくや恩僧も  
 しらす惣て畜生のかすあまたなる事五行大義といふ文あり羽のとへたる物三百六  
 十其中にかしらと鳳凰毛のはへたるもの三百六十中あさりんの司うるものあるそのが  
 又三百六十龍がつかさどるものと甲のあるもの三百六十龜が司禱あるもの三百六十人間が  
 かしらあり又ゆる經は畜生不同あれども約めて三種の魚鳥獸なり是一て無量ゆり  
 魚に六千四百いろ鳥お四千五百品獸お二千四百種ありと説き正法念經お種數不同に  
 して四ヶ億ありといふあるひは金翅鳥尾頭の間長さ事ハ八千由旬兩のつばさ横三百六  
 十万里ふ羽うつ其飛とき寒天の雲のとしと書跋難陀龍王と須彌山をまどふ事七はぐ  
 り摩竭大魚は長々三百由旬七百由旬是莊子ふかけり鯉といふ魚おと少きものハ蚤蚊虱



さか  
が  
山  
の  
寺  
の  
名  
を  
記  
す

人  
乃  
身  
の  
脊  
骨  
の  
ま  
ま  
な  
ら  
び  
を  
ま  
も  
ら  
う  
と  
す

宗  
鑑

人の身の毛は中々住む八万の戸虫さて其外ハ山ニ住川に住海に住里に住土に住空に住  
そのある小虫をねらへばくちなと又かあるをふくし又なめくしり猪の鹿おとられ鹿は  
た狩人にうたれ強きものハ弱きを伏しまたまぢかきそのと長死にまかれ香だりのまれ  
たりくはれたりつさあひささあひかみあひいていかりあいかりをかさね苦しみにくるし  
みをまし幾度か死いく度か生れかたちをかゝて苦惱をうぐるその何ぞ現世は過去の  
業因未來また現在の悪心より悪所あうまれわれと我身のとふる残よく分別ありて少  
多とを悪心をもつまじ人事いとじ物の命をとるまじ何れの宗も取つゝてなりとも未來  
をたすかりたしと底眞實よしんぐをもやうし是非の度と此五道六道の火宅をの  
がる、やうあひとへお佛力經力をたのみたてはつると一筋も思ひとりて如來の大慈大  
悲のさづかふすがりたてまつらるやうやく億劫おせわひがたき身を取となこと又もわ  
の三途にかへるやど日夜心得のある事ありたい安心決定が大事の所かすらす忘れ玉  
ふな又殺生おつひて鉄輪地おくの糞尿地おくの野狐の身うくる事何のの酢のこんよ  
やくの牛房大根のとすべき事あまたわれどもまづ講釋とまれよとてたませう

○去るままでびたる男一休のそとへ雀を一羽とちていのち坊主のそとにめと生の死かいか  
 ん和尚と答へたはふ此のいそまをことごとくとる此心と生なりといと殺さへし又  
 死きりといと放ちやらむとの事のしらす一休其後かれが方へ行玉おてといり口のしき  
 るをふとまたげて亭主くどよむをけると死亭主出けれを一休此敷居残出るか入るかど  
 ういたまるが亭主おの返答もいとすたう手を打て笑ひしやあり

○又或とき一休のつら川をわたり玉ふよ何どのし玉ひけん川中おて倒れ流れたまふよ折ふ  
 し川ばたおと人多くあつまり居てよれとくといひながらたきひとりあげんをゆふの  
 をなかりしを一町ばかり流れて幸ひ川杭よか、りやうくよてあがり玉ひしかを人々  
 よりつをぬさてくは坊と運つよき人かな何としてあがられけるやといひしかば一休打  
 ちらひてされを我川へとまりたきよあがいたり上りたきよまを生たりさまで珍らし  
 死事おとわらざり茶のいそさるれを人々聞てさてく口がしこき坊主のなといつと笑ひ  
 て打過ぬ

○爰に山里お或もの、つまさる男とひとかあたらひ互お情ふやのくちざりあさからざり

けり或夜のむつとにいつがいつはで斯としのびなんやいかよもてれたつてを殺して思ふ  
 はくに契のさんやと互おうちと茶で談合したをみ出して或夜男に酒をしめてゑい臥さし  
 め夜ふ茶人しづはつて後まをこと二人きてをこの頭お針乃うちてまろしさて家お火  
 をかけ焼死たる体おしうたがふ人もなきやうよもておし死たるかをねおといつ死聲をを  
 ろいおなきさけびけり折ふし一休通の合せ此女のなき聲を聞き不思議のおもひをなした  
 まひてあたりのちのき人おたづね玉へをしのぐとかたる和尚死し玉いて此女のなき聲と  
 おときたるてうしおて更おのあしみの聲おとあらずふしきなりといひて通り玉ふおと  
 て今の修行おやは人間にてとあるまじむかしよいまよいたるまでけんどん放逸の在處  
 ると弘法大師のきたり玉ふと言つたへり定めて大師さまありとおぼれたる聲をのり死、  
 てそきぞとわか一玉ふと奇代ふまきの僧のなとてみなくかんぞとあるとあり

○世お一休和尚と天下の活僧ありしとて諸宗ともををしあへて尊びけるおと何きの上人  
 長老とあがは給とすといふ事おしあると黒谷へは参りわのしお寺中の人々一休を見奉  
 りやけると今の世は活佛と人おとよ言るとこの禪師ありよき折おらなきばいとや當寺よ

侍る異導法然の書像お説をたのみやの念佛無間とてあざける日蓮宗に見せて禪宗の佛  
必宗たの之此方の祖師と尊み玉ふと高言にせりやかる死僧なまを定て説し玉ふべしと  
やけきバかのく此儀しかるべと相談してやがて一休を方丈へ請じや件の書像をどと  
出し賛をぬのみけるよ案のどく易き事ありとのたまふもる則硯と書像をば前より出しけき  
ばさらいとひらき一覽あり筆をとりたまひ先善導大師に賛していとく

- 未法出現名善導すきはまこれ 則是彌陀化身也
- 濁世末代導惡人いっさい 一切衆生易往生
- 法然上人はつぜん 上人

- 傳聞法然活如來つたへ聞く 安座蓮華上品臺
- 尼入道同愚痴輩あま 一枚起請最奇哉

と即時よりあらしけきとて社とておのく大死ふよるまび侍りて此兩佛お淨土宗とし  
てかく讚をいたさな家の事なきを手裏ありとて又日蓮宗があざけるべたよの、るうをし  
死事おとさなきとどの讚を日蓮宗に見せて大きき威言效ぞやける其頃へと日蓮宗と淨

土宗と中あしくて犬のいがむが如之牛のつれ合がとく眠をいらかしけきば日蓮宗か  
の讚を見て大死おはらを立一休をそねとみくみける其中一人やけるはいやく一休の  
は心とこのあらざりのお死直あるは事なりいざや日蓮大聖人の像をのせ賛とこひて見  
んあきほぞは褒美とあるべしとやけきを尤しめるべしといそぎふた死死て書をか、せ  
やがて和尙の庵おもち参りて讚をたのむとしやあきは元よのかるさ僧なきばやす死事  
どのたまひ彼の書をいら死は覺じけるに此像はさても少くかきうそ責なる衣袋させけ  
るとと笑ひたまへを人々やけるとさんいひのあせけつかぢお大きよか、せたく存いへど  
も實と先日淨土宗法然が讚をじまん仕ゆもる口をしぐいひてゐるそのも取敢ず先ちより  
けふか、せて参りいひうき讚してたべとやせを必得たいとて先の法然の讚を所々を直し  
て

- 傳聞日蓮活如來つたへ聞く 香座則是妙法臺
- 尼入道同愚痴輩あま 一遍題目珠勝哉
- 死事と其奥あきと 其奥

ぼぢすくぐ小坊主まめの粉ぬりぼらす

みぞあそばさきけるどのや其頃また永觀堂に住持黒谷に讚のよしをさよてよ死寺のから  
かつきいと浦山しく覺し免しかはどのるきは僧あるよ何がな此方おも讚ぬのみやさんと  
てまづ一山の人々を呼よせ談合せらるるを其中よ一人やけるは何ややはでもあるはじ  
先宗の祖師なきに當寺お傳る半金色の善導大師の畫像讀をたのまきよとせよ各々や  
やうげにく是と代々當寺の重物なきにこそ増したる物あるまゝさらは其方使僧も成  
り玉へとて彼の半金色の善導大師の畫像煇持せ一休へまあり一休お對面してやけれと黒  
谷の讚のよ承りあまりよら山しくいひて是まで參とていあひと此方の善導おを讚煇  
あそむしたへとやければそまよ安死は用とてかけ書をひらきは覽ありたちあがら一筆  
さらしくやか死玉ひ元の如くしたよめ使僧にわたさきけれをかたし茶なしとて譚んでい  
たよさいとぎ永觀寺へ歸へりしかぐのよしをすければ扱もるきは僧か本望とげた  
りまづ一山をとびとせ讚拜見せをよとてやがて人を廻し茶れば各々をろふびのり集り  
さてかの畫像と方丈よかけ拜見しけれをいかにと大文字よ歌一首あり其うぬぬ

くろのらんあろものすその黄よなるは

善導大師はこをたるらむ

とゆとばしけれをよ寺人どつとわらひ興をさます人もあり感あれたる人をあとしが今  
のとまで傳へて天下よ一幅の名物となりけるとかや

邪淫戒といふ事をほとなしやさんさても月日のたつ手間のいらぬ事入日かとおせへ  
を明てひるよある又八ツ七ツの鐘は諸行無常といひさぬるを余所に聞事かなとて此無  
常といふ事をへひとつ心にわすれねば余も後生お遠き事となけよとせよ世々あま  
と千年万年もあるべしと思ふよりわらもる罪業煇つくる事なりよう氣を付て見たはへ  
目や耳にふるよ事一ツとしてあがらる止まる物でなく人の死別を行とたのふまで語と  
あぐさむ男女今日はやあしくなり頓死ものといひあがら息ぬもるやうのとと世間  
に多き事なり花のちり木は葉の落ち露霜のさへ雲煙の行へ水のあがれのかへらす泡の  
えかなと淵とせふありあるひの山をくづれて海よなり川をくがらとまり長明が方丈記  
をみれば地震火事に幾度の幾千万の家居をめつしあるじの家をあさかはの露ふたと

へて書あるとく一物として常住する物よと云ふ物おとと無常なれを我命もたのま  
れずしかれはうつかりのいつも十三月も思ふてくらと内おの無常の刹鬼がせ災きた  
るとき俄にあとてさとききてと陸ない事なるのねて臨終の用心が第一玄や談義說法を明  
日の日のあると思ひおだんして夕をまたで死たると死と悔ても甲斐な死事とつねく  
合点したはふがよしある人のうたに

あそありとおもふまゝるおやだされて

けふをむよしく日をおくりけり

といふよおそろられよしれぬ人の命談儀をさくもけふが過ぎりなるとおもへと一事  
を聞も大切と思ふ道理あれば此心得がよして談義となしうちつ、いて大悲經の文の  
中の種の字お心を付てとあしました昨夕れと彼の人を殺し子をころせし事お付て殺生  
のむくひをやすましたが逆の事お殺生戒よといひに五戒のすがたをとあしやせとの  
け望もある今晚と邪淫戒の所大ていあらくやませう惣して戒律おついでと五戒八齋戒  
二百五十戒五百戒十重禁戒四十八さやう戒とて異類異形のいましめおと梵網經四部

律等よあまたある中に儒と五常をそつて國をおさめ佛法と五戒をもつて悪をやめさせ  
ん其お、ろむせとおおし物お侍る先此邪淫戒といふ文字とくおしまし姪をおかすをい  
せしめらる我妻にあらぬを妻よする事を邪淫かいとやするやと此戒を在家戒やをす  
あり出家にといらぬものかと思へとも出家おもさまくあり是とたいかのの身の身れ  
うへと思ひ玉ふがよいとつこの事妻といふと女け手前ら男を妻といふ男よりも我女を  
妻といふと男女通する詞かと鹽屋判官が妻れ方へある者文焼つかとしけるお女の方よ  
りは返事のうたお

さあさだおおもさがうへのさよころも

わがつまさらぬつまさかさねと

とよみこしたると何れをおぼへのあると此やうある不義れ事をとるもあふひかし今の  
代はであられぬ死をとるそのあまたあど何國も同じ色の不義京大坂おと殊お繪草紙お  
賣る、ものあまたあり現在お恥をさらすと淺ましさとあり扱未來の事と經文の邪淫れ  
罪衆生をして地獄が畜生よおちもし人れ中お生るれと二種は果報を得る一よと婦貞



良からず二に二は妻相争ておのが心にしたりとすと説玉ふとじめの婦貞良からず  
 とと今生おて人の女房をぬすみたるもの後生おたましく人間どうまれて女房をもとて  
 も其女ひたれ又余れ男にひて我心よししたかすとすとありそれもあるとらをたて、又間  
 男めをおさへてく、つてと心意けをむらをもやそやそなるを婦貞良からずといふ義な  
 りおれそな報ひやうれしおをあらとすとせは二に両は妻相あらとふとと或と本妻れ手か  
 けをねたみ妻と本妻をそねみ針をうちたりとて之がひきんとてそねみねたみたる大  
 きなる禍ひとあるまると小國お譏言の臣下おれを君かあらすはるふとと聖人のとを下々  
 お多きそれと夫婦いさかいなり大さなる聲をしてつらみおふやらおとやら敷がねをこ  
 なおのけて後とづかしたとをわそれと常とかくを事をわめさちらしあたりほとり外  
 聞を方便ものへりみずとがもあだ鍋をわるやら釜をおげやるやら道具家材たまつた事  
 かし何事かと思へをかけりんさく事おまりての騒動おきとよやとてものんふんをせ  
 まま又とこれる時宜でもあるまじとおもるをいつれ間おやらおと寝入してたつた一夜  
 のうちに中直と何の氣もないかやしてゐるせつらく人のあつらひ中直しれど死と角も

とおる死つ相して明朝とをよ引のへ小をさしゐるととてくおのしい事と人れ指さ  
 してて笑ふをしらぬといふ其人もおのが非わ見へぬものにて何國の夫婦いさかにも  
 とまよたる事是等のそのいひ口舌がわれを面々家職におあたるといふやと損のたつ内  
 證のつふれやらしれず然ともたびく有ゆるお終に家のやろぶるすいさうおいつれを  
 おもひあたりあるべき事とそれまでと遠い事先此邪淫戒といふ事と天下の法度おれ  
 と道を心とし義理をたてんと思ふほどの男と念もない是等の非道とせぬ事じや一心さ  
 へみださねばそのまよひれやむといふとなしをやさん

○正月元日より三日の元三といひて歳のとまめ月のはじめ日のとまめなれを一天四海の人  
 々ののしまれも思なるを愁あるを愁き死を責をいやし死をいとひよろこばざるをな々屠  
 蘇白散よとせぶろこなりとも鬚おつけは鏡すとるとて尻をちきりともつたてそれくお  
 いとおませるありさまと誠よ昨日おかたりたるおえあらねを空けけしきものどやかお  
 霞とたり大路けさは松立わたる家より長代代のためしとてしめ細ひきめぐらし昨日の夜  
 半過るまでと人の門打たうきて何事よかわらんことぐしく足を空にはおひたるをたい

一夜の茶ぬれを引かへ心をゆるくと又晦日の来るべは心もさく野邊に小松よ千代萬世をいとひと死にいつ死ぬべきものとなしに万の事残いをもとを朝の露も名利をむさぼり夕の陽も子孫を愛し蟻が茶うすをめぐるがとく同し事をぐるりくと五百七十年七まがりといひて世を秋風の心の露ちりはともなき人心を一休おのしく思しめ一誠よおろのなるのな朝がほの日蔭待はもてり久し花とながめか茶ろうの青天も羽をふるひて樂しむ間もなれ世中お糞お箱ぬる正月とばたし時の間の煙とありなんと打見るとといで物見せん人々よと墓原へ行て彌腹をひろひ來り竹の先おつらぬたて正月元日の早天よ浴中の家々の門の口へおのどくくお彼ささるうべをさま出しは用心くお歩行たまふ皆人いまのしくとて門をこめて居けるなり今お正月元日と門戸をさしけるなりといわりしかるお一休を見察らせて或人のいへるとは用心とえ尤しとくちとといひとひかざりてを終よとみお人かえれとくされども世の習よてかくいといへるお折お其むとつけなきしやれのうべをを家々へ出さるゝ事はほちがひあらすやとや茶れをされとよ我もいはひて此されかうべを各お見するなり目出たしといふといかゝ心得けるぞややのし天照太

神岩戸をひらけたまひしより事おこるといふを此されかうべより外お目出たき物はあしとしてとめる

みくげなき此されかうべおなのしま

目出たとのしくまれよりはなし

是見玉お人々目出たる穴のみれありしと焚でたしとあといふあるぞ皆人のくとはしるらめどさのふも過し心ならひおけふとくらあてあすか川の淵瀬つねならぬ世とは目に見ぬとし風之音おせおどろのぬ人々よ用心せよと思ふてたい人とは是よならぬを目出た事は何もあしどのたまへを諸人これを見てさても賢き聖とておがまぬ人いなりなり○一休のものとああり或どき五つうめり其五ツの子のうちひとつを親いぬよくとて乳をも自由のまさきうていがみえひふせけり下人とは此親犬をにくみうちけるがある夜和尚の夢よつげていふ我身と前生よてかしたといひし遊女お侍りしが五人の夫を持ていおしが四人ととあなきおある心さしよて淺からず思ひしが一人といつたり心多くして却て我をわづらえしくせし事たびく侍りまかば心よく、思ひながらうち過ぬ今此五ツの

手ごとの五人の夫あり四ツとむのしのなを深きが故に乳焔のまきめていとをししく思ふ  
こ一ツと我をおやめ夫なれを乳をさへのまさん事心おくれひひてのく當としなまどお  
まやかよ前生は事をありくとのたしと一休且那のうちへとなし玉ふとこ

○七條邊に有徳ある町人ありあると死佛事供養のため諸出家はすよ及之す食までもか  
のどく慈悲焔しけりあるとさ一休をす入まのく不審ども尋ね次手に問ていはく何れを  
さして善としいづれをさして惡とするや和尙こたへていひく善惡かざりあし只善惡をし  
らんとならを其く善惡をなすみおもとあるべしこれを行て尋ねよと答へたまへを亭主  
尤も感念する扱和尙たち玉ふ折ふし雨降ければ亭主暫く待て雨を止玉へとすや一休す  
まけると

ふらむれ降すばふらすふらすおも

ぬきて行へば袖あらとよ

と言捨て出玉ふ

○加茂河ちかき邊に五郎右衛門とすものあどかれがうちへいつの頃よりか犬一疋來しが打

とせざらすある日人を頼と二三里外へやり客るが又歸りむける此度とどらへうち殺しと  
つるおまた同じやきある犬來るときさらす夢見あしけをいひの心ととあくおせひ一休  
へ参りくだんの事を一々となし客るお和尙のいとくめく其犬よわらく當と玉ふなそ  
れと其方が前生あてその犬のものを焔負つひよのへさすして今人となりいぬとありてよ、  
に來れを全くわたく志事ならねむすつるおせころしたりとを業力の成されを其家をとあ  
る、といふ事あるまじ實々うしなひぬとこのれお米一二斗はどめてがひおきたまへ喰  
たらん時とかへるべし左なを何とあそとこのへるまじとと教へ玉ふさらむとて歸とて  
米をおたへ置けるよある夜は夢に汝われをなやまと事たびくなり打とせよるすともう  
せまおされども今はあの佛和尙おしへられ我をおくひ事まんぞくせりしかれを汝が  
もの喰尽す事やきく一斗をのりあり其間と我おつらくゆたる事おのれやいふと思へと  
夢さめぬ此者いづくおどろきさてと和尙のをしへお少そちがえざりけりと猶々おひを  
やとこしけるに彼がいひしとと一斗の米あくまりてのちとだんの犬のき客すやうあうせ  
よおりふしき成し事なり

扱知恵あまよふ女意といふ事のゆもろましに林茂先といふ人ありしが學文しやなれど  
 之前世の因果のいゝにして貧に乏らさきしが其隣の大なる分限者の文もうなる仁  
 の女房が男の不學なるを氣のどくがりの隣の林茂先が才覺に乏せてある夜ひそか  
 に忍びきたりて學文はゆきをほどくお音つれたるに誰ぞと思ひてさしのど若とどふ  
 してこふして執心でおさつてと袖にあまる涙をつゝみかねてのくさまよひきたり侍る  
 どふかく思ひ入たるやうすあてくさきけるをたれぞと見れをとなりの内義もどとり  
 器量も人よすぐれとお金をちの奥さまなれを我がやうに貧なるものがちから戀した  
 るとせ今どきの後家さへ承知すは若さまれとかたじ客なき事は意とおまぐ下地といや  
 ておの事夢のうつつか最早人づまりわたとお誰をいゝかるとせをなし明日と閻浮の  
 ちとせをなれこれとせ死お及をぬところなんと若ひ乗此やうな事があらばなんといや  
 どとせされまじまの十人が十人おが飛つところを此林茂先じつとあゝるをしづめ  
 しむらや物といとおんだがさすが學者といとる、はとわつて皿やとを目とむき出し  
 の女房をさつとあらみつけ去とては其方へ入てなし妻一人もちて居ながらかゝる仕か



たれ淺ましや天地がくつがへるや遠ならぬ事を某といたさぬそとやく歸られよとま  
どふたをたどたつるや女房はなみだをながきはほとに事をつれなくをかへし玉  
ふかせたて一夜ありとめとあげたてたちのかざりしを林茂先としり出て季下具冠をた  
いさず瓜田お履を直さずとよそいへまたなま袋のさきと事をして小がいかとつて  
引立のへしければ力およむすゝとくどたちかへりぬ此林茂先と其明る年つひお官位  
お興立り榮花よさかへける道をほもる人のこゝろといかふちがふてゐるでとないの今  
どこの物讀でも道を聞ても耳と口とおおやねて居ながら不義なる事よと結句せんとう  
なる男の律義なるよと劣して悪事をするがちなり是を世話おいへる論語よみのるんお  
しらすといふと此とならん皆さまがたも朝晩口での結搦言せられんがとこの世話しり  
れせとしらすといふ物ぞのし面々の身のすへと棚へ打わけお死て人れ贈えいお安ひを  
のでおさる又利口さふや拙僧をそこの同去事なと人れ身の中でのしまひものと上下二  
まいのえちびると舌をかとおそくても大事かい事心と身とよ先おあそせられよ此心  
か万事に通る肝要のとまるでござる或經よ人とあつて他の女をぬすむとのと鴨にうま

るゝと説玉ふと何たる因果有て鴨に成ぞかへ心鶏のきぢふのといふのえはいゝ  
 お雌鳥を一羽づゝかへて道をたゝし鳩といふ鳥と別て其やうなる事のきびしい物に  
 て都ふとない田舎で飼鳩といひていろゝ羽色の見事あるをわづめて家を作りなら  
 べ置よし雄鳥のゑをひるふ内ふも隣の鳥留主のうちよちよつとのぞくを見るを其ま  
 んどびわがりて其男鳥をくひはるすやどよせらがい又どが女房鳥もつゝま入りせち  
 がふといかさまどさの男鳥のゝぞをのらと合点の行成しかたといとぬ斗をきりゝ  
 少々にてを其ぶらひなる事をならぬお鴨といふ鳥は池やあぞ道ふいのひ事むら  
 り居るゝ是は誰が女鳥まどとたきが男鳥といふとをなく常住あがきをたをるやうゝ一  
 日お男鳥の十羽や二十羽といふのすをしらす男鳥もまた女鳥の五羽も十羽をもちてわ  
 ちらちちら相逢ふこと此身なるものは何が成とかもへとの問男したるその女房を  
 ぬすみたるもけがみさ此鳥るゝとしりたまへ此やうなもれに生たえは好色の  
 わるひ事を折角して思ふまゝお不義をなさきよ満足ではべらん誠おとすの楽を  
 お永劫のくるしみをほふる事とわづらひ思かなる事なり過たる事かへらす今より

思案去て見ぬまへ別よかゝる事をなく刹那の姪樂に現世後生遊ばせうしなむ苦しむと  
 いたましとと一分別して見やうあらむと、じやそれよ付去所お男女よの合わかかしさ  
 ぢんくじせられたはあしをいふて聞せませうの先未來の物がたのを一すいたさふ

○或人一休と問いとく人と死て躰なとあいのつれ共魂とといまるとすがさやうあてをわ  
 るまじたえたはしひが死あすあわら心躰となやとも矢のい其ま、居て物がたのなどもし  
 さふお事あてあるまぢか何れふしきある事にて我等が存るお佛は成たるそのとたれ  
 しみおほこいて爰れ事をを打わそれ來べき心と露もゆるまじ又地おくへ行と鬼どもをまか  
 しやくせられ隙少しをあるまぢ又かやうあてもなだもれやらん世中お安樂とて死したる  
 をれ、來てさまぐれ事をいひなをすと承る何れ是といのなる事にていや和尙のいえ  
 くされをわれを其儀としらすいへとも若死とき談義あをちと聞たるが誠からそかしら  
 ぬたはしむといふものが有て佛ども鬼ども成げよいそのくせものがゑんま王とやらんの  
 前よて公事奉行の手おとたりしやばにて作る罪をくろ鉄か赤がねかはしらねども帳とや  
 らんお付ておき鬼お見せてはづ是程の罪人ない急ぎ呵責せよといふに色々の鬼どもが受

どりてさまくのせはあわとるよしやをにて作るつみほどせむるといふそのなら  
毒薬へんじて薬となるといふ事あればそのみつみの多きもあながちみあげくべた事あり  
あらじと見ゆたりかくいひまど死は

作りおと罪がくもみほとあるあらは

るんまの帳につけをころさし

とあると死と鬼やいふものも鈍なものあり釋迦が一代の職經とみあ人間抜いためんがた  
めなりあらつらくの釋迦のやいろくのうそをつきおたたまるりそれとよへを一  
字もいとめとすひ玉へり又さふかとおそへをしめつさんの語よと一佛淨土とん茶んや  
うらい艸木國土悉皆成佛さう木も佛よなるともいひあちあちとひた物に身ぬ茶ばかりい  
ひぢらし人間と永代まよむの身もちかずしてありとおそへを又うたふも舞を法の聲柳の  
みどり花オくれなひあらおもしろのとるの茶しよ

しやかといふいたづらそのが世ふらで

多くの人をまよひするかな

○まざしきの天井お蛇をかたておるる其座敷にて酒を飲けるよ盃の中へ給のうつりしその  
とてそれよ煩ひけりある人たたてとつらむのやうをしかくの事ふてそれよりのや  
うあわづらひ玉ふてまをさけや問ふよいらにも其通となりと答へけを或人のすさる  
くと左やうの事あらを何とも気分わしくておさふても是のこころかよりてわづらひども  
成入しかりながらさやうの事と一休和尚へ行て子細をばたづねわらをしかるべしとやぞ  
らばとて参りしかくは事立てかろさやまやこらかある事ふてはや和尚のほくはし其預  
りあくとんま是まで参りていひとや茶れと一休問玉ひやがてしめいたまふ其語よりとく

はばろしを知即敵は、うべんをなとす一切のしよとふり皆是まばろしな

り何されば水中影像をまつなりとおもふや悪と早くあんちが自心をあき

らたよ

とて扇をどつてうらくはたど打玉ふまづ右のころろはまばろしとしりなを方便と有ま  
と一切をすくはまそわさの何事にとらすみさくらなり水のうちあうつろふかげをそと  
實のまやなりと心得やまむとまるとそれおろかある所さき早みづつらけ心を納て見るもま



は實か無かわらざるべし其心納るときとまでは病本服すべしとしめし玉るを此をわが  
て得通して誠およくくわんするよ天井み給れあるといふ事思ひ當りそれよりして心  
すきとありやがて本ふくしきり何事も善惡の源をたづぬるときと心の一ツと生ると見  
へたり扱こそ三界唯一心といぬや

○伏見深艸の里よ森本善兵衛といふそのあり其内よつかもる下女もどより邪見の女ふて朝  
夕の飯の残りをもひさしとて非人よも呉ずして皆堀へ捨しに其ことぐお皆蛇をありてと  
ひ歩行家内へ這入しかを家内のその人々おそれいか成とやらんとひしは死ける其折ふし  
一休其近所來り居玉ふよしをさしてやがて使をて請ふ奉りことこのよしをかたるお  
和尚さよめし扱々それと笑止する事な是に此身上の々づる瑞相ありそれは全を蛇  
よてはあるまじ皆飯の残りよを捨し勢ひあるべし其蛇をのまらせ釜へ入てたきて見るべ  
し必らず死しとあるべしとのたまふさらたてて教みまかせ皆あつめて鍋に入一休經呪を  
まの玉むたかせたまひしよ成程死れいなるめしとある此飯をわの女に残らずくひ尽さ  
せよ少を殘るならは身代わやうかるべしと仰らるゝさらたててのれ女おくとせけるお皆

喰つくす事ならずして又のくしてとつる此下女あるときかのれが在所へかへるよ道おて  
蛇おさ、れ死けり日をぬすいていくほどなくして天罰あたひうせいはおそろし死事なり  
さるやどよ一ツふおて喰殘したるあらを決しておろそかおすべからずとて和尚且那方  
にて折々の物がたりあるを今よりよしるは

さて男女いたづらの評判ありしをばはあしやさん此はる町を通りたきと四五人うち  
よつて何やらんせんてくし茶を聞かせ世中お不義をして浮名おがしたるもれし事を評  
判して一人の男がいふやうと世よ女はどいたづらなるものとあい一人の娘つとに定ま  
りて居ながら不義なる事をきたがるはおだんがあらぬ世界じや七人れ子おなすとも女  
お心おるとなどこととふいふた物といへを一人の女房をたらをたていやくそれとわるひ  
了簡でおさる男といふものやどあさとのさいたづらあるものない我手前よ女房一人  
もつて居ながら人の女房をぬきみたがるは正真れ生盗人じや其くせお男の心と川のせ  
の夜お七度のとるとはよふいふぬどのとらへとの男とせいでいやく男といふも  
のはおどけおといふて見るそのじやに合点とる女がいたづらおのといふ詞の下よりぬ

や／＼女の方から盗ぬすんでくだささいふ女房がいつくもおさるをふしてを男がわるい、  
 や女がいたづらもれどたがひひに大死おけんわおあひ其わたどがせやく／＼へ  
 いましたこそと婿むこのわかぬせんぎにては侍らぬかなんば男が口説くわいたども女が合あ点てんせ  
 ねむならぬ事おいたとへどのやうなよい男が火をくへていへをどてをひとせまひが下  
 地ちがいやでさいららほ意いはよしとつひらちもなひ事よなつていけるされをいひのける  
 男がひとりのわいのでせおし女をまたわしく世よれ中ちゆうよとまたあるはと律義りつぎある男に女の  
 方よりおちぢやひてくどきさの、るがわきをそれと一がいひのとあしがたしつまる所と  
 どちらへそのた付てきまを付らまぬ二人ともお悪あしといふがよい了りょう簡かんといふその之是程  
 おなたとさへ二人で婿むこを明あでのないぬはとく互たがひお心をひとつあしてしめし合あせねば  
 さらす千人万人の中でせせまひとおせふ事は我心わがこころひとつてたしなみやすま此こゝ界かいをよく  
 合あ点てんすきとどちがよいとるいのせんさくといらぬと思ひ玉へ然しかとせ人おそ、ののされ  
 ぬやうにこゝろとせつとれとまきなる事なりみだる、心のうと氣きあると、ち城しろさらそ  
 高たかいせひくいせ身みを持もてこまお取とちとてくをせふとる事と皆みな此こゝやうなよとさ非義ひぎなる

心こころとまおてる事なれば若わかく衆しゆうとよく合あ点てんめされて大事なりとおもひたまふ女の心もち  
 とらへは梅柳うめりゆうのやせりさ枝えだお春はるの雪ゆきつせる如ごとくよほくどはのめき心の内うちと石金いしがね方も  
 かたえとら玉たまひてのりそめにもあだなるふるまひをせぬやうお化粧けいざうそのまゝにを氣き張は  
 付つたがよいとさる上うへつ方かたの教訓きょうくんの文ぶんお遊あそびしたるの眞實まことなれどと今いまとさひ昔むかしさかさま  
 にして上うへはのたえ見みせ内心うちこころはよとく心得こころえるとひがとの第一だいいちいや女義にむすめよ善惡ぜんあくのこゝろや  
 さかせませう

○愛あいよばなしのわと某たれとかやいへる人の奥方おくなた相果あはれければ今いま端はなれどきさの遺言いごんにとれら此年このとし  
 まで佛ほとけとも法はふどもしらすしてかく成なつるなひまどに女おんなのつみふのさよし後の世のちの心こころ  
 もどなし承うけれいのせらさ野のの休やすみさまは今の世いまのよの達たつたどやらんいふなる間あひだ我等われらが引ひ導だう張ちやう  
 ば和尙わしやうさまへたのみ奉ほうりて得えさせと念ねん願がんにいむお死ししかを妻子しよしない／＼一休いっしゆの草庵そうあんへ  
 参まゐりて其由そのよしをのくとヤ上うへおまは其年そのとしまで佛ほとけとも法はふども知らずを大おほかたの事ことよてはうかみ  
 がたし去さみながら我等われらが一句いっくをてづけとをふべたない水葬すいさうおせん間あひだ鴨川かみがはをつれ行ゆて其ま  
 座ざを立ち打うちつれ川がははほとりにありまかを其死人そのしにんを出だせとて和尙わしやうかの死人しにんは首くびよ繩なはを

付けひつかたげて川岸に立てのたはばと

河ふぬをど受てぬ瀬れなみまをら。うま世の夢を見あらとしの。おどろか

ぬ身のはのさぞよ

とて川へさんぶとなげとてはや一のへと玉ひける妻や子とをとおどろたては氣もしやを  
いろなるかこの一句は江口をうたひ玉ふかりかゝる事にてえうかびがたしとてかの死骸  
を引あげ念頃おをさめてある寺の上人よぬん導たのみけきを其宵よりかの夫も子とをさ  
くおとあふ夢見けると一休のは引導にてうかとしをよしな死上人の引導めて引  
とどされて中有の旅まよふよ又一休さまをたのみて我をそくとせたはとすむ夫子をを  
取まろし手を引て三途の川を渡らんとまぶつくと夢まぼろしお見へけれを是とておどろ  
た一休和尚へ参りて其由をしかくとや上茶れを我よく引導せしよ又異人をたのみしゆ  
ゑかりとてふぬびのへり見給はねバ親子のものさまぐにあげさしかを扱も不便の事  
やとてうづし死がいを掘出させまた加茂川へかたげ行川岸お立て一首  
大水のささよながるゝとちがらを

身をとてゝあそらかぶせをのり

とてがはゆしがむを川へなげとてかへられ茶れを其夜親子の夢にありがたきは引導にて  
今こそうのとけるぞとて白雲おうちのりて西の空へ行ければみな人ゆいがたくぞ覺ゆ茶  
るとさひ

○一休和尚山姥のうたむを作と玉ひしとたひない山よ中よさ人おひし茶れを談合お登の玉  
ふは佛おれを衆生おの衆生おれば山姥をあといたしける此次といのよとせんとのため  
るを彼人をさすがの人よて定て柳は見とまとなされつらんと有けれを一休とてをよと推  
し玉ふそのかな柳と見とて花とくまかむの色々扱人間お遊ぶ事と仕らんとのためへをさ  
まそといふて興せられ賊よ同氣相とをやる心ざしいとはづのしく思はれけるさてとて次  
手なりぬい山の堂社を拜とめぐり玉ひしお山法師とを是を聞て一休とかくれお能書な  
り何ふてを書てとらわんとて手おく硯紙を持きたりてたのみまかて一休思まけると聖  
道のあて字とかや定て文盲ある法師とをならんと何が書て取らせんといのよとてみか  
たさ一句ちらくと一筆よ書ららして遣ふと茶れば一山は僧とをあつまどかゝる能書の

名僧此山へ来る事と後の世までも寶物と成へき語をのせ置へしとて其中れ老僧のいへると先より各かきてをらひける一字をよめず又語を余りにとじかくて此山の寶物も成がぬしいのふと大文字よて長く書てたべよみがたれたと有てを詮なしいかおをよみ安き事をたのみ奉るや一山やを望けをを一休れたまひ答ると紙筆といか中々古る大師のあそとしける七八尺の大筆あり紙の何やをなりとそつぎやべしとやされ茶れたさらば紙つがせ玉へは望の通長々と大文字を書よくよめるを仕べしいそぎ紙をつがせ玉へとありしかば何はせなりとを紙とほのぞみ次第とていたその長くつぐはせおはい山の金堂の前より坂本の人家まであがぐしくを紙をつぎ茶ればさらば筆をそ染んとて墨たつぶりどふくませべたと紙へのき付て一さんかけて不動坂まで一筋おひかきてよめるの法師たちやのたまへといや何とをよめずといふ又墨つきて不動坂より阪本まで一筋よとりの引ひきつよめるかくとわぬき玉へと一山の法師たち肝をつぶしいや何とをよめずといふと是といふとのあされのくだりよあるこれ字なりながくとのきてよめやとさは是ことれたまへを昔人興をさまし扱も聞及しよりおどけびと哉と一度よつと笑ひて興しける

とあり今は世までも其しれ字ひねい山の寶物とありて有けるとあり山法師たちも望し事されといややもいとをぬけ作意とみな感じけるとなり

前夜やおさました女の賢愚の心のをちやうとやえさるおあるおうまれたつきのうつをし女房衆がおりしお亭主の留主のうちに行し人わつて内々笑貞よき内義されはあるべき事と思ひてきとをたどくれくときけきを女房何とあき顔にてそれは添なきは執心其うち折枝みゆひせては談合やべ志といふお男うれしさのぎとなく此上は亭主をたらのすまでの事と前方よりむつましくとさら亭主をまつしければ無心もいとめよこあたより金銀お氣遣付て借おせしけるお男と其心いさとの夢おをしらす後日のぬめ手形書やべしといつと彼の男隔心なき跡にて合力とをわまりおあづとがましければたいやいやべしとて金の四五両もつかとしさて二三十日も日かすたお男のひまを心が茶てむとわかお内儀おちかつきせんぞやたる事は談合せんとやさきたると何と談じ合も今宵はどとき首尾をなしとしおだれのゝるを女房のたちをたいしされを談合とやとはそんしの通り私を男ををちたるうへと我身ながらを我まゝならずよなたの望のとふりを亭主へ

談合して見るべしと思ひ先日よりいふ出すとどがなくてとやかくと思ふうち遅なと  
 ぞやたり今少しまらぬまへ明日と亭主と談し合亭主のゆるしを受たらばは心ゆしたが  
 ひやべしといふに此男大に驚き談合のとは亭主との談し合かると何とぞ迷惑ありと  
 て念願おきとなのお不義なる事をいふかけしとさげしまんれも迷惑ありとお短氣ある  
 うまれなきを我等が命おかしらんせしるべからざるは此事を決して思ひといまどか  
 さねてや出とまふ必らずは亭主おはさたは無用なりとてまぐとわとてのるり其乃ち  
 とたましく行とて此女の手まへをなんとなくいつかしくありて後々と終に遠ざかりま  
 したかんと此女をかしは女房と見ゆました又人よよつてたましく不義をせまふと思  
 へを人の害おあるとぞ思とすたきりまるとるをゆと去年の冬であつた日ある念頃に出入  
 いたと者がひとり来て語りますると夕部なる所にて二三人となしよ参りばしたが元來  
 心易き方のゑ夫婦の衆と一緒おこたつへゆたと四方山の咄しのうちひとりけ男とさう  
 者よていらいしぬりおんのの内儀のふとをよのわたりへ手の足のさとりたさふおびさ  
 るが、の内儀其まよたつをうづら立といふ物よつと立て人の女房よ手をさすと覺

期してしやるかとの女とておぢがふ所こそ多たお男れあるそをよきとあおつしたる  
 じだらとぞやいたづらな女にこそそのやうお事したらされしおろうはんお木けうらへの  
 ぼりやるおと大聲上て勝手へといりましたが此手さした男たきと知らねと自身お覺あ  
 れを顔お血をあげ巨たつの櫛おひたいを付て夢おきとえいわくがるわたくしとそを  
 に聞何とていさつのしやうをなと汗をたらしくかさぬあるに亭主とてすが世間をひろ  
 とする人はどあつて物さておの女い少しの事をも仰山いふものでござる此やうおと  
 りよそつてあたるからと手をあしとさばるまひものであゆふさやうきなやつよてはさ  
 しのじやま嫌せしたましくおのく遊む玉ふに無亭主おひさどか何きとほのまひ  
 おさるはじとて今はとさしの跡ととふでござつたといとさしよやぎく色をなやし  
 へいしましたがよきと何と賢女といふものでござるのと問ましぬ此やうなる愚な女もあ  
 る世の中よきやと人よたすを付めいわくからせいで女のみち立ふとおへを何のさ  
 たきしお我胸のうちよてすむ事あるよいらよ問男をせぬといふ潔白を見せんとてたけ  
 くしとて是とあほりなる事之能々合点してとさた此やうなひんしやんとりねまとる

女が結句内しやうでいたつら事をしてゐるものじやとさる人のいとせしむるかゝららん  
 事ぞかしとの女と物事しつゝのみ口心の内ごとつをかどう持が道といふものでござる  
 ち、をきつとのみこんだるがよしと心得へし成寶輪の偽にいとく愛欲無厭鹹水を飲で  
 轉其喝を増が如しとあると此色欲ふける有さまの鹽ののらき咽れかばく物次仰山お  
 取こみてむたもの湯水ののま物のとくのんでせくわたる事なきと丁どそのやうなせ  
 の又たやへていとく犬の枯骨をかひおひとしと有と犬がひだる死あまりお死人原へ入  
 てしやきたる骨をくらふよのたきもれなきを己が口中残やふりて血の出るを知らず此  
 汗と骨より出ると斗覺て終よ舌を咽を己がでよくいやふりて死すといふお似たりつ  
 へたるときおはあど先覺るすくらふと愛欲さかんよかりてらんんんちらぬと何の事も  
 うちとすれて主あるものを盗み終にとなんちやゆらへられてと志をさらし世れ人お  
 うた名をうたひきて我身を我心でころすと此まよひの一つとしり玉ふべし戀れ源とさ  
 がしてみれば濟どにおるとれふたつあると次おははなしやさふ

○さて此目のさむるはとなしやさふさる田舎人とぞめて京都一見のためお登りけるよ或人



遠業を  
あつて  
ほよ  
そんり  
ちの  
つらある  
おれ若の  
うか

のいひける通りの方京都へ登らる、あらを文を一通あどづけやべえ所も名もしかどぞん  
せす定めて都と通りく、明らのみまれ小路くと猶しきやとよま承る何方おて尋ね  
いと心やすくしるゝとやい間此文成まゐらす口上おてそやたかすたしのみ覺ゆるれ  
どいけ玉へ則名とさにし秋北春南五百の浪の立かへるとたづね玉とれも口上わするゝ  
事もあらを此文を見せて尋ね玉へとて渡しける此男文盲なればいふより早く忘れさて都  
へ登り文をとり出し人お見せざるお讀もの有やとていひのどよりゝるものなかりける  
此男やうとてく死のどとある文をたのまきしものかあ是をといけずして歸りたら頼  
まきしのもあくふがひきまといととんをとつらしたるねんとまきバ掃明すとやせん  
くと案じわすらいしがある人ややう此文を千日千夜たづねらるゝとも合点とるもれあり  
がたかるべえ所詮まの文成もち是くの北西おひらそや野といふ處一休和尚とて名智者  
のまします此僧お尋ね見玉は、發明にましまとやとに定て教玉はひ早く参らとよ先都ひ  
ろしといへども是を合点し沙汰やものかつて覺ゆるすとかたると此男さらば其紫野の  
や、おしへ玉れといふおくとしを、おしへるやがたつね行此よしやけきバ和尚外



れ上がきをば覽して是之都の烏丸通りをよそよにて雨や千阿彌とたづね玉へとくとしく  
をしへ玉ふ此人さくくかたじ茶なしたづねまゐるへま、かし此義理成とてその事にと  
きしりし玉へとすけををされをばづさおしめ北とる南といふときのみなめめ之五百の  
涙の立のつとどいふ時と五百をふたつ合るふ千ありとておみとかくとれと雨や千おみ  
とあらとと讀くたらずとをしへ玉ふ

○又和尙は在世のど元下京松原通中はむ制札あり其札のこーらへやうと板を丸竹よとさ  
み其竹のよすゝ錢を一ばい入札の書やうは

一餅食たがるもれゝ事

一酒とひたがるそのゝ事

一茶のみたがるそのゝ事

右之通くむたくば買て食べし只世中は皆錢之已上

年號月日

かやうよ書付立ありしが一休折ふし通り見玉ひさてくはつらした制札のつとまは是の子

細めるへしと立よりうのいひ見玉ふよ世の常のせらまつとこのはり柱を竹みてましらへ  
たりし心ありげお見へたりとて供のものみ汝とこれ札を取てのへるへし我少し思ふし  
そいありやとくくど仰らる、男ややうと是と和尙さまとも覺へざる仰らる事さか  
りそめふも是は定めて公儀よりの制札ならんしゐるをむげお奪つて歸らば後のわざは  
ひいゝわらん我等に於てとほめんあれとやける和尙さま玉ひ尤も汝がいふと斷されど  
も去あがら子細をえらねを道理なり先此札をとさみたる竹の内お錢あるべし此札をさむ  
ひ取べしとの書付あり早くとりてかへるべし若たよりわらをせんまが身にはとがとかく  
るまじ此一休が心おまのせおくべくかつと我のたまをほん丸めし身おれば半錢を身よと  
付じみお汝が穴一せおとらせん早とれくどすゝたたまへはさやつも不しくや思ひ茶  
んさもあらし取べきとてとしりよつて押たをしまづのあめを引てみてあつとま和尙と神  
通にてまはすまよるまびいさみ打かたげそれ世の中おぬを手にあををつかまといのや  
うのとまふらんとてちどり足めてやらささ野へぞかへりける其後公儀お此札返一休す  
とひとり玉ふよしはのかお聞めし和尙へ使を立られけるゝ和尙かしままつてやがて目代

へ上り玉ふ奉行はいとくいのふ坊何やて往還立し札をすむひとられざるを一休さま  
 と制札のおもてを見いふ餅酒はしく買てくふべしよの中よと錢があるはをふとかくと  
 い扱を公儀えはさむよまーますのなとありがたぞんぶ殊に貧僧の身なきを取てかへ  
 きていどやさるゝ奉行聞しめし根本よきと君よいはじひのためよ國々みたてられ此書付  
 の面をよく合点いたしたるもの此札をうとうべしとのしたとなりよし歸へり玉へ  
 のしてまりて一休とやらさた野へぞのへり玉ふ奉行の目とてそくもの坊主ならでとか  
 やうのふだを引ぬくべきものと覺ゆすたご心を知りてうむむたく思ふとせとやのくと  
 思案しあるひは世間をこいのり即時にうばふべきものとまれあるべきに何のといかやと  
 さうらばひしとさたの坊主かな末れ世よ至るものよふけ坊主と二人ともあらぶと感  
 じ玉むけり

さては約束の戀の源とやほとなしいたしませうまごみ人の身を觀じて見まば地水火風  
 空假に合してうすさかたけうむふたりたるどころと男女のかとり有て美人をわれバ見  
 おとた人もへたてわれと彼一重の下り高きもいやしたと不淨穢らとしさうと血のく

よさを包たる斗書屏よ似たりつばよ色々のさいしさを去て書をかたて見事なりと思ふ  
 なのお鏡を入たるがととやささもれどのたどへあと先男女の八穴九穴とあるまづわた  
 まお目二ツこきとやふといふ物があがれ出としとるよしたかひて常よ汁が出耳にその  
 かけ出る長崎療治といふ唐人けすがたしたる男が何やらん陳ふんかんといひて誰な  
 りとせ耳をよとてせらふとさ見れを異るい異形のもの耳の中より足ささてせとさ  
 くさたささとれが出るこれも不淨き鼻からは清バナをたらし口よりのたれをさが  
 し或は口ねつありて人ふよりてとさしむのひにとなしをあらぬほとさいおやひがす  
 る物もあり其外戀といふ其みさもとをたづぬれば濟とよとるもの二ツありて頂上よと  
 めさうちまで一つとしてたれいあるものとあしそれをたい有がたかて戀しがまたの  
 しむ凡夫の心を佛と見通してとてをかはいれ衆生や賊よたのしみといふと此穢土をい  
 どひて極樂といふ國に生れてさむいとをひたるいとも思とてくちらと極樂をいやがる事  
 のむさんや何とぞしてすむとつてやりたいと思しむせともそのく我等をぬい此界  
 世のみ煩悩とわりと戀とまてらつまでこゝと遊びたえそれ能事かしたしや斗思ふ

より種々さばぐは罪をつくり又して迷ひにまよひをかさねてある、事がならぬ  
 此邪姪といふむとつとり事おありてのせんさくなりおもへをひさぬとのいひ少のまの  
 歎樂よ未來惡道にだざいして長死くるしをうくる事えやうをいもれずき扱邪姪とい  
 るを人のつまをおかそをかりかと思へをさふとあら女子をえらみし女をおかすを邪姪の  
 内乳祖母を犯とも邪姪あると非所といひて寺道場の内在家を持佛堂はわたりさて非時と  
 盆や彼岸親先祖の命日逮夜さてとどが女房の心ざしわいて精進する日持齋のときよかぬ  
 男何の大事のあらふとて、犯すも邪姪はた非犯とて若衆を犯すも邪姪のうちなりとある  
 經文ふ佛は説玉ひたとしかれを今とされ出家も男色をおかすとまた手がらのやうも人も  
 おもひ其身を殊勝なる心ざしてあると自はんしらるゝと少と合点のしそこないかとおも  
 へばそれよととり得があるといひ分をかし先此やうなとまで邪姪戒といましめ玉へを覺  
 わて居たるがよし何と息もすたもあらぬは制戒これはまたかると戒門につめてとそれ  
 く四重四提二不定僧殘滅靜、舍陀、單陀、五戒八齋とてどうもならぬつとめが侍る爰が  
 了簡の付どころ死、玉へ五戒の事とさて置死一戒と半戒もこのやうさ六のしき事なれと

の生死れきつあをとりいとをしきり弘誓の舟おとびのると大慈大悲の追手のかせお帆  
 張わけてせつあの間極樂お往生とる何とありがたい事よと侍らぬか扱又この法  
 華經おと惡人の提婆とては龍女と女人の手法をあらとし乃至一不成佛とて玉ひて  
 た一一遍の南無妙法蓮花經お即身即佛とてぐるとうたがひあしどの々惡業とさんせす  
 とも只しんぐのむとつで往生成佛と決定と思ひ取てとあへ奉るより外とあし能たね  
 といふ此念佛題目わるい種いふが此邪姪これおて種れ字の心がすまました又此咄  
 して次よいたさふ

○ある人牧翁和尚の筆など靈照女の繪を持けるが一休和尚の活機なる事をしたひ讀を  
 たのミヤベしとてやがて一休の脚卷へをありしかぐのよしたのみやけれをそれ社安死  
 事なれ望れ替して參らせむと筆おつとまたまひさらくと書そのそのお渡されいおれ  
 をありがたくないたいたさてそのるき僧のなとよるあび内へのゑり友だちをまよびよせ  
 日おろの繪に一休のは替なされ下されしとかたどけれをかのく拜見やさんとやがて床  
 おかけて拜見し茶ををかあまざりお

見ぢんもたせつ事とあらぬしかれの佛も得ありがたしよれ法師も咄してさかせますれ  
 せとらぬ内と心とをなまさて經文などみたまへ女犯と七百生三途もち非犯と五百生  
 惡道おしつやとあり女犯やいふは女をおのす事非犯といふと若衆をおのせかひに人の  
 數何万何億あらふやらこれ二つをおかぬとの有まい然といふもやと茶おなる  
 事とさてを死皆々惡道へおちませうまかく路るにさまつた事いかにとあると佛のいは  
 しめおかせられたとやふるからとちいで叶ぬ事さだめて惡道のせめと往生要集其外方  
 や談義譚談も聞玉ふべたがよいとせくるしいとせいやといとれぬかしやくにあひや  
 すと思ふとよへ落まいとて多年後生をねがひ寺參する事やがどかくと我々ほんぶの  
 力で地おくへふちまひとはいはれす佛ぼさつのありがたいといふが大堆の所あるぞ然も  
 あみだ如來末世濁惡惡願ある惡業ふかき身の一戒もたぬ惡人三世れ諸ぶつの手をうち  
 とらひ玉ふ凡人をすくい玉えんどの誓ぐんひなしからす不取正覺とちがひたまふ此  
 ちやあみだ佛とちへ奉れを身と不淨おあらふとを戒律をたせためか、る罪ふのさ惡人  
 を西方のあみだちらむこそ助玉ふ一心不亂も一念十念の念佛のくどくよとつて八十億劫

汝が親の雀作り

馬祖ふだまごさて

寶を海にすつる

阿麗居士の娘

と遊しけれと皆人よあ手をうちさてとたておたるは事のな麗居士と靈照女と唐土よての  
 賢人なりとみな人いひ傳ふしほごころ定て左様の心をもあそむさるべきかとおもひける  
 お格別なるは事かなまると天下の活祖師おてましますとみな人感ふたへたりおるとこ  
 ○又一休和尚と金峯山お捨玉を淵にならべてもあらんけしきおれを元より一鉢のもふけ  
 より兼てたははへなかりけるお大晦日の暮方おありけれを一僕ややう明日の元三なりな  
 にをか參らせん八ッ木と一合をさす青き銅は一錢もなまおあげき茶色を一休さ、玉ひて  
 それの歎く事おあらずいさ出よとの玉いて一棒ふりかたげ山家街道へ出玉へば折ふしか  
 とらけ賣通り茶ればれがとまじと追か茶たり彼者おどろき一荷のかとらけを捨てにげ  
 れを扱ふととめてめしつれし僕おをたせて是をしるなし初春をむかへ玉ふがとからず大名  
 とて玉い茶るとて和尚を引導に請ふければいや參るはじとれたはふ何とては出さきぞと  
 や茶れを錢をくれなを行んどのたまふ安きは事哉何ほどか用なとせせを一貫八文ほし

くついでへり安事や奉り茶をば其錢をもらひて彼おひとぎしたまひしところへ行てか  
らけ籠お錢袋之りつ付けて札をたてられ茶ると先月の大晦日の夜の土器の代一貫八文但  
一枚も付一せんツ、帳けし玉へ書つけて傍に一句

貧のぬすみは偷盜戒ふとあらまいかんとなれを

戀の歌を邪姪戒ふらざる證據有り慈鎮和尚と

て貴き聖のよめるあり

わが戀とはつをしぐれよめかねて

まぐづがとらよのせささくなり

と待をけむどのやしかれをどて邪姪戒をやぶりたる人々どといひがたし

我を貧のぬすみなれを偷盜戒をやぶりたるとどぬいふまなきなり

と書れけるどかやさて引導に出玉ひて曰

人と六道の錢ひて六文出す汝と引導とて一貫八文出すつしんがいちじう

それと汝と人に一貫貳文まされと十方の道むを行たい方へつ、と行成佛は

さあうたがひまし是はかんのならを有地獄のさたも錢がする

とれたまるをみか人さてもおどか人やとて感せぬ人とさかりける

○或僧一休の活機なる事と聞つたへい程ある道徳かあるとて大徳寺へ行てたづねけれを

折ふし一休と門前の酒屋が方へもた酒にたべよい前後をしらす臥し玉ふかあるへ小僧さ

たり只今唐僧かや見へし大和尚の一休と尋玉ふとやは歸りぬれ引おこま茶れを一

休は焚いまだ覺すうのくついでしておとせしに酒屋の亭主出ては醉眠は必よく侍りたるか

ついでに茶をさてもくき氣味やて一首よみて亭主よ取らせける

とく樂をいつくのやせよおとひしに

杉とてたる又六の門

ついでををしけれを亭主大あたるこびけるやありの、るついでころへ小僧またさありてとやは

歸りあれ先あやせし和尚の侍のねついでやせば答をさく又うらひのへしていびさかいてそり

がへりて寐玉ひしかを小僧のへやて何程およもあまのり玉とすやせをさしく

その寐入て何つを思ひよらぬついで引およし一間か茶たらを志いさしくしれ侍るべし彼

唐僧一休の臥たるや、あろへさし足して行杖元、どうや座し何や、そいとす引づりあこし目  
そいまだあま玉とぬに一越聲をよて日

西來意の祖師は話ふ俗語あどや

や問へばそれ息もつぎあえぬや一休も大音あて

汝か俗よ

やまたへてつれあかま玉へば彼大禪師も舌根をふるふて立れけるのさてと活祖師やま、  
しおと十倍せう汝か俗よやと即時あ出まじま答話あや感氣肝にめいぎて歸を玉ひける  
やあり

或や新右衛門誰の話を参じけるか一休しめしていとく

釋迦みろくと是他の奴しとらくいへ

他とこそ阿難や、ひ玉へを新右衛門歌をよみて答おけるは

たそやいふやこの下ああらとまて

たそこそ誰よたそたそたそあり

とよみけをを一休あれをかんにて此一とくあて千七百則をのるし玉ふとあり

○一休和尚老年あ及玉ふ頃親ををてる若きもれ心得べき事諸經中みされありとて示し  
玉ふよと人の子とて親あ一日を孝行の心わするへたやうあしといへども就中孝行の心  
あまどへたと

正月元日 五百日の孝行あ向ふ 同十五日 百日あむのふ

二月五日 三百日あ向ふ 同晦日 百日あ向ふ 三月三日 百日あ向ふ

三月十日 千日あ向ふ 四月十五日 五十日あ向ふ 五月五日 百日あ向ふ

五月晦日 九十日あ向ふ 六月七日 二百日あ向ふ 六月十八日 七十五日あ向ふ

七月十三日 五千日あ向ふ 八月十六日 五十日あ向ふ 九月九日 二千日あ向ふ

十月廿九日 千日あ向ふ 十一月七日 五十日あ向ふ 十二月晦日 四万六千日あ向

毎月朔日千日あ向ふ

右の日親よ孝行の心を猶更用もるそのととそくの日數あ向ふと釋尊は經説みとあれば  
うたがふべからず勤よのし〜孝行といふと左のみ六のしだ事あもあらずたい親たちあ

のうもなしかくもいたしたならん安心し玉ふか何とぞ安心せせやたきそのなりとどると  
なすと其朝暮心がけるのみこれ則ち孝行なりさて勤勞をとりたると前にやた種となりて  
其子もまた孝の心父に倍増するそのあり主人に忠義といふも名目こそこのとき心持とまれ  
其同じや常おしえし玉ふと有がたかりける事之けと

一休諸國物語卷之二畢

一休諸國物語圖繪卷之三

○愛ふ天台坊主は秀清とてなまよびに惡こびたる坊主あり多の人よよまなる道をす  
め凡佛法をこの心よわりの身の外に佛なしなどいふてあるひは宮社等の木を伐せ佛像を破  
却させ先祖をせとむらひす邪見放逸の坊主なり内々かれがすは承これと紫野一休和尚と  
や小法師と何程佛法たて煇きて悟道とつめいの僧なりと世間おさたするとも是もつてお  
かしきぞたとへて井の内の蛙が大海をいらぬお似たるべしわかれまの坊主おむをさばお  
そらく只一句を以てばいこみ都の住居させまじおつと途申おても逢たたもの哉とぐり  
く是をうのいひけるある日夕ぐさ一休のへり玉ふよ其頃ハ和尚眼病氣ふて一眼とわ  
まき折から彼坊主に大宮通一條の辻ふてとたと行わひたまふ秀清されをこそねがふとこ  
ろの幸ひありやおもひてするくと走とよりのいかに坊くといひのくる一休この方の  
事のと仰らるゝ其とき秀清のいとく汝一眼をてらし歩行する事をまわやほちある時と黒  
闇なりわやち事全く頼みがたし一休やのて汝が兩眼より我一がん星まんくとた二月

にかへがたし見物するるときんを明らかなる鏡のとしかやぢみ答へ玉へをこの坊主かさねて一言お及びす尻からけて足とやお行方しきす飛うせぬ

○或とき一休も問ていはく何と和尚さまつくぐ世のあり行わり様をとるお人間のさやう界をおんするお皆我々が知音といへどと幾人といふ数もいらす大かた先だち行るがつぬおたれわつて言傳おといふことを聞すいかやうの處へ何とやうみして居るといふ事もあしこれのみ心元なき事ともありやうくわちちとすの間おとひつたれおと近づた車の庭に災ぐるがとく我々が番に當り侍らむなげかとした事をとなりやうにあると死は死てと先きに成侍るぞ一休の曰

死てのちいかあるそのとなりぬらん

めし酒だんで茶とこなとけり

と仰らるるれを此人まゝ和尚のわる口をいを出し玉ふとどつとどらお答るが又とばなる人の言るるえさりとては坊このうたの心面白くはがまゝ行もわり行ざるを口としまさかまたいか成事やらす次手なからにかせ玉へ一休

といまるをとおをはいとあよといまれよ

行とおもついでくくともけ

といひすてし歸り玉ふ

さて前冊より邪姪れとがたよ付て未來現在にむくふ次第をほらく佛法はあしそのべましたがまだや事がのこつてあるを少しや聞せませうさて經文と前よよみましぬ大悲經第三の巻の中の種といふ字お付てや事ありとく何の身おまつてを種がなされをならぬ世界の人數いか程あるやらしらねども同じ目口鼻手足とありながら脊は高いもわいの低をありあるひとやせたを太つたもわり目もひのらめれたき目のしやの目の筆奉行といふ目とやぶからその事じやげよはざる此種と方等部の中は經お眼目腫脹ある者と他の婦女を邪看とるその中より生るとは説なされた此眼目腫脹ととがめども横よらみとを讀字あり他の婦女を邪看とるのとは他女房をよましまお見ると讀字あり是とせうしたる經の心と思へを世間よ人横横お見るやうな人の目がおさるのイヤア此内も其やうさ目の人があるのしらぬあつたのやうある目を生つて來る人は過去おも人



の女房れよいれがあれを人と語るうちよとひたを見ゆやうで尻目でよふみたるひ  
 およつて今生おと常住よこをり見て居るやうな目お生つともなり見度と真直よと  
 見ずしてなせよよこよは見るぞといへを人よ悪う思ひをまひと己とゆやまりて横おみ  
 るを他の婦女を邪看はる者の中より來るとはどかせらきたのくやたらばまた目のろく  
 に生きつゝるきたる衆のおまが目はもとや悪い目でないと思えきて油斷おさきたらば未  
 來でまた睨が目おなりませうをこるふ合点おさるゝまこれ目でをのり邪姪してまへと  
 や目がかくのとしどかく目やいふが大事じや目がいたづら者千里は行を一步よりはし  
 るといひて千里万里の道を行をたゝ一足よりははるををたつた一目見るといふより事  
 おこいて及むぬ戀の思ひのと罪を作して果とままくのせんさくがあるををかしの人  
 も

人の身に目をのりつらきものゆらぎ

みずばおひしどおとどらまし

てよみ置きしを聞けたまたしからををせ座頭となふ事を思とすふくらそのお思へを見

事心をうおがし悔の道深と結句目のおたらかある人々よりといのうあり且よまが摺のの  
 らき物れやどり味ひがするやら漆よのこの如くなをれと問なきをながち目をかりがと  
 るいものとも定ぬられぬ古人の詞お月花をさけみ目よて見る物かたと書おのきたと能す  
 ませはおもしろき詞おやまづ各われらは目でなければ物を見ゆやうに心得て居まするを  
 さのと目ではかりみる物かところ見ぬ物てさらおあし心でせ見よみる目さへわれを犬を  
 小判の見るけれども是の黄金といふものにて七寶のうちのためからともあれさへては何  
 をかを自由自在に買るゝそのしやのを見たる斗でいかおしてもその見らるゝ物れ正躰城  
 しらぬまを目で見たをのりが見たといふをれでとなない物とよ心を付て其道理をしらぬ  
 を其方を今殺すがといふ書た物を見てを其文字を覺ぬねばいゝ成事が書て有やらやと長  
 さは見とすといふ字おてわらむすいりやうおやつて見れををぬしからをそのみ目お  
 て見る物のりやいゝるが面白おさるゝならを目おてをる見ぬのとまをしを引て聞せませう  
 先は茶ひとつ

○洛陽に天文とかせ某といふそのめとあるとた一休の庵へ行けり和尚出合たはひその方は

久々見ゆさるが何方へ参らるるぞそれ私と此はるる人ふたのまれ南都よまのまわ  
 りては二三日以前お登りすし和尙の曰何ぞめづらしき事をなくしや博士こたへて曰され  
 を奈良めて笑づらし死事を承りしそれといふやうなる事よやわりの事ぞ博士とんおや阪  
 の邊りに齒をぬくものおと一ツを二文ツ、よて取の聞て去もの、虫くひ齒をそちて時な  
 らすいたぞと死おと身体さへたぬがたさとしてたへる者かれが事を聞および齒をぬた  
 る行一ツを二文づゝありとや此のいひけるこそそれがしと聞及ひ遠方より参りた一文  
 にまけてぬかれよといへばいやく少もそら直となしは用あらを何とさきりともは  
 越われぬいひてまけす色々といひを言つくしせんたなくかへるべきと思ひしのを切  
 角此事は参りてむおま之歸るべきおをわらずとやおもひおん是非々々まけおくば二ツを  
 三文よてぬのれよといふ先方のいふやう扱々其方はこまかく直切たまふ人かおまおてお  
 ましやうめて二ツを三文にてぬきとりけり此男かしよと直きりてぬたりとおもひ大  
 さお自慢がやして歸りてをわたりおそれ、ややう扱々たい今の男とせんお死事をしおる  
 もれかな其めくべき齒をのりをぬくのすしてぬくまじき齒はでもぬくと一文の錢をいし

みてぬのでせざる一のらざる齒越ぬくさりてては世おめづらしき笑そのおまきと小利大損  
 だもいふべたのて笑ひけるのやうの珍敷とをさして販りましたてえなしける和尙越か  
 しくおぼしめさるるくやわらひ誠にそれとおをしるさとなしおとされは世間の人利や  
 うお心ふかた死事おふきて利おんをおもふほどお因果の道理をしらす當來の苦果をも  
 死はへざるの如くおと、四方山となしおとて和尙西の方の遺戸をわけて出らる、博  
 士みてやがてのくぞやぬおける

いのはの西お朝日のうつるのな  
 一休やがて心得たりやて

天文はかせいのい見るらん

ぬいひ玉へを博士手をうちて大に笑ひいぬはをこてかへりける

○愛お一休和尙の庵ちのきはなり四十がらぬいふ小鳥を養ける人のあとしの物のあたり  
 にや生おる者なれを死する期あつて籠の内おひなしくなれり朝夕愛し手おれし可愛さに  
 殊外不便は覺ぬいぬかなしくて子おとかれたる思おをさせり凡非情無心のそれおも各佛

性しやうを具ぐせりましていとんや生なまゆるそのや死し出いれ山さん三途さんずの河がめいどの間まいかい有あらんしか  
るべき智者ちやうを頼たのみて引いん導だうわたさそやや思おひ一いつ死しう和尙わじやうの庵いんる参まりしのくの事こと頼たのま  
たさよよあげたけれを折おふし和尙わじやうの弟子てし出いわいいややすき事ことなりいいでく成じやう佛ぶつ得とくさせん  
てて佛前ぶつぜんお向むかはせ

そかし釋尊しやくそん八十三はちじゅうさんつたい河がおあゐてねとんよ入

今いまさんぢ四十しじゅうから紫野むらさきのお成佛じやうぶつをてて

てぬからかおこそさづけ、る彼者かのものたれをしをおそひやてて葬いりてのへとぬ是をこれ一休いつしゆもの  
おしよ聞きえめしたい今のぬんぬんさういよくでかしたる小僧せうそうのお風骨かふうこつおよるや思おえめし大だい  
よよろよびたまひ機嫌きげんくさ事ことさ、めあらすやのや

維い廣くわう文ぶん珠しゆのとおしいたさふ扱あ維い廣くわう經きやうの中なかお文ぶん珠しゆ大だい士しのいま居士こじは病やまひをてひよほこしお  
されて何なんか居士こじは宿やどおかほ見みまひれたため不ふ來らいのさうをもつてたたりやたて仰おほれたまは  
あ、ろと不ふ來らいの相あひやとさたらさるすたを現げんきて來きるやいふ詞ことばじや何なんや來きておあて來き  
らめらめらたをもつてきたと何なんとやらや六むかしき公こう事じでとことならぬのとれとた維い廣くわうと

方はう一丈いちじやうの庵いん室しつの中なかおおはしました今いまとた寺てらの長老ちやうらう和尙わじやうはさるのまろを方丈はうじやうといふと  
此こゝまろろろさやしのるよ維い廣くわうの詞ことばをさのれてまれとく文ぶん珠しゆはさつのようこそは出いさて  
れたれと維い廣くわうをいまで我わが不ふ見けんの相あひをもつて見るみるやまたへられたこの心こゝろと不ふ見けんの相あひと  
いそなたさまの不ふ來らいのとのたでほあしあてれたなまば我わがもまた見みざるすがたをとつて  
見みまするといふ心こゝろさや何なんとしつた同どう士しは出い合あとおをしるか問もん答たうでおおらぬかのみ  
目めにてみるのかとさのみ足あしおて行やくのかと書かたさのされどちちみみふすふさま  
心こゝろ鴨かひの長明ちやうめいの海路かいじゆをへたつる戀こゝろといふ題だいお  
おそひあままらうちぬる宵よのまぼろしを  
あみぢを分わてて行やくかよひけり  
これをおじとよみてみれば寐ね入いたるうちおて思おふ人ひとの方かたへ心こゝろがかよふたなれば此こゝろ行やくやう  
でと足あしといいらぬしかれをさのみ足あしおて行やくをれかえと書かたなとすの實まことじやまままつ一いつま  
の法はう心しん上じやう人にんのうたとて

足あしきくて雲くものとしるとあやしたあ

なま寝ふまへてのそみたつらぎ

とぐみ玉ふくし沙石集の中しやせきしゆ無住法師むぢうほふしののきたまひてよき楞嚴經りやうごんぎやうにこゝろよかなへりりとわりいかさま雲くもけとしりのすみのたつと合あ点てんのまゐらぬ春たつといふをかりよや見よしれ山やまものそみてとそをばきたかよふにごんでを同じ事ことや歌うたふ

足あしなくて舟ふねのはしるをゆやしきふ

なよとふまへて涙なみだとたつらん

實じつにを楞嚴經りやうごんぎやうの中ちゆうお釋迦しやくぢや如來にょらいと阿難あなん尊者そんじやとの問答もんたうに眼見げんけん心見しんけん不見ふけんの見けんなといふ事ことののるるどと殊勝しゆしやうふ有ありたふおとふ事ことじや此こゝやうのお理りふ似にたることををやうならはらばある者ものの聯れん句くよ舟ふねふ乗のりて山やまの巔たかねに上のぼるといふ句くをいたした世間せけんふ無相むさうを聞きへぬ事ことを山やまよ舟ふねを乗のりやうのお事ことじやといひままとる是こゝを和わを付つけぐみみしたいかかさを付つけみみとい難句なんくなるを是こゝよよとるとるのののつつ茶ちやまましたと

田子たごの浦うらなみ間まに富士ふじのかげ見みへて

きんとよく付つたでととさらぬの舟ふねよ乗のりて田子たごけうらよ魚うまお釣つりあのら下したを見みれと富士



の山のさげのありくどすつりてその上舟をうかべたどたふと舟おのつて山のいた  
いたよ上る心のまほしよのな池お望めば天脚下といふ句をよの心と同一事とかく物お  
と感となして見たり聞たりせいでと見たうちでと聞た内でもあひ月花を見るよも月と  
いつもまるき物とをのり壁へて花といつを咲てゐるとおそふは本の目ををかり見たと  
いふそのと月もかけ花とをさるるといふことを合点するを心とをよ見るといふそのでおさる  
此心をもつて邪淫をいましめたがよいそれとあせふかやよきりやうのとい女を見るお  
をたいうつくしい執心やを氣をすつとと目ではのり見るといふそのじや心をそめて見  
るといふその女いかう美目よふておれこの心の何をやらとさめくおれとやゆの方  
は主のほるよとつてさらぬとのこれとよまい主ある者かあゝるをかくるゝ生盗人とい  
ふものおれをその暗據おと罪におあまるとどどつと分別をしてひとささる事をやせ  
るこの心とをすつて見るといふをいじやさてこの心を納めてからと見たとて科おならず入  
りせせずともれ事に此おゝるがあるさらと見ぬのよいとつ見てもとても持のめめめ  
と男の胴骨をすゑて持がたしおとなりさて物と仕どおあひもあし侍と殊さら此つよと

根性強さげねと武邊之高名ならず先いやらしいと見聞からあまぬる之誠乃用に立さふ  
もあふ思くる、を鬼に角おと陸ない事と是ふのきのすあやうらうらう誕ながして見ぬ  
がよいさう女房の山神とやはあしをめまましおいたさふさりながら蜷川といふ男の才  
智發明と義をもちいと入まど

○蜷川新右衛門親當その身いとした才智發明の道士あるが和尙のせとへ立入禪法よ参ぶら  
ざる誠お佛心の妙具をつたる正法眼藏をさとい英雄の士といひつへし和尙を心通相の  
まひてもしくおぼしめするゝととりささば定業期たりて波滅の室おいらんとと  
胎下のせかしてり是を待と年久く思ひまうる道なりとて快氣の望さらよき既に一  
門はせあつまりおのく今とれのきとに名残をおしみしたひ歎くとよその見る目をあ  
れよてしらぬ袖さへぬらしるるのことはりとぞ見へにるるかゝる愁歎の折ふし青々たる  
西の空ぐり紫雲たなびき空中におやひ音楽さよへ麝香薫々とあふと妙なるかな三尊廿五  
ばつ赫々たる聖衆曳引つれ間ぢのく來迎し玉ふはふしぎなりとせ中々有がたのりける  
瑞相なり實うたがひをさ々新右衛門と西方十万億土極樂世界に往生せしめて九品上剎の

臺よいたらむとはたなおろを見るがとしとをのく感ふたへさるはなかり茶とされを  
落日にちのさ老士まだ物なれぬ若輩のやあらへ天をあをさ地よ伏しおもふ死なんどぞと  
るひける道理の至極とぞ聞へし其中に嫡子と新右衛門がひさの元よよととひ泪と袖を包  
みながらいのにわれぬ覺いへ頼母し之思しめされて往生安全にとげ玉へと指をさしてお  
しゆる其と死親當ねぶさる眼を活と見ひらさ我子をたたとみらみてそれ弓馬の家に生  
まけるものたとへば安養淨刹にいたりて九品蓮臺よ座ととて弓箭をわするへさふあらず  
書院の床お立たる重藤のゆりおめお矢をとへてとささたるべしといふ聞人驚のさるとお  
かりけいあいかにと見る所よ親當が弓勢何人といととまらねととさしもつよかるらむ  
と思したかやがて引くはへ引まほり暫しかためて兵ととなつ其矢あやまたす三昧の中尊  
ひかまを放ちて立たまふ阿彌陀のむな板をああぬこなへ射とうしておれば空よあま  
ねさ紫雲れくそほひも諸の聖衆とおぼし死そのもたちまも消て陸もあしいかななる事とと  
了簡すれを所お久しく經るむさあけ化のうを經たるおぞ有ける誠に希有の次第なり終よ  
一首の辞世を作り殘されける

生ぬるそのあつたに死ぬれを

けふのゆふべとわかれ風ぞよく

どのやうもつらね臨終をどげ玉ふ奇なるかき空寂の玄妙を會得！邪廣の障碍をこらひ其  
身は死門へ入ながら活人のぬふりをさまさきけると世の人の珍事とする所なりその後一  
休不導師とたのみ奉り引導をこひけれと一休をよの新右衛門よと一のとりにかはりて引  
導とへまどたくみとましておはしするよとや新右衛門が亡骸を興おれせて來りけきを  
一休たち出たまひてかの新右衛門が乘たる籠をたふたたまへと死たる者高らなる聲を  
出して一首の歌をよ一休よよとかけくるころふしきなき新右衛門も只人ふとあらじと今  
の世まで人のいひつたへ侍るありその歌よ

ひとと來てひとの歸るを我きるを

道をしへんやいふぞをかしま

とたからかよとあへければその詞のおとらざるに返歌をし玉ふこそ有がたけれ

ひたりとておひりかへるを迷ひと

來ぬらすさらぬ道をかしへん

どのたはへと新右衛門も實をどやおもひ茶んそのよと音をせず成み茶の世人あきをつ  
ぬへ聞て一休と誠は人間あらす佛菩薩のかりああらはれひとり來てひとと歸るを道にい  
へと來たらすさらぬと即答なし玉ふと所謂老子に死てをほるびざるをの命ながしとい  
へるもかゝるたはしあるべし

○又新右衛門が最愛の妻いのみ茶死と死より萬ふ心みちか々武々しかりければのちま死者  
にも慈悲のめぐみあそ召つかふ童ふを哀憐のなま茶薄かり茶りされを人と似友ととる  
ならぶあるお悟道の居士あきをそひて尊さをしへをくらざりける事いかさま報のむらあ  
るべしと皆人ごとよさみしける新右衛門わけきを不便におもひてもとより道者れ事なき  
をたましひをくだた柔和のをしへをすしめけるしかれども露をのりもしたがふ氣し死見  
へざりけりあるとき余りいたく制しけれと女房顔をのめりて聞へ茶るやう

あさいどのながとまかきつづのまや

うむのふたつ媛いつかえあきん



どたゝかやうにぐみておとせせず親當おどろき日頃のふるまひ相違して歌の心わまり  
 殊勝ありけれをばづのしとおせひわが教るあ及むすとてたもみ銘きて感さけるふじぎあ  
 るのち今までと放逸邪見も身をまかせ誠おくらさ人ありと思ひしがさてと我より先よさ  
 どりける物をも思ひ舌をまた茶する其後へ夫婦のささけあさからすひくくの契とふかひ  
 けり上しも水魚のこゝろ同じむつびけるおつらさ者のいひなしめてやありけや密に異夫  
 をかさねて二よゝろあるよしまことしやかお新右衛門に告茶る新右衛門もどてといつと  
 りを信するそのよもあらざりけきとを實に思ひわたる事ありとて物お忍びぬをのこなり  
 い茶をこ暫の延引をなく離別してこそ里へおどりける女房ををりふし懐妊の心わきて腦  
 と茶を恨みの心わさからすつるきををみはのをしひらんともたへるさしみけれを  
 を力なく出まける無實は程よとあこれなる然きとも跡方をなだいつとりかれを誠つゝに  
 わらひきて譏言のしとささしりおけるより新右衛門後悔して又よび迎んとて我あやま  
 なるよしぬむつかとし茶れば女房返事に

秋のせれ人けこゝろよ立さらば

見のらぬてさよらぬとよとさる

どかやうふよみおませて二度かへらざりける夫より女房のなまけたぐひあぐいさまよ  
 ふるまむと返くまざりけりと寝ぬそのさかりしとなん或人かたの侍といみじまおもしろ  
 く覺えけれへのご耳の底おとまり忘れもやらす有けるを飯初みあらとし侍るをれをの  
 の歌よいづれもかげまたたぬとしとまり

扱女房を山の神とやせをばさしつゝのぬをささるふのをしらぬとも山の神といふものよ  
 目を見合すれをそのは、死ぬると相人れつたへて奥山ふかへて木塔樵に山の神らし  
 めをれどもあたりへ来て態と見らる、やうよとまん前へちらくすれをを見るも死ぬ  
 よよつて随分見ぬやうよするこそし同志山人でもまづどのやうあ、りな物あらんとお  
 をかへちよつとでその横目をして少まばかりでをみると死るとが一度じやこれをわ  
 せまさせらる、さ世界れうつくしい人の内儀たちを常住山の神とやと思ふて見ると死  
 らうとせまひけれとさわひれ種じやと思ふてちつとを見ぬがよい鬼かを見るも死ぬ  
 るとさへおせへて手がつゝのぬ若い衆合点させらきたかそれもあるまことに人の女房を今と

さのりやう飼ふ山の神いひますといひます此やうあとからいふかしりませんたゞ悟  
もたがまついふよつて山の神れとこといふ事かそれといづきもがよくほぞんじ  
であらふ身かをせらがやう法師のーらめ事く迷の衆生いの愛があさましうほざるを何  
でせかでも見たがるひとつめて役立ぬ事をたその見たがるなんぼ心に合あ点して  
居あからと見たりと何の大事かどあた言おも弁口をたゞきて蓮の泥どろより出でて泥どろおそま  
らめおやくまゝろが清淨しやうじやうあれを一心が極たてからとて見事おいふけれど一いさや  
うにきれいふいふやせれ人の泥どろみそめたを一心の極たらぬをも視て死しましぬあよつてま  
づと眼めて見るみ煩腦はんのうにまとるものでおさるさふ程今いまの山の神かみをわすれぬ様やうにして  
視たみとをい犬いぬが小判こばんを視たやうみ心得こころえておささしたが今いまど死しの若わかい衆しゆや氣きたいのいてい  
親父おやぢたち笑止しやうぢと後生ごしやうでみな數白眼びやくがんのやうな目めよならせられうと思おもふてまづのひみ  
存ぞんずるが後にの世界せかいよま生きてくる程ほどれ人が横よこにらみやうておさらふと思おもふておかし  
きおさるそれおつま邪淫じやくんのひくいをあしをやてさかせませうは世話せわ方は茶ちや一いツく々たさ  
れ



はなはな  
まはら  
まはら  
まはら  
まはら  
まはら  
まはら  
まはら  
まはら  
まはら

○爰こゝに雲うゑ筋しん大原おほはらと申まをす所ところよもるとや藤とう太夫たいふと申まをすのあり久ひさしく京都きやうとに住すまひけるが元もと來きた出いで雲うゑ入いれ生なま國くになれと又また本國ほんくにに歸かへりて住すまひけるが京きやうよと國くにへ下くだりたまひ妻つまをのたらひて下くだりける此こゝ女め京きやうふてねんぶろしける男おとこのたより度々たびたびたるとをうかい互たがひに文ぶんのかよひあり茶ちやり此こゝよよさる者ものひそかに知しらせを男おとこあるときあまたの文ぶんとを有あるをとりかくしけれを我われとひとつを讀よみ無な筆ひつをたれか是こゝを見せばやとおそふ頼たのむべき人もあ之これ打過うたがしが折をりし一ひと休やすみの藤とう太夫たいふが近所きんじよにましますよやがて和尙わじやうを請まをふてよ次手ついでなりとねもひて件くだんの文ぶんとを取出とり出いでた坊ぼうさ内々うちうちながらほぞんじの通とほり其その目めを持もつながらの明あきめくらひおとしけむ此こゝふみ少し子細こまかあるとにていもあ一々ひとひとよみて給たまはれと申まをすける一休いっけ安やすきとありとて此文このぶんとをとみかへて只尋常ただつねにふとによとなし玉たまふ時ときは此男このおとこさてえ苦くるしうなだ文ぶんとを余あ人ひとに讀よみたらんふと疑うたがひをあるべきが殊に和尙わじやうのくまたまふ上うへとてらにいつとり玉たまふと思おもはせて人ひとに云いふは昔むかしいつとなり茶ちやりと不審ふしんをとらしけり此女こゝ和尙わじやうの惠めぐみあまりのうれしさよむそか且禮まじふみ燧たいつのとと次手ついでふしなれなるさそぢにのけし丸木まるきべし

ふみ見しときいあやふりけり

どうれしよのまゝのたてつゝとしける一休返事お

見しとたいいのある事と一ふ太夫

よみをいきてとよろもるりや

まきよりのれ女ふつく身を慎むけるどあり

○都に口癖の妙薬を覺へて秘藏しける者ありなり一休功能残さよし召いかおもして知らばやと思召されやがてたづね逢玉ひてしかぐの薬を知らせ玉ふとしを承り及さふらう天晴この愚僧おは相傳被下たくとるぐ是まで尋ねまゐとひとやされける彼人うけたまこと中々の事あはまの妙薬とやと我等代々つたへ來り一子相傳の秘方あれば他ももらす事思ひもよらず去ながら貴僧も、しきは僧と見奉れを否かたをよそいへふのきは執心おてとたらせ玉とい他に口傳あるまじは起請をか、せたまへ然らばゆるして教へ侍らんとぞいひける和尚聞しめさむわが身の大事一代一紙は誓文あれども愚僧もおまへてたびいとい心得待るとて墨ぐろにまそ書れけるやがてならひ得て庵おかゝりいわざとらひて宣

ふやう人の病に薬とあるへき物故秘藏して獨覺へたらやと慈悲のうと心之是等の事を秘藏とせばおそろくと秘してもひしつたは一大事の因縁をいひせむ去ながら佛神の眞辭とらおそろしさらた札を立て世お知らせんとて

一口癖のくまりの事をし口癖をやむそのあらむならす密柑の實を黒くやたてれむべし治る事すみやかかしてふたよび發るよとあしはれ奇代の大妙薬なり

と書付たてられざるさて教へる男これを開以外又腹を立せはねをいからしていとぎ紫野へはまりのもき一休をたづね出しいかおは僧破戒無惑の賣主坊主かな何とて大事の秘薬を習ひ得て他よ口傳せましとて起請を書ながらあまつさへ高札立立て萬人は目よさらす事いかなる曲事ぞやと打たしても忍びのたしお眞黒よなつて怒りければともしもの一休なれとせお免死殺かど見へお答るされども驚けしきせなくとらさぬ顔みせてなしあらよぐまの有さまや何事を斯このたまふらん起請をのきしも誠なとしのるみ札を立しをいつとりあらず去ながら口傳せまじと書ぬれば口傳一人もせざるあり札をたてじと書ざれと立たるがゆやまひか起請に少とせとせよのまきは佛神のをちとらしからず

とてそらうそを言てまーくける彼者めくまで罵しり怒氣にかかされ方寸おせまり茶る  
が一言のぬ茶句お返答をうばはき歸りける

○一休和尚といとくさ沙門あまけり我が繪像遊びづら書てうつし心づから一入とて出来  
たるよとうれしくてもあられ一休お見せばやとおを急ぎ紫野おもて行ける和尚よの繪  
を一目見玉ひあみくるしやとて目を閉大死お嘲り玉へといのされば所存遊をかへりみ  
すかくわらひ玉ふぞや打腹だちれまのける其時繪像を取て庭上へ投付士ざうりをとさ  
ながら散々にふみおじり一筆のうぞのくまをある

世をそとくかたちをそとすびんとつをきめて煩悩を死らすのいお繪像を  
かたておのが悪業をのづけ置繪像大死なる災いわくなぞ

と黒々と贊をのきてわたされける沙門つくぐと感じやがて懐中して歸りける  
○五月雨のふとついととも間もみぬす打しめり四方のけし死うるはひ梢もみるどかため徒  
然とびしく思しけん柴の戸をさし込みたん然おいて在しはす處へ六十あまりの男とこへ  
て破笠をかやのいかおもおもひ余りうれむお沈みたる有さまおてしづのお物やさむとう

のいひ茶る一休たそやまたたへと宣じて柴のあみ戸をむらた玉ふ彼男いふやう我と近き  
とたりに侍る者あるが明日とさる心ざしの日に相あたりいへとも智識をたのみ奉つるか  
たなくいへば恐れながら和尚を請じたてまつりおろそか成齋をまゐらせ上たくいへて是ま  
で頼み来りいことおもひ入てすける一休聞しめしもとより出家のいとなみおいと易きと  
まり何處のはとと問玉へを男またへてさんいわが家居とすとおぶり川通とこぬけびし  
やう町とすておくきなき所立て侍るを尋てわたらせたまとい門にしるしを置いべし必  
らすまを奉りいとしていとまやて歸りける一休おとよつとくぐと紫と玉ひ渠はふしぎな  
る教へやうをいひつる物のあたらば了簡して見ばやて職て義理をぞひらかれ茶る抑お  
こり川やと今出川あるべし底ぬ茶柄やいひしとゑがわ町やいふなるべしいでくたづ  
ね行て見んやて思ふ當とととい玉へを紫おたがとすゑが町といふ處お行わたらせ玉ひ  
ける印やいひしは何なるらんと見玉へは表お杓子をぞつりたりけりまればをるしなりと  
てやがて内に入て見玉へはたれふの男おひ玉ふ目出たかりける事おもめならず我等の  
おろかなるたふれをや参らせいへと一々にとさわかち道場もまよひせ玉とすは入いふ

といつわりそなき天眼通てんげんつうおておのしほとておやへお釋迦しやくのおとくお思ひ寄る男おとことくせ  
 もれにてひつかし之難問なんもんをかけんと思ひ寄るが法事ほふじを過ぬれを膳ぜんを出しすむたり寄る其  
 とき和尙膳わじやうぜんにぞかひ殊ことにて亡者まうじや法界ほふかいのためあかうをなして三界さんがい手向たむかへんの蓋ふたをあて見玉けんぎよへ  
 を飯いひあひわらで小ぬかこふしきお思おぼえされ汁じゆのふたを取見玉てんぎよへを是こゝを同じく小ぬかなを  
 残りのこりれ物をみなくぬのあり寄れをよ手てを打うつてあらいぬとしやさて亡者まうじやの三七日さんじちにちに  
 あたりひよとてかぶりもふらすれあまひ寄る男おとこといよくまをけし忍おぼえをまして敬うやまむ  
 けるそのとき男おとこいふやうと仰おぼのとくそれがして父ちちをうきなひいて三七日さんじちにちおなを待まちる佛果ぶつぐわ  
 おやいたりけんもし地獄ぢごくよやちさらむ後生ごせうの事おぼつかなくかきし之を問ひけれ  
 ば一休いっけ仰おぼられける何事なにごとかあるべきたい存生ぞんせうのふるまひを他人たにんとくしとほむるや悪あくさ  
 とそしるやいかいふぞとひそかお宣のたまひ寄れを平生へいぜいと常つねおてこしまなるといとす  
 ひとへに正直しんかうじきおてまつたき性しやうなれを他人たにんは佛ぶつよてあつるとほむる者多おほくいとすければ  
 一休いっけ聞きこし召めししかきた氣きづかひなる事なし是こゝをみだおをわらす觀音くわんおんにもわらす則すなはち正直佛しんかうじきぶつ  
 あり佛果ぶつぐわを得ると疑うたがひ寄れと事こともなげお仰おぼらせ寄る男おとこつくぐと承うけりてと心安こゝろやすくいと又

それがしが兄あにおていもの三年さんねん已い前ぜんおひましくありたつしが常つねは佛道ぶつだうををしらす徒いたおほの  
 し暮くしとづかしながら天性てんせう愚頓ぐどんおして人の口くちおぬかりをけと名なを得えし事ことくちをしき次第しだい  
 ありたいし罪つみをつくらずいひるば佛果ぶつぐわを得えしとんやと問とひける一休いっけ聞きこし召めし中ちゆう々々とどがな  
 しといへどを佛ぶつおひなりがたし左様さやうのそのと愚僧ぐそうがゆるしても人がゆるさされを其落おつと  
 ころの地獄ぢごくを則すなはちわう地ぢとくといふあり但ただし今生こんじやうのおとくお後生ごせうの事ことを待まちせを佛果ぶつぐわと地  
 獄ぢごくと少すこまも疑うたがふとあつと仰おぼらせける

さて又因果いんぐわのむくもどやはなまをいたさふむかし今いま都みやこ今出川いまでがわのはどいお色いろごのみな  
 る男おとこありあるとに水みづ無な月つき糺ただの森もりの夕ゆふを、みうちひらいたる河原かはらおのり茶ちややたちあらひ  
 京中きやうぢゆうの上下じやうじやうつしては手洗てあらせ寄れがきよて汗あせをす、さ暑あつたをわすをかへる時分ときぶん西山しやんざんに入い日  
 かけ四五尺四五せきばかり残のこりまてさらひひの山やまおろしをひやく、お心こゝろよく又またを出だすの茶ちややの  
 机床きしどお腰こしをのけ休やすらふとまるお今出川いまでがわぐちのたより大勢おほしやう出い来きる内うちおをわさづきれあり  
 ふか々ふか々風俗ふうぶくれよさの年としふけたる焼やき一人ひとりつきてくるよくと目めをとなたすたるかに詠ひたて  
 むたる間まお近くちかく來きて此男こゝのがが茶ちややよつとといひわらむつやとてうたがらさめもた

かすして水とのみて片のげのかたへおむたと顔ふりてゐらるゝ娘見をを日ごる執心よ  
 おもふたる人の女房をやまでこれと夢のうつゝのどとろとくつゝ近づきて是とようお  
 とは参詣といひるをさきを最前よりこたさきをも見及びて居まぬらすれをほぞんじ  
 のかふりあちの人といかひ世話やたな人にてかやうなところへ参るととたらはれます  
 から参るといふでとほさりませぬとくしの里へちよつと往てまぬるとやて横にされ  
 てまぬりましたもへ誰まを逢とがいやあてとさきも参詞をものけませあんたといへば此  
 男それとまたくしよとつて罷あるまのちを尋ねさきお神前へとやふは参りなされた  
 はくは出お此うらお見へしおくれ家の人の見望とあるなればわれおてもるくは  
 すいとなされし日くれたまを私がお供をいたしは里へ参とは別義なしは歸りお  
 かならずおよりおされよといふを聞すでに女房と神前へはぬりたるうち男はうれしく  
 茶くひ暇に今の人のおとしたらばともくどめて玉それとゆふうちみとや只今歸をま  
 すととや日を暮れますするやいふを茶やのかくを心得てそりお袂をひかへはづは茶ひと  
 つとさしつけてかの奥の方ののりさしたへ引ばり行とこるへかの男出きたりてもとや

わたくしとのぬりますすとむりよといめて酒よとらめんとといふうちなんなく日も暮と  
 ましけれを此女衆もかねて此男がまゝるゐるよとしたりたるにや焼のあつるじののりと  
 物がたりするうちおつゝの間男となりて扱をきよと親里までおくり道とがら行末の落お  
 ふよどみをこや談合して人しれすそ夜いとまおひして別れたげにおさる世にと性  
 のわるい男も女もあるそのまや然るに人の心とそめるおいろをまそじやてそれをかり  
 でおく事の其のち二ヶ月三ヶ月と逢ふはさりてしたしきお互は心をかよとす折らら  
 東山の邊りに此女房の方の家へいつでも齊おおじやる出家は裕をせんだくたのまをこ  
 れも後生と念佛のたてお縫しまひわたりお硯のあるおまかせ其まゝの男のかたむち  
 上の文して書づれんとかさねとながみよ一日二日はとふくしくなつかしさに近さう  
 ちあかの方までほめあふりたさおるくかたまなぐさまつもるは物がたをいたま度  
 神のけておまごまぐと書てきりくしやんとすすぶとこころへ亭主何心かて来りしお  
 南無三寶どのや止血をわけおがら鑑立し此せんだくものし袖もちやくと入てかくせし  
 を亭主こきを見とておあがらともおた跡ももておし間近ぐりて飛かゝりまづせんだく



物をうむひとりらの文を取出し女め是とぬらふとひらた見せる女房たまらずとりの付をつれたをして何々ほさつかしとよあせよせ女とせとやつ、まれすなくよ走と込かみそり取てのきふへかさ、いたをきかざる亭主とこれとせじらす文二三へんよみかへし名が死を見るおそれ泡まぬるおたのまあるおとて此せんだくその主坊主めにまがひなし袂あるおとふしきなれさてとく畜生と女房を引たて見れととや息あるたりいとくかんよんちらすと其頃大守へうつたへければ坊主をゆして問ひせ玉ふよさらお覺へな死よし曇りかた通りあさらかみやせすれどと相手の女を死してかの裕のそでお入おさしお證據とありていひわけ立たたく終引わたされて女の死骸とそに木よのせられしといひ淺ましき事とて先世のいにかある因果がめくと來てのゆるらた目よあひぬらん人の身よといつてくひがめくり來るやらせしれぬと現世に覺へがなくおて此坊主のとと油斷とありませぬとまたかの間男めが科なき法師を殺したる因果のむくむおてその身の果ながくしきおはさしがのさる次おおとさしやとふ

○とるどころお何とぞちらざる邪氣ある男ありおまつてへ身とよろ一をして万不足と殊

よ下人多くもてりあまりとごのまをいわんとて表の入口に法度書をして入り其札よ

- 一 へつらひあつて奉公としがぢの事
- 一 つらひたをしの事くおたをしの事
- 一 せんときりのちとらひぢの事

とかやうお書て立をさけりあるとき一休をヤ入万の咄おとりて一休ヤさる、は何でこれれ表おとめづらしき札城のさて立玉ふあれと下々へは法度が死んで侍るの亭主なのく

おまたふ一休おらしく思ひ玉ひやがてかへりさほおのくか死をへらるゝ

へつらひてたれしよとせへつらはで  
まづしき身おとちろやとせおと

かを書ていそかにおしとかせて歸らまおり

○或人一休にとふていはく世の中の人の中事おてい人の人たるやいふ事はいかある事をやいや一休答へていんとくれば此坊主としらす足らん身よていもあいとんや人だ人たる事をしるふさやちりながら若人の心おしひつてやちしくと尋ね玉ふをしらぬとらふも

なをこれにていひむのし物しりたる人け咄しをちて聞はつり置いほどよすて見いとんまづ人  
 お人たる人て又人たらぬ人といひのちあるお人たる人を人とすげおいたとへば鷹なとれ鳥を  
 とく取と鷹の鷹たるに鳥得取らずして鼠なとをたると鷹の鷹たるお鷹とといひの  
 た一猫の鼠取とく取えぬまのねおたるよていへせし又鼠をを得とらずして着なんどを盗  
 みくらひいといひ猫の鼠たるにてよそいへねこの猫たるやといひおたし人の人たるや人の  
 の道をきりたる者をすげに又問ていひとて學文おうけ賣とす事のいひのちある事おてい  
 一休答ていはいはとされを是をしのやえ知らざる事ながらやて見いとんまづうけ賣やすはあ  
 るひと四條五條の辻よこまその店とて棚いどつわいろくさまぐのものを取あつたお  
 き人の用次第お賣そのよひ此者に一いろあてをわつらへて見玉へ何をよてを我が職おわ  
 らずして皆上手の仕置たるを請賣おいたしは問は用ならむ其人にあつらへて参らせんや  
 いふがとく學問よもうけ賣の人よと多くいへあつらへて行えん人とまれよまをいよめま  
 ぬお老子莊子諸子百家のよたはでを取はまて評論し物知いどのしると皆こまその店  
 お似てよそい買手の爲にえ用よこを立ともやあらん賣手とさせる商人にてをいとい一言

一句おてを我そのにして守り行ふ人とはるるにとくれてあまがたかるべしとやさるよか  
 きよれ人つとくぐと聞居てよても理りかなとてあつた感おける

○頃と七月十五日の夜若もれ、飛上りのあど先しらすの男一兩人やういひさやのたぐ  
 一休のかたへ行夜すがらあぐさまんとや一人がややうされを我等もてやうお存する處と  
 くことや出さきたりの坊主もうさあうさし坊主の事よしおれをよよひととさら十五日  
 いざく往てうのらかさんやとてうちつを行不とに折よく和尚寺おましくて何れもど  
 くよと参らきたを祝儀おまてとや酒盃出されて舞つうたひつするまゝ一休たつてお  
 どられ若る竹の切上のたまり水すすおごらす出お入らす人ともさざらとらむくちざりて  
 末までおげよ紅葉おそみよすいがかさるかこきを先ちる物でおどれやく人々よ若か  
 ふあしびある身のや只何事もかどをわかき時よとたをよもいたづらくるおとあるもの  
 よそれやるしいものでおおじやらめよく薬變じてくすりとありいおおおおげとぞ川を  
 た柳みづけ出たをなをあげさいおれをなげのをあげかうまてようららの身よのゝる事よて  
 あらとこと牛とすしづれ馬とさはづれぬたさうき世ととんちものさやと破を扇おやう

芝を取てうたはいらたへまこい舞へ釋迦ねおかりとやしめたら女くよい人々でござり  
 をおぞめ玉ふみな人とよきを見て扱々坊のおどりを久しよりで見ました歌のせうが一  
 だんおせしろしかて一度にどつとどらひけりいざく此おもしろさお町へ出ておどらん  
 坊も同道すべし一休心得たりや太郎次郎とや下人扱つを玉ひ已上四人の人々思ひく  
 むいでたらしが先和尚のしやうぞ々よのかつたいのさの布なげづきん紙子のそでなし羽  
 おりこしよと九廿五分にひやうたんとぶらりしやらりとぞげられけりわきざしと門前の  
 彦六が一子お竹がしやうぶがたさをねむらざしおひらたれたして出たまふさておど  
 りり五條の橋より四五丁西ありとてま、ぞくつさやうのをぞり場なまどてうちまじと  
 りて愛をせんぞとおどらる、彼二人のつきも見うしおひたい主従およそ成玉ふ何とした  
 まふらん足もとをまどろよあり若き女のたへらくとこるびのり玉へを女もとも  
 お土つろぞ彼をつとが是を見てそつじある曲者のなのがそまどといふま、に大をゑ上て  
 といか、る一休を心得たりといふま、お大とだねぎみとだねいで大手をひろげてのら  
 せけと五人三人取つたてゑなたへはせらく此方へとせらくとあしのあしかし戻しま

をし捨ぬふ其むまお頭巾早やぶれやひければ紙子とらしろのすそよりおぼんのくぼまで  
 引やぶり前後ふのくよひしめきけりのる所へ太郎次郎と見るよりをまかせたりといふ  
 まよ大はだねぎて相人のとねかど見ちがへておぼんのとねをむすどより曳やつといふ  
 て引はどおればんれつけよ打たふれ腰お付たるひやうたんと見ぢんよ成て失えけり大勢  
 打よりのろうせきとさせはじと我をくとししよるやがて坊とおきおがり東をさして  
 おけらる、下帯とつぎとけつまづき命のらぐしのでて寺へ販らる、おのしよりける事  
 ととなり

○都て大富家あるもの大事のとむらひをしける事ありあるよ折節導師にといのる人を  
 か請ぶ奉るべきと思案はちく暮しする其頃名あかた知識はたおとしけき中よをひ  
 らと野の一休和尚よししくとほらじと明日は法事よあどけれとていそぎ人扱を遣しお  
 る折とく和尚卿庵のちりをとらひ庭のさうましておとしはしけるが少そなづまぬは僧お  
 れ心安く領掌し玉ひけるが思しよる事のあるおややがてつがいに身に身をやつし手  
 足あす、扱おぞり付くさの衣をまどひもくつの中より出たるやうに身をやつし彼門よた

ちたまを食くのの、しるとくは供養くやうのは施行せうぎやうをたべは慈悲じひを下くださきよみとくぐりあつた  
 まひけるあるじ邪見よみけん腹はらを立見たてぐるく奴原やつらおひ出せよと下知げち茶ちれば其そのと下男げなん二三  
 人はしり出供養いこくやうは明日あすの事ことあるお今日けふ来ておめく曲者くまものやとて元もとよりたれとといさしらす  
 いたとしや一休いっけをた、き出いし奉ほうりさんぐにてうちやくしふみたをしてぞ入りお茶ちり一  
 休いっけのらた命いのちをやうくお助すけかい無むさんのしつさと思しめゝ繁野はんのへと販はんりたまふ明日あすお  
 となり茶ちを昨日けふのさまお引ひのへてあらたに湯ゆゆみし玉たまひて衣ころもを改あらため召めされつ、七丈ななぢやうの  
 は袈裟けさとととあがよ引ひかけ金襴きんらんまじりお取とつくらむもとよりのしやうよ見みへ玉たまふ一休  
 はよし玉たまふとといひ込こむ且かつ那な大だいおよろこび佛前ぶつぜんへこそせうぎけりされとを和尙わじやうと、み玉  
 とすいやそれまでいさめるはじ愚僧ぐそうとこれよひとていしうすおありおじりたまとす且  
 那なはそだつて是こゝと何なによとておとしますわらいまはしやこ、おと下郎げらうの薙はりこなたる  
 とふらせ玉たまへとて手てを引ひたて奉ほうれを一休いっけはらんぞてしからは此衣このころもに料供りやうぐを給たまへるべし愚  
 僧そうがたまとるへき子細こさいおしとて一首いっしゆの狂歌きやうかをのく

どうとこの三十棒さんじゆぼうをのくらな